

かながわの考古学

2012.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2012.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度も、各時代の研究プロジェクトチームが提出した共同研究と、個人研究の成果を掲載することができました。

旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の各研究プロジェクトチームは、設定したテーマの継続研究を続けております。弥生時代については新たなテーマを掲げて研究を行い、それぞれの目標に沿って検討を進めています。

また個人研究では今までの知識と経験を生かし、さらなる考古学の深化につながる研究を行っています。個人の能力・技術の研鑽と発展にも大いに役立つものと期待しております。

今後とも、こうしたグループの共同研究と個人研究を進めることにより、職員の資質向上が図られ、より充実した内容を発表することで、皆様にもその成果が還元できるようであれば幸いです。

本書における研究成果が埋蔵文化財調査や考古学研究に広く活用されると共に、郷土かながわの歴史を学ぶ一助となることを期待して、巻頭の言葉とさせていただきます。

2012(平成24)年3月

公益財団法人 かながわ考古学財団
理事長 伊藤啓三

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その5）－B1～L2層（まとめ）－ 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅲ 後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その3－ 縄文時代研究プロジェクトチーム	13
神奈川県内出土の弥生時代土器棺（1） 弥生時代研究プロジェクトチーム	21
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（9）－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－ 古墳時代研究プロジェクトチーム	31
神奈川県における古代の鉄（2）－生産関連遺物の集成－ 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	41
神奈川の中世城館（4） 中世研究プロジェクトチーム	59
近世民家の集成（9） 近世研究プロジェクトチーム	69
個人研究論文 神奈川県内出土装飾付太刀に見る象眼等の製作技術の研究 林 雅恵	79

例 言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。また財団法人かながわ考古学財団が平成22年度に研究助成を行った個人研究の成果を掲載する。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す）。
 - ・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム
○井関文明・◎大塚健一・栗原伸好・鈴木次郎・島中俊明・三瓶裕司・脇 幸生
 - ・縄文時代研究プロジェクトチーム
阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・岡 稔・小川岳人・○近藤匡樹・松田光太郎・◎宗像義輝
 - ・弥生時代研究プロジェクトチーム
飯塚美保・◎池田 治・櫻井真貴・新園基史・戸羽康一・○渡辺 外
 - ・古墳時代研究プロジェクトチーム
◎植山英史・○柏木善治・小西絵美・新山保和・林 雅恵
 - ・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
◎加藤久美・川嶋実佳子・齊藤真一・○相良英樹・諏訪間直子・高橋 香・中田 英・宮井 香
 - ・中世研究プロジェクトチーム
◎松葉 崇・○宮坂淳一
 - ・近世研究プロジェクトチーム
◎木村吉行・○澁谷正信

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その5)

— B1層～L2層(まとめ) —

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、2007年度から遺物分布の集成を行っている。これまでに漸移層から始まり、前年度はB1層～L2層出土石器群を対象として、その分布状態の集成を行った。しかし、集成の結果、資料数が多く、昨年度は一部を次年度送りとして集成表の提示のみで終了している。

今年度は、昨年度提示のデータを含め、B1層～L2層の各層位の石器集中について石器集中の分布範囲(規模)や分布密度、器種組成、石材組成、各種検出遺構との関係などについて、若干の検討を行った。ただし、全体の資料数が膨大なため、資料の一部はさらに次年度送りとしている。今後、B2層以下の各層位についても、集成作業を継続する予定であるが、各層位ごとの集成、検討を行った後、全体を通しての詳細なまとめを行う予定となっている。

(大塚)

1. B1層上部の石器集中

ここではB1層の特に上部・上面出土の石器群を対象として若干の検討を行う。当該層位出土石器群は、概ね相模野編年(諏訪問 1988・2001以下同)の段階Ⅶ(ナイフ形石器を伴う段階)にあたり、出土層位はB1層上部～上面とされる。段階Ⅶはナイフ形石器文化期として捉えられ、石器組成はナイフ形石器を中心としている。前段階の段階Ⅵがいわゆる「砂川期」として捉えられており、本段階はナイフ形石器が小形化し、「砂川型刃器技法の崩壊段階」「ナイフ形石器文化の最終末段階」として位置づけられている。石器組成としてはナイフ形石器の他に、尖頭器、彫器、搔器、削器などが含まれてくる。また石材組成では黒曜石が圧倒的に多くなる傾向が指摘されている(諏訪問 前同)。

今回集成を行った対象資料は、当該層位出土の石器群と捉えられるもの、層位的に符合するもの、層位幅をもって報告されている石器群(B0層～B1層、B0層下部～B1層、L1H層～B1層など)、その他、特に相模野台地以外の遺跡の報告にまみえられるB1層相当層としたものについても対象とした。こうした集成資料は、「神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その4)」(旧石器時代研究プロジェクト 2010)と、本稿第1表に示してある。

当該石器群を検討するにあたり、まず前提として集成した資料を対象に検討を行っている。前述のとおり出土層位がB1層上部もしくはB1層上面を出土層位として捉えられる資料を抽出し対象とした。まず集成資料全体としては、25遺跡190ブロック(ユニット・石器集中等の表記があるがここではブロックとして統一表記する)が集成され、主な遺跡としては、寺尾遺跡Ⅲ(遺跡名の後ろのローマ数字は文化層を指す、以下同)、早川天神森遺跡Ⅲ、吉岡遺跡群B区(B1出土)、深見諏訪山遺跡Ⅲ、月見野遺跡群上野遺跡第1地点Ⅳ、台山遺跡Ⅲ、長堀北遺跡Ⅴ、下鶴間長堀遺跡Ⅱ、長堀南遺跡Ⅲ、上草柳第3地点Ⅲ西、今田遺跡Ⅱ、代官山遺跡Ⅳ、田名向原遺跡、塩田遺跡群A地区などである。各ブロックの1ブロックにおける出土点数は、田名向原遺跡住居状遺構(第1図)における2981点を最大とし、深見諏訪山Ⅲ№2(ローマ数字後の№はブ

ブロック番号を示す。以下同)、月見野上野IV№28、長堀北V№5・7～9、代宮山IV№Eなどの2点が最小である。1遺跡におけるブロック数は、月見野上野IVの37ブロックが最大である。ただし、これは調査面積によるところも大きいと思われるが、月見野上野は10000㎡以上を調査して37ブロックが検出され、深見諏訪山田などは300㎡足らずで10ブロック検出されている例もあり、一概に調査面積に比例するものではない。以下、各集成項目を元に、石器群の分布状況や器種・石材組成等について記述を進める。

a) 石器集中の器種組成

ブロックごとの器種組成の中心となるのは、剥片・砕片を除き、やはりナイフ形石器といえる。190ブロック中111ブロックでは、少なくとも1点以上のナイフ形石器が伴っており、次いで尖頭器、搔器、彫器、削器などが挙げられる。概ね各ブロックの石器組成中にナイフ形石器が占める割合は1桁台、多くても20%前後である。しかし、深見諏訪山遺跡III№1や№5では、90%前後をナイフ形石器が占め、非常に高い組成率を示す。次に特徴的に入る器種としては、尖頭器が挙げられ190ブロック中52ブロックが該当する。尖頭器を主体とするブロックも、概ねナイフ形石器同様の組成率であるが、国指定史跡田名原遺跡では、1ブロックで200点近い尖頭器が出土している例も見られる。このような事例は、そのブロックが果たした機能差を示す場合もあり、全体的な傾向を見出そうとするときには、逆に特異な事例として捉えられよう。

まとめると、石器組成としては、ブロック出土石器全体の10%前後をナイフ形石器もしくは尖頭器が占め、これに彫器、搔器、RF、UF等が若干加わり、残りを剥片・砕片などで占める形が平均的な様相として捉えられよう。

b) 石器集中の石材組成

石材組成としては、黒曜石が主体となることは既に指摘されておりとおりであり、今回集成した資料を見ても、石材組成のうち石材内訳の分かるブロックは124ブロックあり、そのうち63ブロックで黒曜石が50%以上の組成率を示している。ただ50%を越えないまでも、大部分のブロックで黒曜石が主要な石材として扱われていることは、集成結果を見ても分かる。逆に黒曜石を含まないブロックは124ブロック中27ブロックである。黒曜石以外の石材としては、いわゆる在地系石材とされる安山岩系の石材、凝灰岩系の石材、頁岩、チャートなどが見られる。こうした石材種は、県内各時期の石器群でも見られるものではあるが、前述のように黒曜石の使用頻度が高い状況は、本時期の特徴として捉えられよう。

c) 石器集中と遺構分布

各ブロックの分布密度を表に示してあるが、分布密度は出土点数を分布面積で除した数値である。こうした数値を割り出せた159ブロックの平均値は5.6である。このうち最大密度を示すのは吉岡遺跡群B区の第1ブロックの73.18である(第2図)。これに次ぐのが塩田遺跡群A地区の第5ブロック(第2図)の35.15や月見野遺跡群上野遺跡第1地点第10ブロックの34.3である。平均値との対比からも非常に高い数値であることが分かる。ただし平均値にあるとおり、一桁台の分布密度が一般的な傾向といえる。

遺群は本層位出土の石器群には、普遍的に伴うものであるが、ブロックに共存する遺群としては、190ブロック中45ブロックにある。遺跡単位で見ると遺群はほぼ全遺跡で検出されている。概ね傾向としては、遺物分布は散漫へやや集中した状況で遺群を伴うものとききよう。(大塚)

2. B1層下部の石器集中

ここでは、相模野基本層位において概ねB1層中部～L2層の石器群を対象とし、相模野第IV期前半(鈴木・矢島 1976)・段階VI(諏訪問 1988)とされる時期に相当する。この時期の年代観は、C14年代測定結果等から、およそ2万年数千年前に遡ると考えられる。この時期の石器群は、上下に打面を設定した角柱状の石核から石刃状の縦長剥片を連続的に剥離し(「砂川型刃器技法」と呼ばれる)、得られた石刃状の素材を斜めに所ら切るように調整を施した二側縁加工のナイフ形石器を特徴とし、しばしば刃部に槌状剥離をもつ両面調整の槍先形尖頭器も伴う(旧石器時代プロジェクトチーム 1996)。なおここでは、石器の視覚的な纏まりによる石器集中地点をブロック、ブロック間において接合や同一母岩の共有等により有機的な繋がりをもった範囲(しばしばユニットなどとも呼ばれる)をブロック群と捉えておきたい(第3図上)。

今回、県内の27遺跡、29文化層、316ブロックを集成したが、ここでは便宜的にブロック数が3箇所以上または、遺物総点数が100点を超える比較的多くまとった資料が得られた遺跡について検討する。なお、内容が不明確なものについては割愛した。

かつて、当該期の石器群を修正した際、ブロックの検討がなされた(白石 1996)。ここでは、ブロックがしばしば崖線に沿って弧状ないしは谷を囲んで「い」の字状に配置されることが多いことが指摘されている。そしてそれは、直線的な移動パターンと関連づけられている。

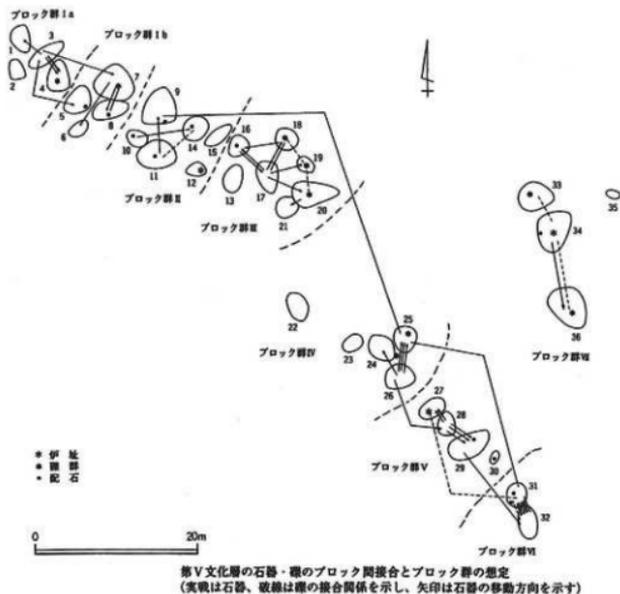
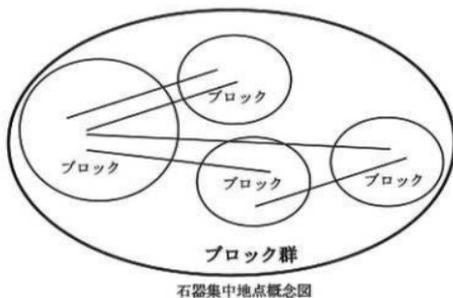
第3図下は、宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡第V文化層の石器ブロックの分布状況である。ここでは、36カ所のブロックのうち2～7ブロックの集合した8カ所のブロック群が捉えられている。これら「8カ所のブロック群は、すべておおよそ共通した規模と内容をもっている。そして、これらのブロック群がほぼ直線上に配置していることも特徴である。」という。同様な分布状況が看取できる遺跡としては、栗原中丸遺跡第V文化層、寺尾遺跡第IV文化層、福田丙二ノ区遺跡第1文化層、長瀬北遺跡第VI文化層、長瀬南遺跡第IV文化層、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第V文化層など、当該期に特徴的というよりむしろ一般的なあり方と捉えられるであろう。

一方、吉岡遺跡群B区(2次)第IV文化層や原口遺跡では、やや特殊な分布を見せる。吉岡遺跡群B区(2次)第IV文化層と用田鳥居前遺跡第IV文化層第3石器集中地点では遺跡間接合が確認された。両者は直線距離でおおよそ2km隔てて存在し、3つの石材(硬質繊維凝灰岩、黄玉、珪質頁岩)が接合している。吉岡遺跡群B区では、大規模なブロックを形成し、用田鳥居前遺跡では小規模なブロックで構成されており、吉岡遺跡群B区で製作された石器を用田鳥居前に持ち込み放棄したものも捉えられている。ここでは、石器製作地(本拠地)と石器消費地(野営地)の関係が示唆されている(吉田 2010)。これとよく似た石器製作地の様相を呈する遺跡が、平塚市の原口遺跡第1文化層と考えられる。ここでは、帯状に4000点余りの石器が密集した仮1ブロックと、同じく1000点を超える仮3ブロックが石器の接合関係を持っておよそ60m隔てて分布している。

以上、雑ばくではあるが、当該期におけるブロックの分布について2つの様相を概観した。今後、調査事例の増加により、石器製作を中心とした拠点的な遺跡の存在も明らかになるものと思われる。(晶中)

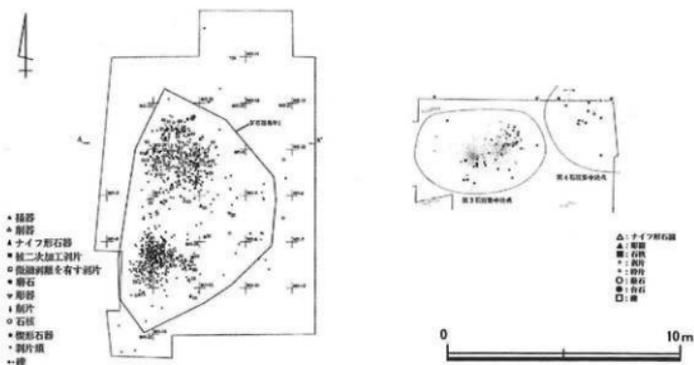
おわりに

今回は、B1層からL2層にかけての石器群における石器集中地点を集成したが、その膨大な資料数のため、2年に渡る収集にもかかわらず今年度も全てを表にすることは出来なかった。来年度も引き続きデータ収集を継続する予定である。(晶中)

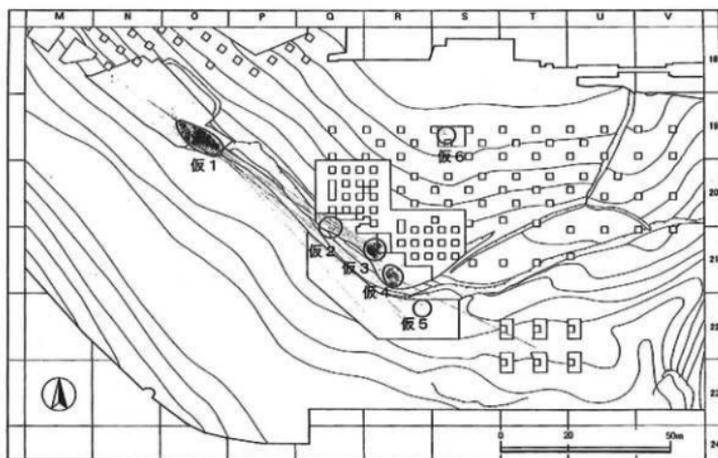


第3図 石器集中地点概念図と宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡のブロック群 (1997 宮ヶ瀬遺跡群XIIより抜粋)

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その5)



吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の石器分布状況(左吉岡・右用田)



第4図 吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の接合(上)(2010 吉岡の図を改変)
および原口遺跡第1文化層石器分布状況(下)(2002 原口IVを改変)

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No.	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	備考 (共存する遺構など)
107	今田	BIU	II	-	1	3.1×1.3	12	2.97	密集	UF1, F3, 甲4, 台石4	砂5, 安4, 閃1, 燧2	雑群2
107	今田	BIU	II	-	2	3.1×1.8	13	2.32	密集	ナ1, スク1, 燧2, ビュス1, RF1, F4, 甲3	黒4, 凝4, ナ1, 砂2, 泥1, 閃1	雑群1
107	今田	BIU	II	-	3	3.8×1.2	17	3.72	密集	ナ2, ビュス1, UF1, F10, 核1, 甲1, 台石1	黒6, ナ4, 砂1, 凝3, 閃1	雑群1
107	今田	BIU	II	-	4	3.0×1.9	16	2.80	密集	ナ3, RF6, F7	黒15, ナ1	
107	今田	BIU	II	-	5	3.4×2.4	10	1.22	密集	ナ1, F8, 核1	黒2, ナ1, 安7	雑群2
107	今田	BIU	III	-	1	2.9×1.6	15	3.09	密集	ナ4, 尖1, F7, 核2, 燧器1	黒11, 凝1, 砂3	
107	今田	BIU	III	-	2	0.6×0.5	9	30.00	密集	ナ2, スク3, RF2, 核1, 甲1	ナ6, 砂3	
109	代官山	BIU	IV	18750	A	-	4	-	-	ナ1, 尖2, F1	黒4	
109	代官山	BIU	IV	18750	B	-	200	-	-	ナ3, 尖8, 削1, F36, 核1, RF8, UF1, C142, 網鏝器1	黒200, 凝1, 頁1	
109	代官山	BIU	IV	18750	C	-	13	-	-	燧1, 燧器2, RF1, F3, C6	黒11, 凝1, 砂1	
109	代官山	BIU	IV	18750	D	-	15	-	-	ナ1, 尖2, F4, C8	黒15	
109	代官山	BIU	IV	18750	E	-	2	-	-	ナ1, F1	黒2	
109	代官山	BIU	IV	18750	F	-	5	-	-	ナ1, 尖1, F2, C1	黒5	
109	代官山	BIU	IV	18750	G	-	7	-	-	RF1, F2, C4	黒7	
109	代官山	BIU	IV	18750	H	-	4	-	-	ナ2, 核1, 甲1	黒1, 凝1, 砂1, 珪頁1	
109	代官山	BIU	IV	18750	I	-	3	-	-	F1, C2	黒3	
109	代官山	BIU	IV	18750	J	-	19	-	-	ナ2, RF2, UF2, F10, C3	黒18, 頁1	
109	代官山	BIU	IV	18750	K	-	15	-	-	ナ4, 削1, RF1, F8, C1	黒3, 珪頁12	
109	代官山	BIU	IV	18750	L	-	4	-	-	ナ2, F2	黒2, 頁1, 珪頁 1	
109	代官山	BIU	IV	18750	M	-	4	-	-	F3, C1	珪頁4	
109	代官山	BIU	IV	18750	N	-	6	-	-	ナ2, UF2, F1, C1	黒5, 珪頁1	
109	代官山	BIU	IV	18750	O	-	4	-	-	F3	頁3	
109	代官山	BIU	IV	18750	P	-	3	-	-	F3	粘3	
109	代官山	BIU	IV	18750	Q	-	3	-	-	RF1, UF1, F1	黒1, 凝2	
109	代官山	BIU	IV	18750	R	-	26	-	-	ナ1, RF1, F9, 甲1, C14	黒3, 凝23	雑集中1
109	代官山	BIU	IV	18750	S	-	6	-	-	ナ2, UF2, F2	黒1, 凝1, 頁4	
109	代官山	BIU	IV	18750	T	-	13	-	-	ナ2, UF4, F3, 核1, 甲1, C2	黒7, 凝2, ナ1, 頁2, 砂1	
109	代官山	BIU	IV	18750	U	-	45	-	-	ナ2, RF4, F19, 核1, 甲2, C17	黒30, 凝5, 頁6, 砂2, 珪頁3	雑集中1
109	代官山	BIU	IV	18750	V	-	12	-	-	ナ3, 削1, UF3, F3, 核1, C1	黒10, 凝1, 頁1	
109	代官山	BIU	IV	18750	W	-	14	-	-	ナ2, RF2, F6, 核1, C3	黒4, 凝10	雑集中1
109	代官山	BIU	IV	18750	X	-	3	-	-	ナ1, 尖1, 核1	黒2, 凝1	
109	代官山	BIU	IV	18750	Y	-	3	-	-	F2, C1	黒3	
109	代官山	BIM	V	18750	A	-	7	-	-	ナ1, RF1, F4, C1	黒7	
109	代官山	BIM	V	18750	B	-	8	-	-	ナ2, 尖2, 削1, 燧1, F1, 甲1	黒6, ナ1, 砂1	
109	代官山	BIM	V	18750	C	-	7	-	-	ナ1, 燧1, UF2, F2, C1	黒6, ナ1	
109	代官山	BIM	V	18750	D	-	3	-	-	ナ2, F1	黒2, ナ1	
109	代官山	BIM	V	18750	E	-	4	-	-	UF1, F3	ナ4	
109	代官山	BIM	V	18750	F	-	6	-	-	燧1, F3, 核1, C1	凝5, ナ1	
109	代官山	BIM	V	18750	G	-	246	-	-	ナ3, RF6, UF36, F64, 核2, C135	黒3, ナ243	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その5)

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m ²)	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共伴する遺物など)
109	代官山	B1M	V	18750	II	-	5	-	-	UF4、核1	チ4	
109	代官山	B1M	V	18750	I	-	8	-	-	ナ1、RF1、UF1、F3、C2	黒7、頁1	
109	代官山	B1M	V	18750	J	-	1	-	-	F1	黒1	
111	南船泊山	L1L ~ B1U	-	49700		6.7×13.7	60	0.65	やや 密集	ナ2、削1、RF1、 核2、F50、C3、 F1	黒14、珪頁33、 頁10、珪2、 核1	
116	南葛野	L1L ~ B1U	I	8425	I-3 -S1	9.0×7.0	41	0.65	やや 密集	ナ1、削1、 RF1、石刀6、 石刀状F2、核1、 F-C類20、核1	黒39、礫砂、 チ1	
116	南葛野	L1L ~ B1U	I	8425	I-6 -S1	8.5×4.0	59	1.74	密集	ナ3、RF5、 石刀1、削1、 F-C類9	黒59	炭化物集中
116	南葛野	L1L ~ B1U	I	8425	I-6 -S2	9.0×5.5	361	7.29	密集	土1、ナ24、 RF6、石刀17、 F-C類308、 核1、核1	黒359、珪頁1、 チ1	
116	南葛野	L1L ~ B1U	I	8425	I-13 -S1	8.0×5.6	13	0.29	散発	削1、RF1、核1、 F-C類10	黒1、珪頁12	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	I-S1	3.4×3.2	3	0.27	やや 散発	ナ2、RF1	黒、珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	2-S1	3.7×2.8	11	1.06	密集	ナ1、F10	黒	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S1	3.6×3.4	8	0.65	やや 密集	RF1、F7	黒、珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S2	6.4×5.4	66	1.91	密集	ナ1、核1、核1、 F57	黒、珪頁、 礫砂	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S3	6.0×5.3	52	1.64	密集	ナ1、RF1、核3、 核3、F44	黒、礫砂、 珪頁、砂泥、 珪頁、珪	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S4	2.0×4.4	8	0.91	やや 密集	F8	黒、珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S5	5.8×6.6	112	2.93	密集	ナ3、RF2、核2、 F105	黒、頁、 珪頁、珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S6	3.8×5.6	62	2.91	密集	ナ3、削2、RF1、 核3、F53	黒、珪頁、 珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S7	2.6×3.4	6	0.68	やや 密集	ナ1、削1、F4	黒	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S8	4.4×4.4	19	0.98	やや 密集	ナ4、F15	黒	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S9	4.2×3.2	16	1.19	密集	ナ4、RF2、核1、 F9	黒、砂	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S10	6.4×6.2	59	1.49	密集	ナ5、RF2、核2、 F50	黒、チ	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S11	3.6×3.0	3	0.27	散発	F3	黒、チ	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	6-S12	6.8×8.6	120	2.95	密集	ナ2、RF3、核3、 F112	黒、珪、チ、 珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	8-S1	3.4×2.6	10	1.13	密集	削1、F9	黒、珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	8-S2	2.8×2.6	4	0.55	やや 密集	核1、F3	チ、珪頁	
118	慶応FSC	L1M ~ B1U	II	38000	8-S3	2.5×3.2	4	0.50	やや 密集	F4	黒、珪頁	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No.	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	備 考 (共存する遺構など)
118	鹿志 FSC	L10H ~ B1U	II	38000	8-S4	3.6×2.6	3	0.32	散漫	F3	チ、珪頁	
118	鹿志 FSC	L10H ~ B1U	II	38000	8-S5	3.4×3.6	12	0.98	やや 散漫	槌1, F11	チ、珪頁、黒	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	3-S1	2.8×3.8	14	1.79	密集	RF1、槌1、F11	チ、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	3-S2	3.2×4.0	9	0.70	やや 密集	槌1、槌1、 石刃11、F6	珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	3-S3	3.4×2.8	4	0.42	散漫	削1、F3	珪頁、燧石	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	3-S4	2.0×2.2	3	0.68	やや 密集	R1、F2	珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	3-S5	2.2×2.6	3	0.52	やや 密集	ナ1、F2	燧石	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	7-S1	2.8×3.4	11	1.16	密集	F11	珪頁、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	7-S2	5.4×4.6	104	4.17	密集	ナ5、削1、RF3、 石刃3、槌3、 F89	珪頁、珪頁、 頁、黒	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S1	3.6×3.2	10	0.87	やや 密集	槌1、F9	赤チ、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S2	5.2×4.8	34	1.36	密集	ナ1、RF1、削1、 槌2、F29	珪頁、砂	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S3	2.6×3.2	4	0.48	散漫	槌1、F3	珪頁、頁、チ	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S4	2.5×2.6	3	0.46	散漫	F3	珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S5	5.2×4.4	146	6.38	密集	ナ4、RF1、 石刃7、槌2、 F132	珪頁、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S6	4.4×3.2	11	0.78	やや 密集	F11	珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S7	4.4×4.6	30	1.48	密集	ナ3、削1、RF2、 槌2、石刃1、 F21	珪頁、頁、 珪頁、チ	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S8	0.5×0.2	3	30.00	密集	F3	珪頁、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S9	5.0×2.6	10	0.77	やや 密集	RF1、F9	黒	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S10	4.2×3.6	35	2.31	密集	ナ1、槌1、F33	珪頁、珪頁、 チ	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S11	2.2×3.2	6	0.85	やや 密集	ナ2、F4	珪頁、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	8-S12	4.7×6.5	86	2.81	密集	ナ2、削1、RF3、 石刃5、槌5、 F70	珪頁、珪頁、 黒、チ	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	9-S1	2.8×3.8	8	0.75	やや 密集	槍1、F1	黒、チ、珪頁	
118	鹿志 FSC	B1L ~ L2	III	38000	9-S2	3.0×2.4	4	0.56	やや 密集	F1	珪頁	
219	藤沢市No.419 第1地点	B1 ~ L2U	II	19		3.1×1.9	22	3.70	密集	ナ4、槌1、RF4、 UF3、F7、C3	黒21、安1、	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その5)

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m ²)	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共存する遺構など)
219	藤沢市№419第2地点	B1L ~ L2	Ⅲ	23		5.5×4.5	14	0.56	やや密集	ス1、BF1、UF2、 敷1、F6、C3	黒6、チ1、 硬中2、中硬1、 芳黒安1、閃1、 硬頁1、ホ1	
219	藤沢市№419第2地点	B1L ~ L2I	Ⅲ	29.5		5.7×4.0	3	0.10	散漫	BF1、核1、F1	黒2、硬中硬1	
220	福寿台地遺跡群 I地点	B1	-	1,035	1	5.6×4.4	21	0.85	やや密集	ナ3、BF1、 UF3、F類13、 核1	黒20、チ1	種群2(直下に)
222	香行	B1M	I		1	3.4×3.0	56	5.50	密集	ナ12、UF1、 F類42、核1	安45、ナ11	
243	本入ごっこ原	B1U	Ⅲ	6200	1	20.0× 30.0	259	0.40	散漫	核1、ナ1、 彫1、彫2、 彫3、彫4、 F80、C149	硬凝12、黒7、 中6、登4、流4、 ホ4、核凝2、安3、 核3、芳黒安2、 硬中2、細凝2、 注凝1、ナ1、 硬頁1、頁1、 砂1	
244	大島神ノ谷	B1	-	830		4.0×2.0	111	13.88	密集	ナ1、UF3、 BF1、F09、 C33、核3	凝42、ホ32、 黒34、ナ2、 頁1	
335	用田島居前	B1	Ⅳ	100	1	1.5×7.5	175	2.00	密集	ナ3、核1、 削1、F162、 核6、磨2	硬頁88、 硬凝凝74、 中凝2、黒6、 ホ4、緑安1	
335	用田島居前	B1	Ⅳ	27	2	3.8×3.4	6	0.46	散漫	F5、核1	硬凝凝5、黒1	
335	用田島居前	B1	Ⅳ	44	3	4.6×2.9	43	3.20	密集	ナ2、彫1、 F20、C1、核2、 彫16、台1	硬凝凝22、 安17、中凝1、 彫2、彫1	
335	用田島居前	B1	Ⅳ	44	4	1.7×2.5	2	0.47	散漫	削片2	彫1、頁1	
335	用田島居前	L2	V	12	1	2.3×2.6	113	18.90	密集	核5、F88、C20	方安113	
335	用田島居前	L2	V	15	2	4.1×2.0	8	0.98	やや密集	ナ1、削1、F6	方安8	
336	志原渡谷	B1U	Ⅲ	8620	1	2.5×2.5	130	20.80	密集	核2、削1、BF4、 F-C類121、核1	黒129、 硬凝凝1	
361	福寿台地遺跡群 中部第2地点12地区	L1H ~ L2	-	25	1	僅1.5	2	-	-	F2	ホ1、頁1	
362	志原東山田地区 第4地点	L1H ~ B1	-	175	単	-	2	-	-	核1、C1	黒2	
363	萬籬沢大谷	B1U	I	5940	1B	2.5×2.2	109	19.82	密集	核1、BF1、F107	黒59、安50	
363	萬籬沢大谷	B1U	I	5940	単	-	4	-	-	F4	黒1、安1、 頁1、ホ1	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	1B	5.7×3.1	17	0.96	やや密集	ナ2、UF1、F14	黒4、凝7、 安2、頁2、 ホ2	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	2B	2.3×2.1	8	1.66	密集	ナ1、UF1、F6	凝6、ホ2	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	3B	2.7×1.8	21	4.53	密集	UF1、F18、核2	黒2、凝14、 頁3、ホ2	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	4B	5.0×2.8	15	1.07	密集	ナ1、F12、核2	黒1、凝9、 頁1、ホ4	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	5B	5.0×3.1	18	1.16	密集	ナ2、F15、磨1	凝16、ホ1、 砂1	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	6B	3.9×1.6	15	2.40	密集	ナ3、UF1、F11	黒2、凝10、 頁3	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	7B	1.7×1.2	5	2.45	密集	BF1、UF1、F3	安1、頁2、ホ2	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	8B	6.0×4.0	26	1.08	密集	ナ2、BF1、F21、 核2	黒14、凝2、 ナ2、頁4、ホ1	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	9B	2.7×1.5	20	4.94	密集	UF1、F17、核2	黒1、凝12、 ナ6、頁1	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	10B	4.9×3.3	15	0.93	やや密集	F14、核1	凝6、ナ3、 頁4、ホ2	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	11B	5.5×3.5	187	9.71	密集	ナ9、彫1、BF2、 F162、核13	黒3、凝90、 安11、ナ2、 頁12、ホ69	
363	萬籬沢大谷	B1L	Ⅱ	5940	単	-	23	-	-	ナ1、BF1、F20、 核1	黒10、凝7、 安2、頁3、ホ1	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積 (㎡)	各集中No.	分布範囲 (m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共存する遺構など)
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	1	5.0×6.0	67	2.68	密集	ナ9、楕1、F39、C18	黒67	
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	2	4.0×3.0	56	4.67	密集	UF2、F20、C34	黒56	
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	3	6.0×3.0	30	1.67	前集	ナ4、BF2、F13、C10、楕1	黒29、珪1	
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	4	7.0×3.5	83	3.39	密集	尖3、ナ8、楕1、F24、C45、楕2	黒81、砂1、輝1	1号遺群
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	5	6.0×5.5	223	6.76	密集	ナ17、BF2、BF2、F105、C92、楕2、楕2、ナ1	黒220、粗珪1、安1、砂1	炭化物
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	6	3.0×6.0	25	1.39	密集	F1、F20、C4	黒25	
364	福田西二ノ区	B1U	I	1100	7	6.5×4.5	103	3.52	密集	尖1、ナ9、篠南1、BF1、F40、C51	黒103	
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	1	2.0×3.0	21	3.50	前集	ナ6、F-C類14、楕1	黒13、硬珪7、ス1	1号遺群
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	2	6.0×3.5	17	0.81	やや密集	ナ1、彫1、削片1、F-C類11、楕1、楕1	硬珪5、中珪1、黒頁4、黒4、ホ1、砂1、安1	2号遺群
364	福田西二ノ区	B1M	II	1100	3	4.0×4.0	101	6.31	密集	ナ5、楕・削5、BF1、F-C類87、楕2、楕1	黒頁4、硬珪35、中珪1、黒頁1	3号遺群 炭化物
364	福田西二ノ区	B1M	II	1100	4	2.0×3.0	29	4.83	密集	ナ4、BF1、F-C類23、楕1	硬珪28、方安1	
364	福田西二ノ区	B1U ～ M	II	1100	5	5.5×3.0	11	0.67	やや密集	ナ2、F-C類9	黒11	
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	6	5.0×4.5	28	1.24	前集	ナ4、F-C類19、楕5	硬珪11、黒8、ナ3、黒頁1、方安1、硬頁1、珪頁1、紫頁1、赤玉1	
364	福田西二ノ区	B1M ～ L	II	1100	7	4.0×4.0	74	4.63	密集	ナ5、彫1、BF4、UF1、F-C類60、楕3	硬珪51、黒8、ナ7、方安4、硬頁2、黒頁1、珪頁1	炭化物
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	8	3.5×2.5	93	10.63	前集	ナ11、F-C類76、楕5、楕1	珪頁31、硬珪27、黒頁16、ナ14、楕2、黒1、方安1、中珪1	
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	9	3.0×3.5	80	7.62	前集	ナ5、楕・削1、彫1、楕2、BF3、UF1、F-C類66、楕1	硬珪39、硬頁15、方安10、黒9、黄玉2、ホ2、黒頁1、輝1、砂1	
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	10	5.5×3.5	120	6.23	密集	ナ8、楕1、BF1、F-C類107、楕2、彫1	硬珪49、方安31、黒頁20、黒11、ナ2、珪頁1、削片1、紫安1、安2	5号遺群 炭化物
364	福田西二ノ区	B1L ～ L2U	II	1100	11	3.5×2.0	12	1.71	密集	ナ1、F-C類9、楕1、彫1	硬珪8、方安1、珪頁1、輝1、流1	6号遺群
364	福田西二ノ区	B1L	II	1100	12	3.5×1.5	7	1.33	密集	ナ1、F6	方安2、ナ2、硬珪1、黒頁1、珪頁1	
364	福田西二ノ区	B1L ～ L2U	II	1100	13	2.5×2.0	12	2.40	密集	ナ2、UF1、F9	方安6、珪頁2、黒頁1、硬珪1、硬頁1、珪頁1	7号遺群
364	福田西二ノ区	B1M ～ L	II	1100	14	3.0×2.0	7	1.17	前集	F5、楕2	硬珪4、ホ1、硬頁1、紫頁1	

※「分布状態」については、「分布密度」が0～0.5未満を散発、0.5～1.0未満をやや密集、1.0以上を密集として表記している。

※訂正：昨年度掲載した一覧表の深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層（記要16 p8、6～14頁）の出土層位はすべてB1L。

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

—後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その3—

—堀之内1式土器の変遷—

縄文時代研究プロジェクトチーム

はじめに

平成21年度から神奈川県における後期前葉の堀之内式土器文化期の様相について研究を開始した。21年度は報告書を中心とした文献収集、基礎的なデータベースを作成し、その成果を『研究紀要15』に掲載している。昨年22年度は堀之内1式の編年案構築に向け、資料のデータシートを作成し、住居址検出遺跡の集成と住居址・土坑あるいは層位的な一括出土事例の比較検討を行った。『研究紀要16』に県内の当該時期における良好な一括出土事例12例を掲載した。3年目となる今年度は、抽出した一括出土事例を中心とした資料の検討を行い、先学の研究成果を参考としながら、現時点における堀之内1式期の編年案構築を目指す。

堀之内1式には器形と文様の構成を異とする複数の土器群が認められ、地域性を示しながら、それぞれが系統的に変遷することが知られている。こうした堀之内1式の土器群については、すでに『研究紀要15』で研究略史として述べたように、堀之内1式については鈴木徳雄による「6類型」の系統（縄文セミナーの会2002『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』）、石井寛による「6類型」と「5細別案」（石井1993「堀之内1式土器に関する問題」『牛ヶ谷遺跡 華藏台南遺跡』）がある。本稿においては一括出土事例に依拠し、石井の提示した6類型についてその時間的変遷を追い、また各段階に伴う注口土器や浅鉢について述べる。

ここでは石井が提示した堀之内1式の6類型（石井1993）を概ね以下のように理解しておく。

A群：称名寺式土器の系譜を引くもの。キャリパー状の器形で、沈線により称名寺式土器に見られたJ字や剣先状のモチーフあるいは、それが単純化したとみられるU字や逆U字の懸垂文を描く。

B群：キャリパー状を呈し、複数の沈線による直線的な懸垂文と斜行文によって文様を構成するもの。

C群：外反する口縁から頸部を無文とし、胴部へ文様を施すもの。IからIII群に細別される。器高に対し口径が大きくなる所謂「金魚鉢」の器形を多くみとめるが、一方で石井も述べているように後述するD群との判別に苦慮する事例がある。

CⅠ群：胴部に渦巻文を配置し、それを斜行文などで繋ぐもの。

CⅡ群：胴部の文様構成が懸垂状となるもの。

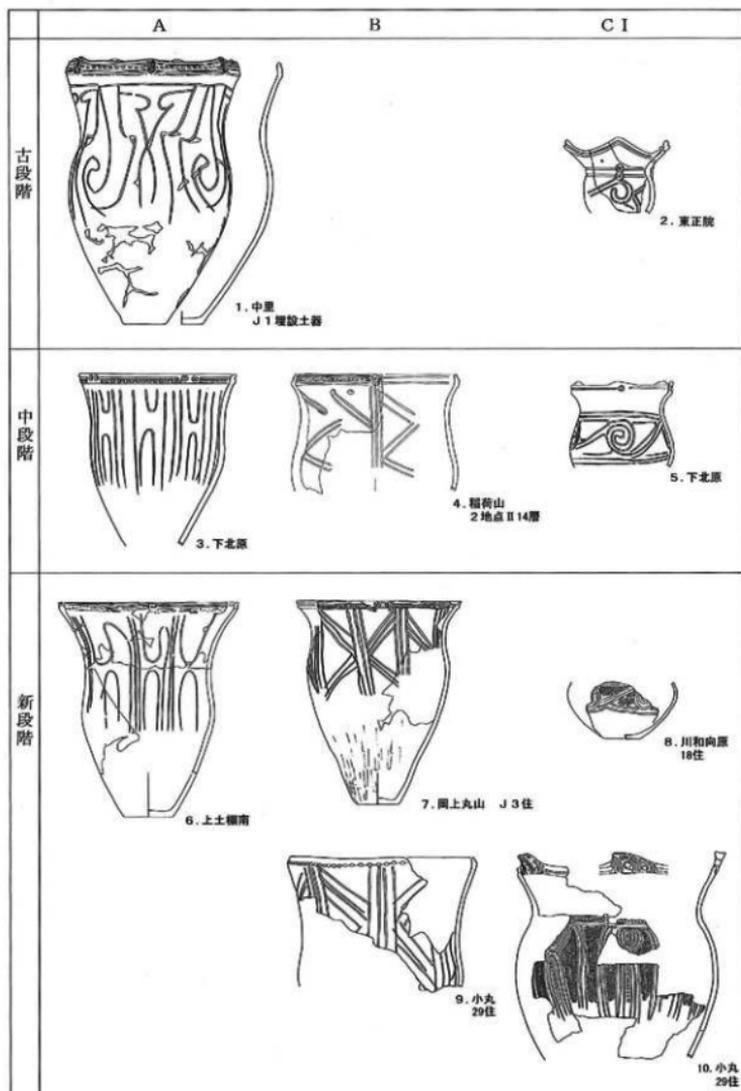
CⅢ群：胴部の横位の文様帯を配するもの。

D群：口縁部を無文とし、胴部に文様を施す網取式の系譜を引くもの。網取式の器形を踏襲し、C群に比較して、口縁部の無文帯は狭く頸部の窄まりも著しくない傾向にある。

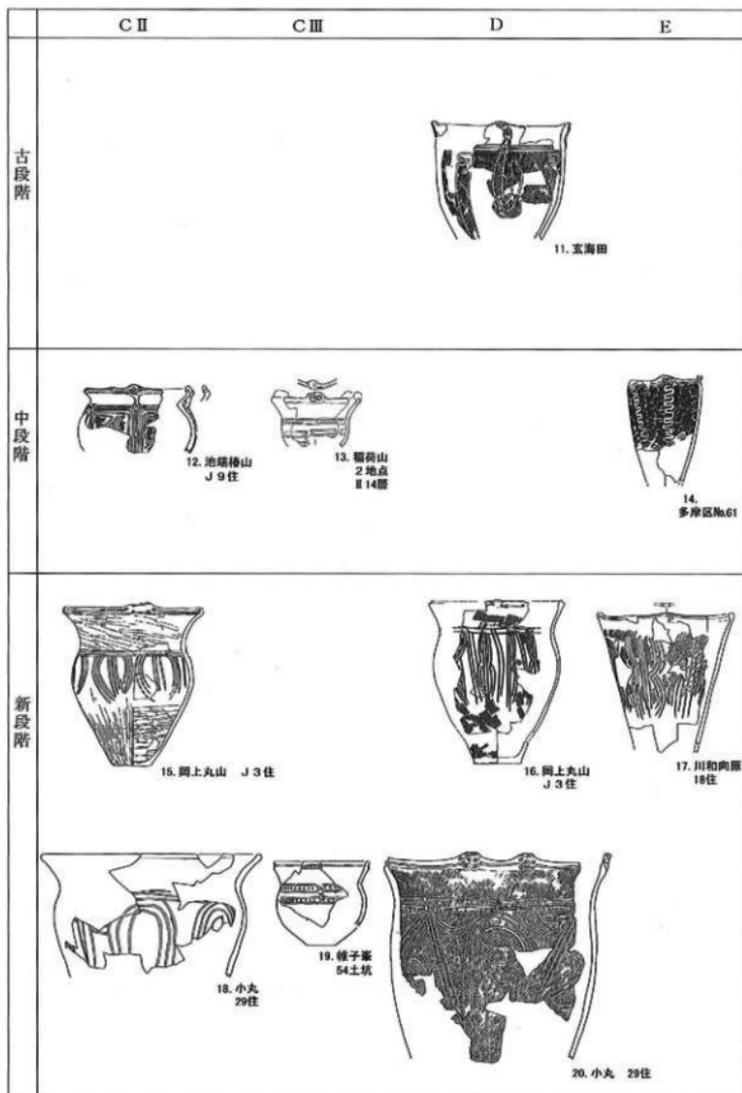
E群：D群の口縁部無文帯を省略し、A群の口縁部を採用したもの。石井はD群・A群との折衷があることを指摘し、またF群の特徴となる朝顔形の器形が一部含まれるとする。この点、特に本群と後述するF群の区別に混乱が生じるが、石井はF群を朝顔形とともに垂下陰帯などにより器面が区画されるものに限定し、J字や蕨手文などの単位文が施されるものについてはその器形にかかわらず、本群に含めるものとしている。

F群：朝顔形の器形を呈し、縦位の懸垂文・陰帯を口縁部から垂下させるもの。石井はさらに文様帯の下端区画も本群の要素として掲げているが、後述するようにこの点は保留しておく。

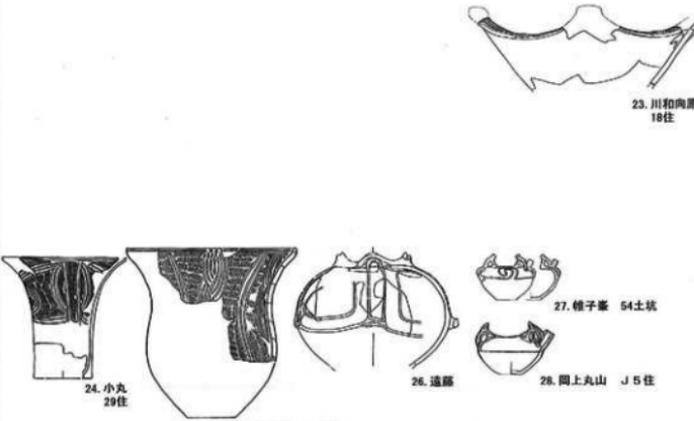
（小川岳人）



第1図 神奈川県内における縄之内1式土器編年案 その1 (S=1/10)



第2図 神奈川県内における縄文時代1式土器編年案 その2 (S=1/10)

	F 注口土器・浅鉢形土器
古段階	
中段階	 <p>21. 牛ヶ谷 22. 中川中学校</p>
新段階	 <p>23. 川和南原 18住</p> <p>24. 小丸 29住</p> <p>25. 梶子峯 54土坑</p> <p>26. 遠藤</p> <p>27. 梶子峯 54土坑</p> <p>28. 岡上丸山 J 5住</p>

第3図 神奈川県内における堀之内1式土器編年案 その3 (S=1/10)

古段階 (第1図1・2・第2図11)

古段階は称名寺式期土器群の諸要素を色濃く残している段階として考えられる。本段階の県内出土資料を概観してみるとA群の資料がもっとも豊富であり、CⅠ群、D群が散見される様相を示す。E群に類型される資料は良好な出土事例に欠けているようであり、その他の類型であるB群、CⅡ・Ⅲ群、F群の土器に関しては出土事例に欠けるような様相を示しており、今回の変遷図には反映することができなかった。A群に類型される中里遺跡JⅠ埋設土器(第1図1)は口縁部に沈線を有し、胴部にJ字文が施文される深鉢形土器である。文様構成に称名寺式土器の要素がよく引き継がれており、口縁部には沈線が明瞭に巡っていることから、前型式の称名寺式新段階土器群との関係性が読み取れる。文様が簡素化されていく本段階以降の土器群と比べてみても、称名寺式期の要素を引き継いで表現していることが読み取れよう。CⅠ群に類型される東正院遺跡包含層出土の資料(第1図2)は、外反する口縁部から頸部にかけて無文であり、胴部中位がくびれ反するように下位が膨らんでいく器形をなし、キャリパー形の襟相を呈する鉢形土器である。このような土器は称名寺式土器群の加曾利E系の土器群に影響されている可能性もある。文様構成はくびれを境に異なる文様が施文され、胴部には特徴的な沈線による渦巻文が描出される。D群に類型される玄海田遺跡包含層出土の資料(第2図11)は、CⅠ群と同様に口縁部付近に無文帯を持ち胴部に文様が施文される深鉢形土器である。胴部は縄文を地文とし、2条の沈線により文様が施文される。この土器には逆方向のJ字文とも見られる意匠が描出されており、前型式の称名寺式との関連が読み取れる。(近藤匡樹)

中段階 (第1図3~5・第2図12~14)

中段階は、称名寺式土器の諸要素を色濃く残す古段階から称名寺式的な色彩が希薄化し、懸垂文主体の文様構成や複数条の沈線による文様描出が盛行する段階で、F群(所謂朝顔形深鉢)を伴わない段階とした。

称名寺式土器の系譜下にある土器群と考えられるA群においては、J字状モチーフを主体とする称名寺式的な文様構成から単沈線による懸垂文を主体とする文様構成への推移が認められる。県内出土資料としては、伊勢原市下北原遺跡出土の深鉢(第1図3)が好例として屢々取り上げられている。第1図3は、狭小な口縁部文様帯下に懸垂文とH字状文が交互に展開する資料である。文様は器面全体をうめるように密に配されているが、前後段階に配した資料(第1図1・6)との対比から、本群における大きな流れとして、懸垂文の間隔が間延びし、その間隙をうめるモチーフが単純化するという傾向が捉えられよう。

B群とした土器群は、複数条の単沈線を垂下させた懸垂文を斜行沈線で連絡する特徴的な文様構成を採るものである。前段階に該当する確実な事例を抽出することができなかったことから、本段階から組成する一群と考えられる。第1図4は、横浜市稲荷山貝塚第2地点の貝層中から出土した資料である。3単位の懸垂文を鋸歯状に配された2単位の斜行文で連絡するもので、口縁部には特状区画内に列点状刺突を充填した狭小な文様帯が配されている。

C群とした土器群は、頸部に括れ、外反する無文の口縁部を有する鉢形土器で、主に関東南部に分布域を持ち、主文様の違いによって3細分(CⅠ・CⅡ・CⅢ群)される。CⅠ群は、称名寺式土器関沢類型の系譜下にあるとされるもので、単位的に配された渦巻文を斜行文で連絡する胴部文様が展開する。第1図5は、下北原遺跡出土の鉢形土器で、2単位の沈線で描出された渦巻文を2~3単位の斜行文で連絡している。2単位の沈線による明瞭な胴部文様帯下端区画を有しており、前段階に配された資料(第1図2)との大きな相違点となっている。CⅡ群は、懸垂文主体の文様構成を採るもので、胴部文様帯の下端は開放している。

B群同様、前段階に該当する確実な事例を抽出することができなかったことから、本段階から組成する一群と考えられる。第2図12は、伊勢原市池端・椿山遺跡J9号竪穴住居址出土の鉢形土器である。陸帯と2単位の沈線からなる懸垂文が施されるもので、懸垂文間には3単位の弧状沈線が配されている。CⅢ群は、胴部上半を中心に横帯文が施されるもので、やはり、本段階から組成する一群と考えられる。第2図13は稲荷山貝塚第2地点の貝層中から出土した鉢形土器である。本資料においては横帯区画内に縄文の充填はみられないが、上述した池端・椿山遺跡J9号竪穴住居址からは区画内に縄文を充填する横帯文資料2個体が出土しており、第2図12との良好な供伴事例となっている。

D群とした土器群は、所謂網取式土器の系譜下にあるとされる一群で、本県での出土事例は多くない。前段階での出土事例はあるものの、本段階に帰属する確実な資料を抽出することはできなかった。

E群とした土器群は、D群から無文口縁部を省略しA群の口縁部を採用したとされる深鉢形土器で、A～C群に比べると、本県における出土事例は多くない。第2図14は、川崎市多摩区No.61遺跡東地区出土の深鉢形土器である。縄文を地文とするプロローション変化に乏しい資料で、文様は単沈線による蛇行懸垂文のみが配されている。
(井辺一徳・岡 稔)

新段階（第1図6～10・第2図15～20・第3図24・25）

新段階の特徴として、朝顔形の器形が見れることと、沈線の多重化が進むことが見て取れる。この段階の事例は充実しており、その中でも時期差が見て取れたため2時期に分け、ここでは古い段階について述べる。

A群（上土棚南遺跡第3次調査 後期一括・第1図6）ではJ字文と懸垂文が交互に配置される構成が前の段階より進んでいる。口縁部の施文も簡略化される傾向がみとれる。B群（岡上丸山遺跡J3竪住・第1図7）では、前段階では2本ないし3本を基本としていた沈線の単位が、この段階に来るとほぼ3本が基本になってくる。A群ほどではないが、口縁部の施文もやや簡略化されてくる。CⅠ群（川和向原18号住居・第1図8）では前段階まで明瞭であった渦巻文の形が崩れ、横の区画がやや不明瞭になってくる。事例では下端区画は渦巻文の下と渦巻文の下を横位につないでいる程度で、はっきりとした区画という意味合いは薄らいでいるように思える。CⅡ群（岡上丸山遺跡J3竪住・第2図15）では垂下陸帯よりも対弧文が日立つ構成になってくる。それもあってD群との分類がしにくくなる。石井氏によると、このころからCⅡ群の個体数が増加し、堀之内2式へ継続し、最も安定した類だという（石井1993）。CⅢ群は共伴関係から事例を挙げたかったが、良好な事例が見いだせなかった。単体の出土事例ではこの段階も存在すると思われるが、この時期に帰属すると具体的に断定できる例を挙げるができなかった。D群（岡上丸山遺跡J3竪住・第2図16）は胴部下部と口縁部に縄文が施文されているが、基本は沈線による対弧文である。本資料では対弧文はやや崩れている（石井氏が提唱する4段階のD群の特徴は器面の斉一化が進行し半截竹管による沈線多重化が進み、単位文ではなくなるとしている。本資料はそれらの特徴も備えている）。E群（川和向原18号住居・第2図17）は懸垂文と対弧文で施文されている。石井氏によると施文の変遷過程がD群とE群では共通しているとされており、資料であげたD・E群の文様の基本的な施文は同じであるので石井氏の指摘（石井1993）が妥当であるといえるだろう。F群の該当時期の資料は見いだせなかった。E群としたグループの下端区画が次段階で発達して、F群へ派生していったと考えることもできるかもしれない。（宗像義輝）

新段階に属すると思われる一括資料の中で、器面の沈線描出部分でない余白の広い面積に対して充填縄文

をもつ資料（第3図24・25）を含む資料は、関東地方の中でも南西関東に多く存在すると考えられているものであるが（石井1995）、より新しい傾向をもつものと考えられる。後統型式の堀之内2式土器が2本の沈線に挟まれた帯状部分に充填縄文を施すことを特徴としてもち、充填縄文をもつ土器に、それへの技法上の近似性が感じられるからである。しかしここに掲載した資料は口唇部に堀之内1式土器に特徴的な1本の沈線をもつもので、充填縄文の施文部分も沈線に挟まれた帯状の部分ではなく、沈線の余白部分であり、一般的な堀之内2式土器との違いを示している。その一方、等間隔で平行に引かれた沈線（3本沈線が主）間は平滑に磨かれ、余白の縄文施文部とは際立ったコントラストをなすことが多いこと、土器の器厚が薄く朝顔形の器形が増えてくることなど、堀之内2式土器の充填縄文土器と近似した傾向を持っている。横浜市帷子峯遺跡54号土坑出土土器は堀之内2式土器を含まない点で該期の良好な一括資料であるが、第3図25が出土している。これはII縁が外反するが胴下半部が張り出すため、朝顔形土器とは言えず、器種分類に困る土器であるが、等間隔で多条化した沈線の余白部への充填縄文が存在するので本段階の典型的な土器と言える。沈線余白部への充填縄文をもつ土器はF群の朝顔形土器に多い。第3図24は横浜市小丸遺跡29号住居出土の朝顔形土器。胴部上半に文様をもち、下半は無文とし、文様帯の下端に横位の区画線が、途切れながらも引かれていて、堀之内2式土器への接近が見取れる。この文様帯下端を巡る沈線が器面を一周するようになり、文様帯下端区画が完成した土器に対しては、堀之内2式土器とする考えも出されており（鈴木徳1982など）、現在、研究者間で、堀之内1式と2式の型式分別の評価の確定していない部分となっている。小丸遺跡29号住居でもそのような土器は少し出ており、著名な例としては横浜市原出口遺跡20・21号住居出土土器（かながわ考古学財団研究紀要16号第4図）がある。小丸遺跡29号土坑は帷子峯遺跡54号土坑より幾分新しい土器を含むと言える。最後に組成について見てみる。帷子峯遺跡54号土坑では胴部に横帯文（楕円文）をもつCⅢ群（第2図19）も出土している。これは楕円文内に棒状工具による刺突を並べたもので、器厚も薄いことから、本段階に属すると考えた。また小丸遺跡29号住居では頸部無文帯をもつ鉢形土器C群（第1図10・第2図18）が出土している。第1図10は胴部上端に渦巻文をもち、その下に縦位沈線が垂化している。渦巻文をもつためCⅠ類にした。3本沈線の沈線間の余白部に充填縄文が施されている。第2図18は懸垂文をもつためCⅡ群にした。沈線文は3本沈線で描かれているが、沈線間は等間隔でやや広がっている。この垂下文はA群の逆U字状文の影響を受けているかもしれない。この他、A群も存在すると思われるが、図示できる良好な資料はなかった。第1図9はB群で、これも小丸遺跡29号住居出土。縄文はなく、3ないし4本の沈線のみで縦位沈線とその間を連結する斜線を描いている。沈線は等間隔で、沈線間隔がやや広がっている。この沈線間隔がやや広がっているのは第2図18にも見られるが、堀之内2式土器の充填縄文を抽出する2本の沈線の間隔が広いことと通じるものと評価すれば、新段階の中でも新しい傾向と見ることができると思われる。第2図20は地縄文上に沈線文を施文した無文頸部をもつ深鉢形土器（D群）で、小丸遺跡29号住居出土である。D群の中では沈線が多条化し、蕨手文の崩れた懸垂文間を沈線が密に埋めている。

（松田光太郎）

注口土器・浅鉢形土器（第3図）

注口土器・浅鉢形土器に関しては、遺構内一括出土資料など他の器形と伴出する出土状況を有し、器形や文様構成を把握できる遺存の良い土器を主眼に抽出作業を行った。その結果、対象となる土器は少なく、他器種との関係が明瞭な資料は極めて少ない状況であった。注口・浅鉢形土器は深鉢形土器に比して器種構成

比率で少ないことに起因すると考えられる。資料の大半は破片であり、全体の器形や文様構成を捉えられず、基本となる資料不足の感は否めない状況にある。したがって今回は中段階と新段階もしくはその次段階へ継続する注口土器資料の一部を提示し、浅鉢形土器及び各段階資料などの充実は今後の事例増加に期待したい。

注口土器の器形変化を見ると、中段階では縦長で胴中央部で膨らむ樽形（壺形）に近い器形（第3図21）や球胴形（第3図22）を主体として、構成されているものと思われる。新段階ではより球形として丸く膨らむ器形（第3図26）も認められるが、中段階に比してやや器形の扁平化（第3図27・28）が若干ではあるが傾向としては捉えることができ、文様構成も胴部上半部に限定して施されている。浅鉢形土器に関しては、良好な事例に恵まれないため器形の系統的な変遷は明瞭ではない。

中段階（第3図21・22）

第3図21は牛ヶ谷遺跡包含層出土の上半部を残す資料である。直線的に立ち上がる口縁部と曲線的に膨らむ器形（壺形）であるが下半部は不明である。口縁部には4単位の橋状把手、把手下端部には渦巻文と3条単位の横位・斜方向の直線的な文様が施されている。渦巻文などからは蛇行する単沈線が懸垂する。第3図22は中川中学校出土のほぼ完形の資料である。器形は算盤玉に近い形態を呈し、2単位の把手と直立気味に立ち上がる注口部を有する。上半部には3条単位の直線的な沈線が斜方向に施されている。

新段階（第3図23・26～28）

第3図23は川和向原遺跡第18号住居跡出土資料で、深鉢形土器のC群・E群との伴出関係を把握できる鉢もしくは浅鉢形土器の資料である。4単位の波状口縁で、被頂部には突起を有すると思われ、口縁部には沈線による区画などの文様が施されている。胴下半部から底部を欠損するため全体は把握できない。

第3図26は遠藤遺跡貝塚出土資料で胴部は大きく膨らむ球に近い形態（壺形）を呈する。4単位の把手から直線的に垂下する隆帯や胴中位にめぐる2条単位の横位隆帯が施されている。新段階もしくはそれ以降の段階に帰属する可能性を含むものである。同様のものとして、第3図27・28の帷子峯遺跡および岡上丸山遺跡出土資料がある。いずれも最大径を胴上半部に有する器形（28は算盤玉形をなす）を呈し、2単位の把手と斜方向に立ち上がる注口部が施される。第3図27は胴部にめぐる横位隆帯が曲線的な文様を描き、第3図28は無文となっている。

（阿部友寿・天野賢一）

参考文献

- 石井 寛 1993 『牛ヶ谷遺跡 華蔵台南遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告14（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1995 『川和向原遺跡 原出口遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 鈴木徳雄 1982 「南関東東部」 『シンポジウム 堀之内式土器資料集』 市立市川考古博物館
- 縄文セミナーの会 2002 『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(1)

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

戦後における関東地方の弥生時代研究は、縄文時代から継続する在地の要素に対して、中期以降に波及する西方からの新しい要素との相関に主眼を置かれてきた。弥生墓制の研究も同様であり、近年では縄文時代後晩期から弥生時代中期中葉まで継続する再葬墓と、弥生時代中期中葉に造られはじめる方形周溝墓との葬制の転換過程が着目されるようになり、東京湾沿岸部の東西での地域差が言及されるなど、関東地方の各地域における地域差・時間差について議論されるようになってきている(安藤 2005)。

弥生時代研究プロジェクトチームでは、こうした多様性をみせる弥生墓制を解析するための視点の一つとして、再葬墓と方形周溝墓の両者に通有な要素である土器棺に着目し、その様相の変遷を追うことで、弥生時代全体を通じた墓制・葬制の転換と、その背景となる集団の在り方へのアプローチを指向することとした。

実際の作業としては神奈川県内出土の弥生時代土器棺について集成し、今回は中期中葉以前の事例について分析を行い、中期後葉～後期については引き続きデータの蓄積を図ることとした。資料の所属時期は、基本的に各報文の記述に基づいているが、出土土器等の観察から一部表記方法を変えて記載したものもある。集成結果は第1表にまとめ、遺跡番号は第3～5図の掲載順と対応させている。遺構・遺物は報告されている図を使用し、縮尺を遺構(及び出土状況図)1/60、土器1/8、石器1/4で掲載した。第1表の「図番号」は第3～5図中の遺物番号に対応している。データの集成は櫻井・渡辺で行い、本文を分担して執筆した。文責はそれぞれの文末に記している。

(渡辺)

1. 中期中葉以前の墓制について

関東地方における弥生時代中期中葉以前の墓制は、複数の壺形土器を土器棺として利用し、洗骨葬を経た人骨の一部を納めた再葬墓(註1)が主体的である。これは関東地方に限らず、東北地方南部～甲信越地方までを含めた範囲で共通してみられる傾向でもある。ここで取り扱う再葬墓の中心的分布域は埼玉・栃木・茨城などの関東地方の北東側から福島県にかけての地域であり、本県はその分布域の縁辺部とも言える地域に属している。その一方で、現在までに本県で確認された該期の墓址に関連した遺跡は、大井町中屋敷遺跡、南足柄市怒田上原遺跡、秦野市平沢同明遺跡・平沢北ノ関戸遺跡、厚木市及川宮ノ西遺跡、相模原市緑区三ヶ木遺跡、厚木市岡津古久遺跡、同市戸室子ノ神遺跡、三浦市雨ヶ崎洞穴遺跡などである。このうち及川宮ノ西遺跡や戸室子ノ神遺跡などは発掘調査の成果として遺構・遺物の状況が明らかにされており、土器棺を用いた墓址であることが確認されている。また中屋敷遺跡については出土状況の詳細は不明であるものの、容器形土偶の内部に洗骨の存在が認められており、洗骨葬を用いた何らかの墓址である可能性が高い。事例のうち幾つかは不時発見などにより遺物のみ採集されたもので、埋没状況の詳細は判明していないが、出土時の状況から土器棺墓や再葬墓の可能性が高いものと判断されている。

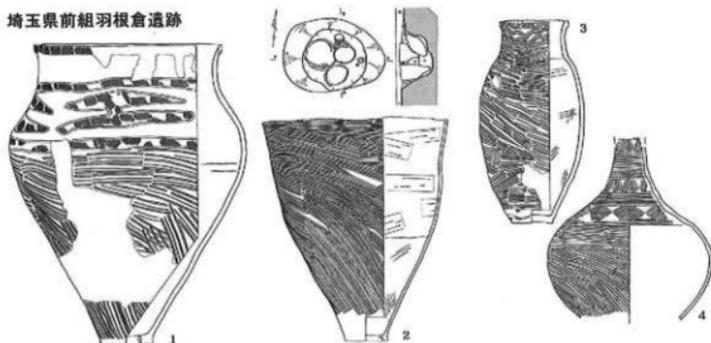
本県における弥生前期～中期初頭の遺跡の立地的特徴は、山地ないしは山地の裾に分布することにある。

これらの遺跡は全て丹沢山地とその周辺や大磯丘陵の裾部に位置しており、斜面地ないしは斜面地～平坦地への地形の変換点であることが共通している。本県以外でも東京都八王子市水崎遺跡、山梨県北杜市の下大内遺跡や上野原市南大浜遺跡、埼玉県児玉郡神川町の前組羽根倉遺跡（第2図上段）、群馬県吾妻郡東吾妻町の岩櫃山麓ノ巣岩陰遺跡、渋川市南大塚遺跡など同様の立地環境にあるものがみられる（第1図）。その一方で、再葬墓の主たる分布域においては、群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡、茨城県西市女方遺跡など平坦な台地上や沖積地それに河川の自然堤防上などの微高地に分布することが知られている。

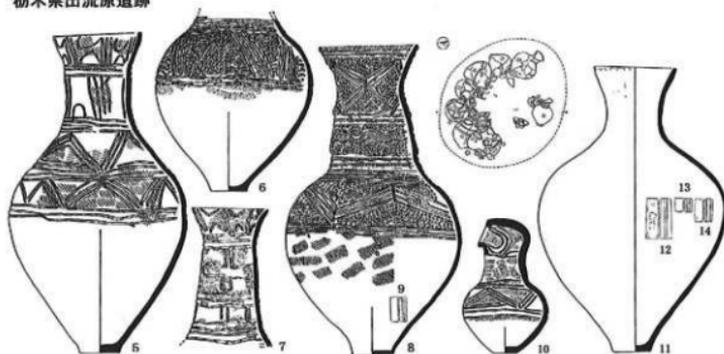


第1図 関連遺跡分布図【二百万分の一】

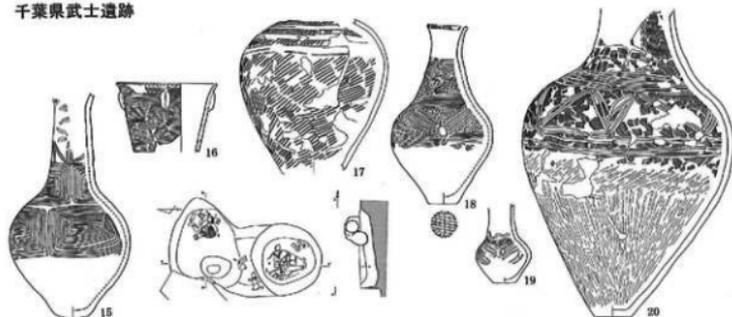
埼玉県前組羽根倉遺跡



栃木県出流原遺跡



千葉県武士遺跡



第2図 関東地域における再葬墓の検出例【造構図1/60、土器1/8】

こうした再葬墓では、一つの墓域内から複数の壺棺が出土する事例が一般的で、いわば集団墓地もしくは家族墓的な様相を呈している。この傾向は中期中葉末まで継続し、埼玉県深谷市上敷免遺跡、栃木県佐野市流出原遺跡（第2図中段）、千葉県市原市武士遺跡（第2図下段）で所謂複棺の壺棺再葬墓が確認されている。一方、本県の例や山梨県など再葬墓分布域の縁辺部においては単独の壺棺埋葬の事例が多くみられ、従来の複棺再葬墓よりも土器棺墓に近い単独埋葬墓的な状況を示している。これは再葬行為という共通の埋葬技法を用いているが、その埋葬を行う社会の状況に差異がある可能性が示唆される（註2）。

再葬墓に納められた土器の中で特徴的なものとして、容器形土偶や人面付土器、顔面画土器がある。本県では先述のとおり中屋敷遺跡の容器形土偶の出土例が知られ、同様の例が新潟県新発田市の村尻遺跡や山梨県笛吹市の岡遺跡に認められる。また人面付土器は女方遺跡・茨城県常陸大宮市小野天神前遺跡・和泉坂下遺跡などで、顔面画土器は茨城県筑西市北原遺跡や千葉県香取郡多古町塩台遺跡などで発見されている。

2. 県内遺跡の事例

(1) 中屋敷遺跡

足柄上郡大井町山田に所在し、大磯丘陵西端部近くの足柄平野に面した西向き緩斜面上に立地する。容器形土偶の内部から被熱した小児骨が発見されているが、詳細は不明である。近年昭和女子大により学術調査が行われ、弥生前期の土器や土坑、それに炭化種子等の発見があったが、新たな墓址の検出はなかった。

(2) 怒田上原遺跡（第3図上段）

南足柄市怒田に所在し、遺跡は標高100m程度の河岸段丘上縁辺部に立地している。1969年に調査されたA地区で中期初頭の土坑が3基検出された。1号土坑から小型の壺（第3図1）の他底部片2点（同図2・3）が坑底に横倒しになった状態で出土し、3号土坑からは覆土層から甕の破片が出土している。

(3) 平沢同明遺跡（第3図中段）

秦野市平沢に所在し、秦野盆地東南縁の扇状地先端部に立地する。前期後半の遠賀川系壺形土器が出土しているほか、壺2点（第3図6・7）と甕（同図5）が地権者の邸宅敷地内から出土した。この3点は推定復元図に示されているように、あたかも合わせ口の土器棺墓であるかのような状況で出土したものと資料報告されており（杉山1967）、土器の特徴から中期初頭に帰属するものと考えられる。

(4) 及川宮ノ西遺跡（第3図下段）

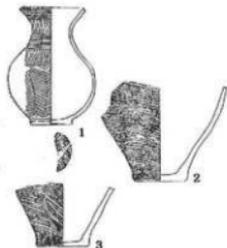
厚木市及川に所在し、丹沢山地南麓の台地端部緩斜面上に立地する。土坑9基が検出された。1号土坑は丸胴の土器を埋納するように掘られ、3号土坑からは怒田上原遺跡1号土坑と同様に2点の土器底部（第3図13・14）が出土した。4号土坑からは甕（同図12）が潰れた状態で覆土中から出土し、5号土坑は3点（同図8～10）の土器が認められた。大型の条痕文壺（10）が完形の状態でも埋納され、その他の個体については坑底近くで破片の状態になって出土しているため、単棺の墓址と考えられる。

(5) 戸室子ノ神遺跡（第4図上段左）

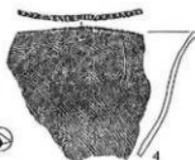
厚木市戸室に所在し、相模川の支流である小鮎川右岸の河岸段丘上縁部に立地する。遺跡の標高は約45mを測る。中期中葉の住居跡が散在している中に、やや距離をかけた位置に土坑が1基検出された。土坑からは完形の壺1点（第4図16）が坑底に横倒しになった状態で出土したほか、小型の壺または有文甕の破片（同図15）が出土した。土器の様相から、中期中葉の古い段階に帰属する土器棺墓等、単棺の墓址と考えられる。

怒田上原遺跡

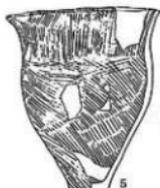
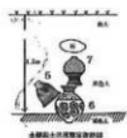
A地区1号土坑



A地区3号土坑



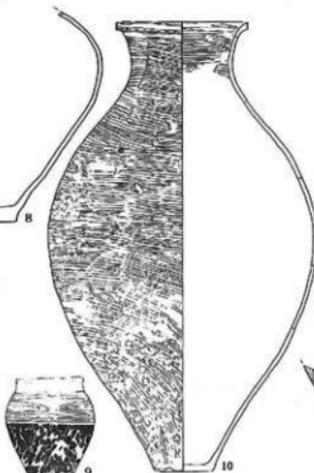
平沢同明遺跡



及川宮ノ西遺跡



5号土坑



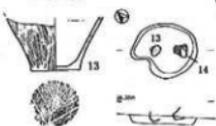
1号土坑



4号土坑



3号土坑



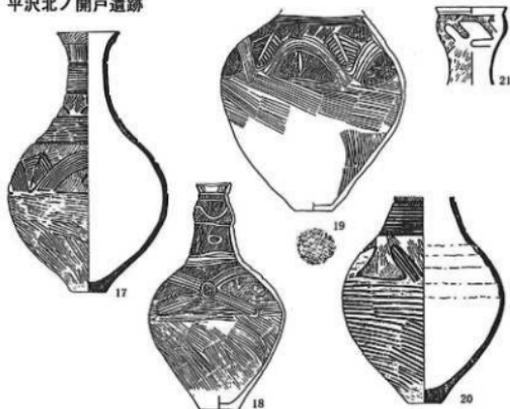
第3圖 神奈川県域の土器関連資料(1) [遺構図1/60、土器1/8]

戸室子ノ神遺跡

第11号土坑

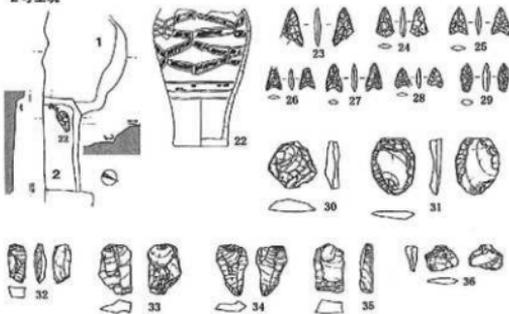


平沢北ノ開戸遺跡

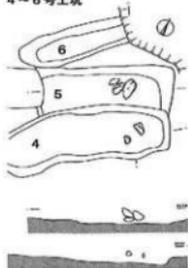


岡津古久遺跡

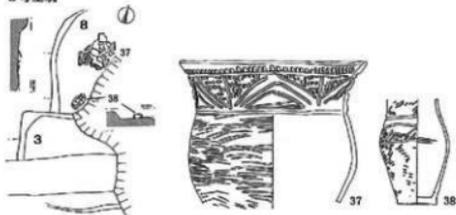
2号土坑



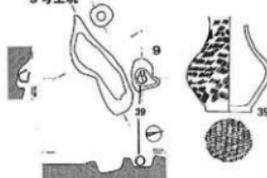
4~6号土坑



8号土坑



9号土坑



第4図 神奈川泉城の上器棺関連資料(2) [遺構図1/60、土器1/8、石器1/4]

(6) 平沢北ノ開戸遺跡(第4図上段右)

秦野市平沢に所在し、立地も平沢岡明遺跡と同様である。この遺跡では農作業中に中期中葉の壺形土器等(第4図17~21)が発見された。埋没状況の詳細は不明であるが、報文では地表下1.3~1.4mのところに「略々併列する状態で発見され、土器の中には黒土が充満していたという(亀井1955)。このうち壺1点(20)の内部からは「極めて細かな無数の生後間もない乳児骨が検出」したとのことである。こうした検出状況と、周囲を試掘したところ何も出土しなかったことから、一定の範囲に埋納したものと推定されている(註3)。

(7) 岡津古久遺跡(第4図中段)

厚木市小野に所在し、丘陵上の先端部に立地する。平面が長方形を呈し主軸方向を同じくする土坑11基を検出している。他の事例と最も異なる点は、遺構同士にかなりの頻度で重複が認められる点である。2号土坑からは西端の坑底に横倒しになった状態で胴の長い壺(第4図22)と、主として緑色凝灰岩や頁岩製の打製石鏃(同図23~29)、スクレイパー(同図30・31)、剥片類(同図32~36)が出土した。8号土坑からは有文の甕(37)、小型の壺(38)が坑底に横倒して潰れた状態で出土し、9号土坑は小型壺(39)が坑底に横倒しになった状態で出土している。このほか4・5号土坑からは緑色凝灰岩の原石が埋置した状態で出土しており、報文では特定の石材を用いた何らかの祭祀的な性格を想定している。一方で土坑墓の副葬品としている評価もみられ(大島1988)、いずれにせよ所謂「壺棺再葬墓」とは異なる性質の遺構群であるものと考えられる。

(8) 中里遺跡第Ⅲ地点(第5図)

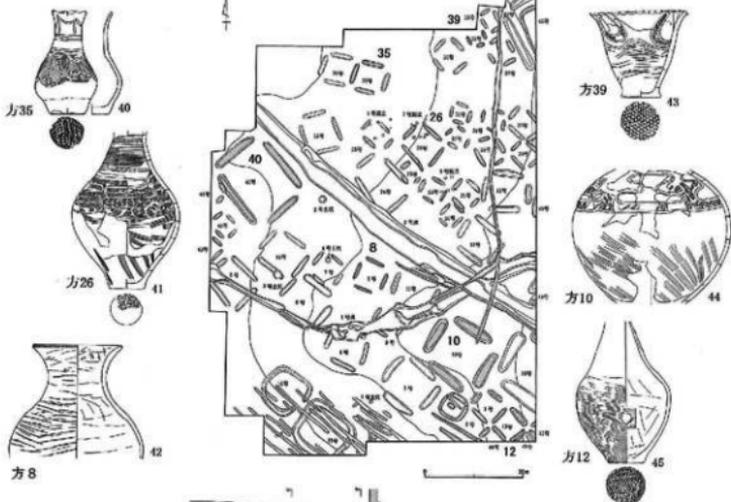
小田原市中里に所在し、相模湾北西部沿岸(足柄平野東南部)の標高約10m前後の沖積微高地に立地する。第Ⅰ地点で確認された集落域に対して、第Ⅲ地点では方形周溝墓46基が検出された。このうち7基の周溝内から、中期中葉の土器が出土している。報文では、その他の39基も弥生中期に帰属するものと考えられている。出土した土器の殆どは壺(第5図40・41・44・45)か広口壺(同図42・46)で1点のみ有文甕(同図43)がみられる。壺の最下段文様帯が拡大している傾向にあり、文様帯構成から見ても、弥生時代中期中葉でも新しい様相の土器群として評価できる。40号方形周溝墓からは北溝の溝底近くより、器形・文様構成の点からみても類例の少ない大型広口壺(同図46)が横倒しになった状態で潰れて出土している。(櫻井・渡辺)

まとめ

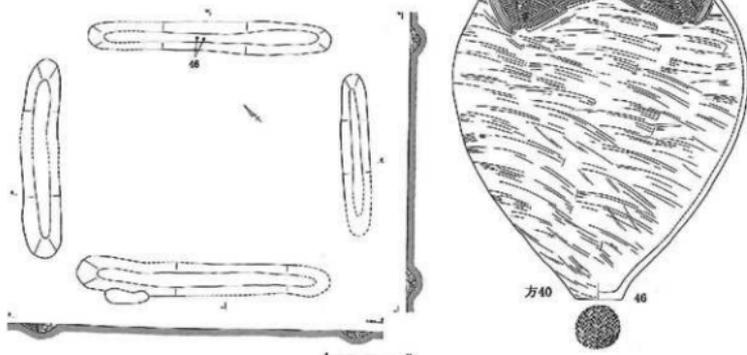
これまで概観してきた県内の前期~中期中葉の墓址を分類すると、以下の四つに大別出来る(註4)。

- (1) 土器棺墓: 主として壺形土器を甕骨器とし、単棺もしくは他の土器を上位から被せたり、合わせ口にした状態で埋納するもの。怒田上原、平沢岡明、及川宮ノ西、戸煮子ノ神の各遺跡で事例を検出しているほか、岡津古久遺跡の一部にもその可能性が考えられる。及川宮ノ西遺跡の1号土坑のように、土器棺を埋めるのに必要な最低限度の大きさの穴を掘り、土器を埋置する場合もみられる。単棺再葬墓の可能性あり。
- (2) 土坑墓: 土坑内に土器の完形品や破片、その他の遺物を副葬品として埋納するもの。怒田上原3号土坑、及川宮ノ西4号土坑、岡津古久2号・4~6号・8号土坑などが想定される。
- (3) 再葬墓: 一度土中に埋めるなどした人骨の一部を選択して土器に収め、複数の土器棺を土坑内に埋めるもの。本県ではそうした出土状況を確認出来た事例はなく、平沢北ノ開戸例はその可能性が考えられる。
- (4) 方形周溝墓: 所謂「四隅切れ」を呈する、周溝墓の中でも古い様相のものである。周溝内から壺に土器が出土する。県内では中里遺跡第Ⅲ地点例のみ。

中里遺跡第Ⅲ地点



40号方形周溝墓



第5圖 神奈川県城の土器棺関連資料(3) [遺構図1/120・1/60、土器1/8]

神奈川県内出土の弥生時代土器(1)

第1表 神奈川県域における土器関連遺構

No.	市町村	遺跡No.	遺跡・地点名	遺構名	遺物名	土器数量	時期	備考	図番号
1	南足柄市	1	怒田上原遺跡A地区	1号土坑	壺その他	3	前期	土器棺蓋か	3-1~3
2				3号土坑	甕	1	前期		3-4
3	秦野市	2	平沢岡明遺跡	—	壺、甕	3	中期初葉	土器棺蓋か	3-5~7
4	厚木市	3	及川宮ノ西遺跡	1号弥生土坑	壺	1	中期前葉	土器棺蓋か	3-11
5				2号弥生土坑	—	—	中期前葉		
6				3号弥生土坑	土器底部	2	中期前葉		3-13・14
7				4号弥生土坑	甕	1	中期前葉		3-12
8				5号弥生土坑	壺、小型壺	3	中期前葉	土器棺蓋	3-8~10
9	厚木市	4	戸室子ノ神遺跡	11号土坑	壺、小型壺	2	中期中葉	土器棺蓋か	4-15・16
10	秦野市	5	平沢北ノ開戸	—	壺その他	8	中期中葉		4-17~21
11	厚木市	6	岡澤古久遺跡	1号土坑	—	—	不明		
12				2号土坑	壺、石器	1	中期中葉		4-22~36
13				3号土坑	—	—	不明		
14				4号土坑	礎	—	不明		
15				5号土坑	礎	—	不明		
16				6号土坑	—	—	不明		
17				7号土坑	—	—	不明		
18				8号土坑	甕、小型壺	2	中期中葉		4-37・38
19				9号土坑	壺	1	中期中葉		4-39
20				10号土坑	—	—	不明		
21				11号土坑	—	—	不明		
22	小田原市	7	中里遺跡第三地点	8号方形周溝墓	壺	1	中期中葉		5-42
23				10号方形周溝墓	壺	1	中期中葉		5-44
24				12号方形周溝墓	壺	1	中期中葉		5-45
25				26号方形周溝墓	壺	1	中期中葉		5-41
26				35号方形周溝墓	小型壺	1	中期中葉		5-40
27				39号方形周溝墓	有文壺	1	中期中葉		5-43
28				40号方形周溝墓	大型壺	1	中期中葉		5-46

これまで本県では、「弥生時代中期中葉以前の墓制=再葬墓」という認識で墓制・葬制を分析する傾向が強かったが、土器棺の出土事例を検証した結果、むしろ土器棺墓や土坑墓、もしくは単棺再葬墓のいずれかである可能性が出てきた。いずれにせよ従前の複棺の壺棺再葬墓そのものの確実な事例は県内に存在せず、その実態は今後も調査事例の蓄積と検証が必要である。また中期中葉の新段階における前代の墓制と方形周溝墓の併存については、中里遺跡の他は埼玉県熊谷市池上・小敷田遺跡、千葉県袖ヶ浦町向神納里遺跡、同県君津市常代遺跡で中期中葉新段階の方形周溝墓の事例がみられるが、常代遺跡では同じ墓域で中期後葉段階の「宮ノ台式」土器の時期まで継続して造られている。こうした方形周溝墓出現期における地域性と時期の相違については、後期までを含めた次年度の検討課題としたい。(渡辺)

註

(註1) 従来こうした事例を複棺の「壺棺再葬墓」(石川1987など)と総称してきたが、近年の研究では葬法や「棺」の呼称、葬制の屈折時期等の評価をめぐって「弥生再葬墓」(設楽2011)、「壺再葬墓」(石川2011)等の概念が提唱されている。

(註2) 各地域で葬制が細かな違いを見せるのに対し、集落遺跡の発見が後続する中期後葉段階と比べて少ない傾向にあることも、東日本全域における訣別共通の事象である。本県における事例では小田原市中里遺跡や厚木市王子ノ台遺跡、厚木市子ノ神遺跡、また他の都県では埼玉県熊谷市池上・小敷田遺跡、岩槻市南遺跡、東京都利島ケケイ山遺跡などで中期中葉段階の居住址が検出された。これらの検出例よりも古い段階の資料として、山梨県北杜市の柳井遺跡では縄文晩期の壑穴住居が確認されているものの、遺構内部調査が行われておらず詳細は不明のままである。

- (註3) 但し、亀井氏は平沢北ノ関戸遺跡出土の土器群の評価については、本文中で「通常の包含地の如き居住地の遺跡として考へる事は出来ず」、「明かに意識的に埋納せられた結果としか考へることは出来ないであらう。」としながらも、「然しながらこの時期の遺跡に屢々見られる如き、ビット状の凹所から出土したものであろうか、出土地点の再調査を実施してみない現在早急に断定する事は出来ない。」と慎重な態度をとり、遺構としての評価は保留している。
- (註4) 今回の神奈川県域における弥生墓制の分類については、(大島1988)にみる墓制の仮分類基準を参照した。

【参考文献】

- 安藤広道2005『東日本弥生墓制の地域差・時期差が意味するもの』『季刊考古学』第92号 特集 弥生墓制の地域的展開 雄山閣
- 青木 豊・野本孝明1987『神奈川県岡津古久遺跡の弥生時代中期前半の土器と土坑について』『國學院大學考古学資料館紀要』第3輯
- 石川日出志1987「9-10. 再葬墓」『弥生文化の研究』8 祭と墓と装い 雄山閣
- 2011「再葬墓の終焉と祭祀」『一般社団法人日本考古学協会2011年度樹木大会 研究発表資料集』シンポジウムⅡ 考古学からみた葬送と祭祀 日本考古学協会2011年度樹木大会実行委員会
- 大島慎一1988『神奈川県の墓制資料—再葬墓・土器棺墓・土坑墓—』『第9回三泉シンポジウム 東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周溝墓—』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
- 2000『第四章第1節 出土遺物の分析』『王子ノ台遺跡』第3巻弥生・古墳時代編 東海大学校地内遺跡調査団
- 書上元博ほか1986『埼玉県児玉郡神川村 前組羽根倉遺跡発掘調査報告』前組遺跡発掘調査団
- 加納 実ほか1996『市原市武士道跡1』千葉県文化財センター調査報告第289集 財団法人千葉県文化財センター
- 亀井正道1965『相模平沢出土の弥生式土器に就いて』『上代文化』第25輯
- 河合英夫2012『中里遺跡の実像—発掘調査で明らかになったこと—』『シンポジウム 弥生ムラの出現とその背景 発表要旨』小田原市教育委員会
- 神澤勇一ほか1969『神奈川県考古資料集成』1 弥生式土器 神奈川県立博物館
- 泉地英夫・河合英夫1997『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第61集 小田原市教育委員会
- 設楽博己1991『最古の壺棺再葬墓—根古屋遺跡の再検討—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集
- 1993『壺棺再葬墓の基礎的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 故土田直樹館長蔵呈論文集
- 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 2011『弥生再葬墓の成立と祭祀』『一般社団法人日本考古学協会2011年度樹木大会 研究発表資料集』シンポジウムⅡ 考古学からみた葬送と祭祀 日本考古学協会2011年度樹木大会実行委員会
- 杉原荘介1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告 第8冊
- 杉山博久1967『秦野市平沢出土の弥生式土器について』
- 1989「3 怒田上原(ぬだうえばら)遺跡」『南足柄市史』1資料編 自然・原始・古代中世 南足柄市
- 秦野市史編さん室1985『秦野市史』別巻 考古編 秦野市
- 春成秀男1993『弥生時代の再葬制』『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 共同研究「葬墓制と世界観」
- 日野一郎・香村純一ほか1996『及川宮ノ西遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
- 望月幹夫・山田不二郎ほか1998『子ノ神(Ⅳ)』厚木市教育委員会

神奈川県における古代の鉄(2)

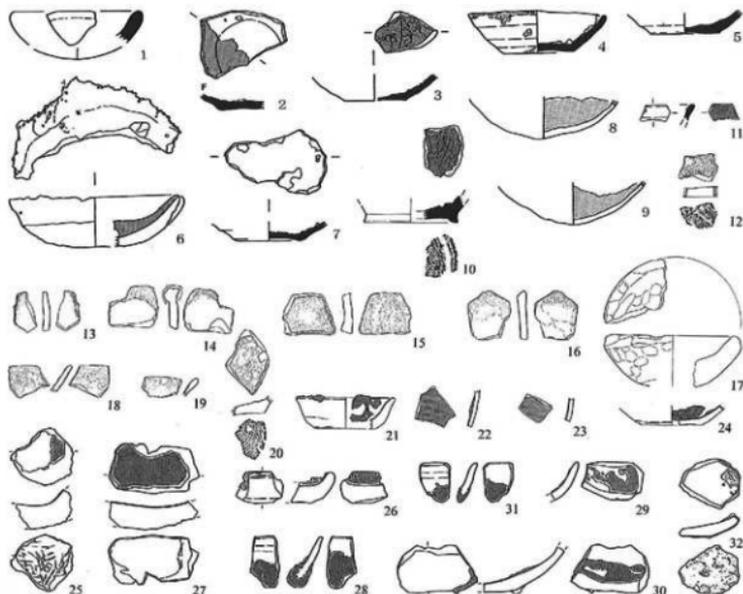
—生産関連遺物の集成—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは昨年から県内各地で出土した鉄生産に関連する遺物の集成を開始した。その目的はどのような規模、施設で生産行為が行われていたのか、地域差があるのかを明らかにすることである。昨年度行った集成では、紙面の都合により横浜市・川崎市の旧武蔵国と発見例の多い平塚市を今年度以降の掲載とした。今年度は六ノ城など国府域で鍛冶工房址を含む平塚は資料が多く、残念ながら横浜市・川崎市の集成は次年度送りとなってしまった。また、平塚市出土の鉄滓と鉄製品も掲載することは出来なかった。旧武蔵国と平塚市の掲載出来なかった鉄滓・鉄製品、および補遺は次年度に一括して掲載する予定である。集成終了後はここで得られたデータを元に分析に着手したいと考えている。

前回同様、表の計測値は報告書に記載が無く、図がある場合は計測した。また、図版は大型の金床石(第8図328~335)は1/8に、他はすべて1/4に統一した。

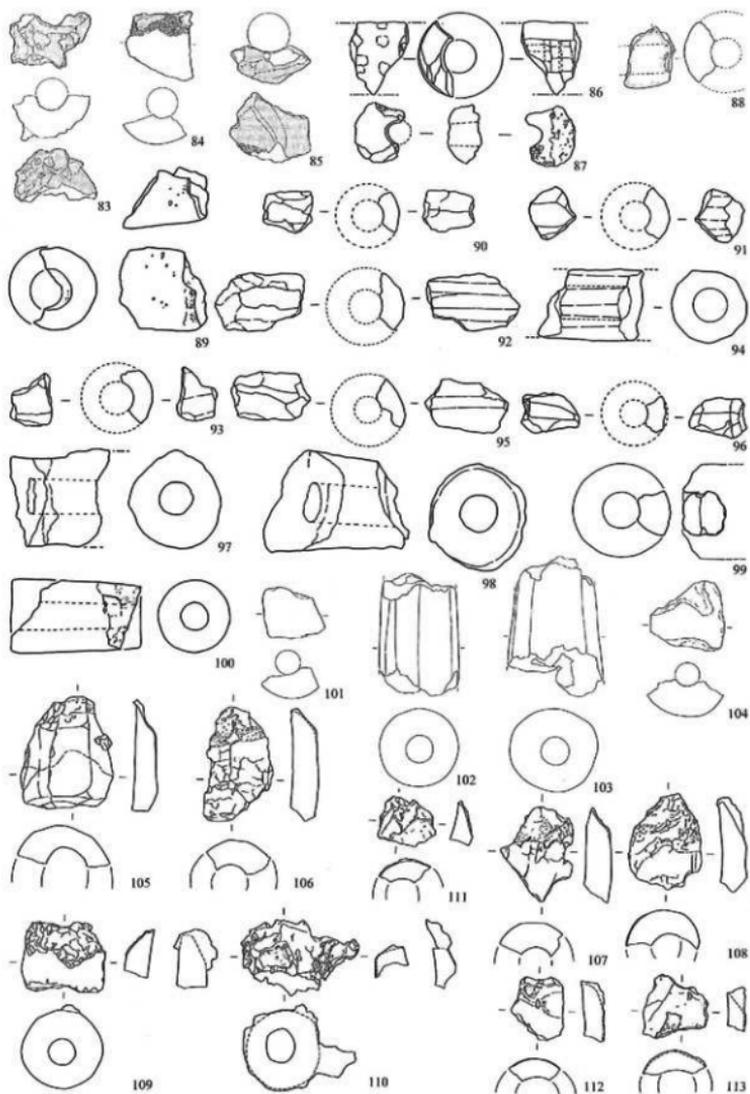


第1図 鉄生産関連遺物1



第2圖 飲生産関連遺物2

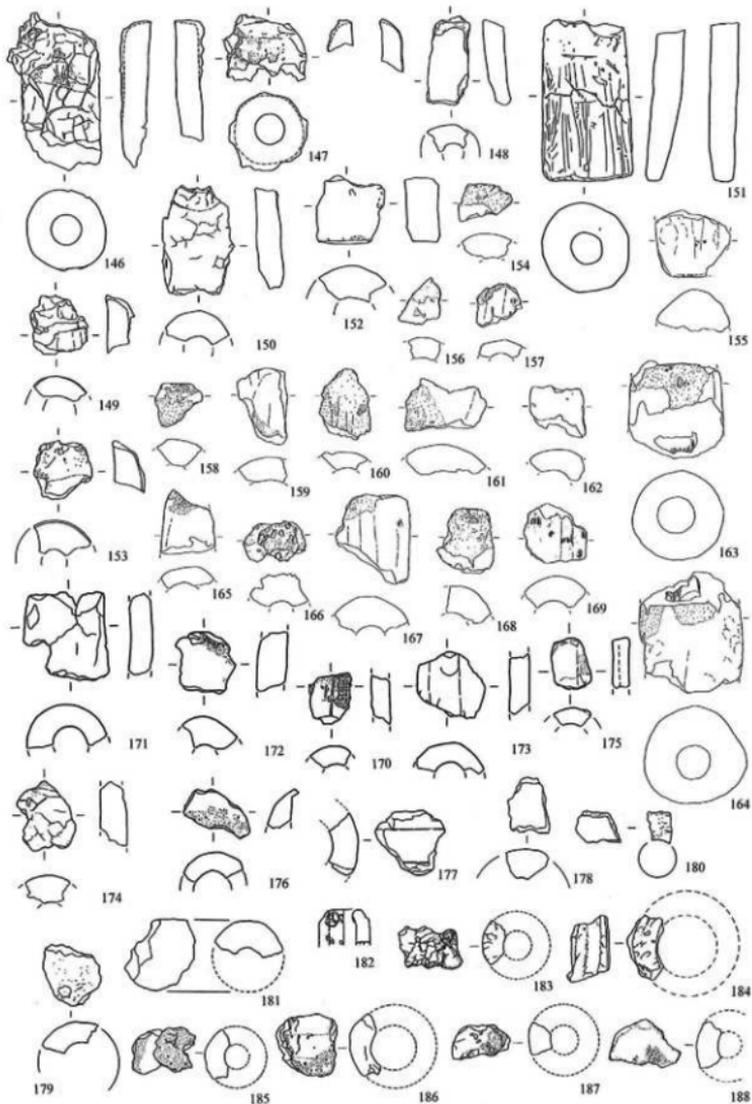
神奈川県における古代の鉄(2)



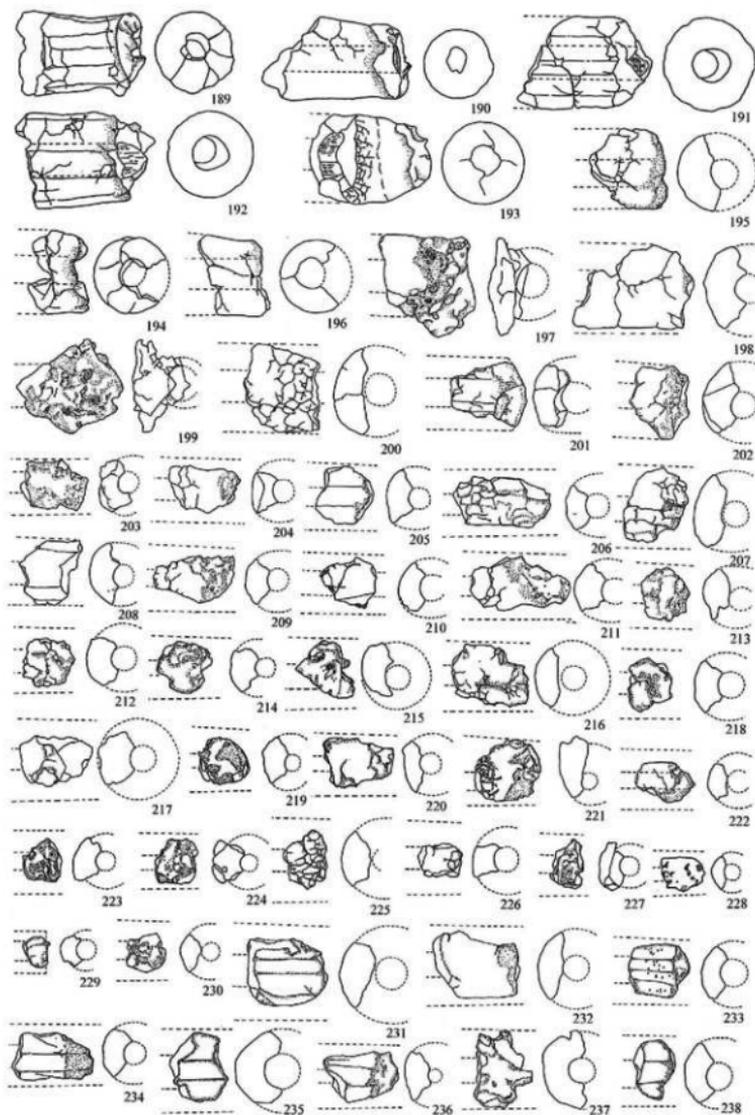
第3圖 鉄生産関連遺物3



第4図 鉄生産関連遺物4

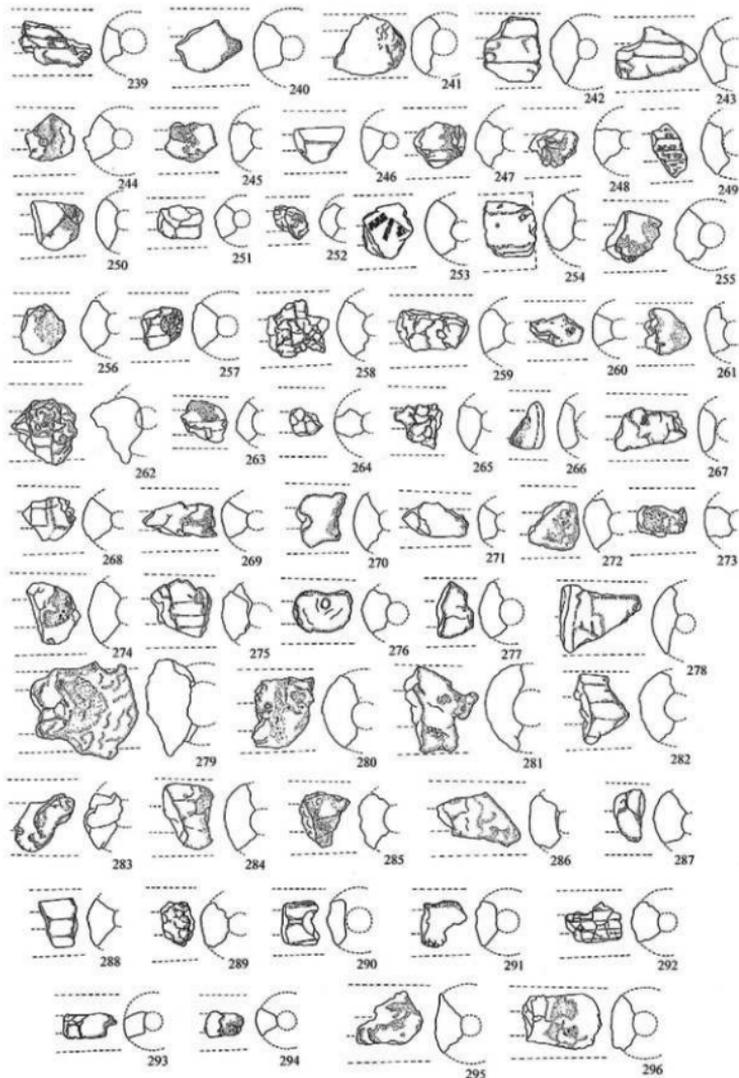


第5図 鉄生産関連遺物5

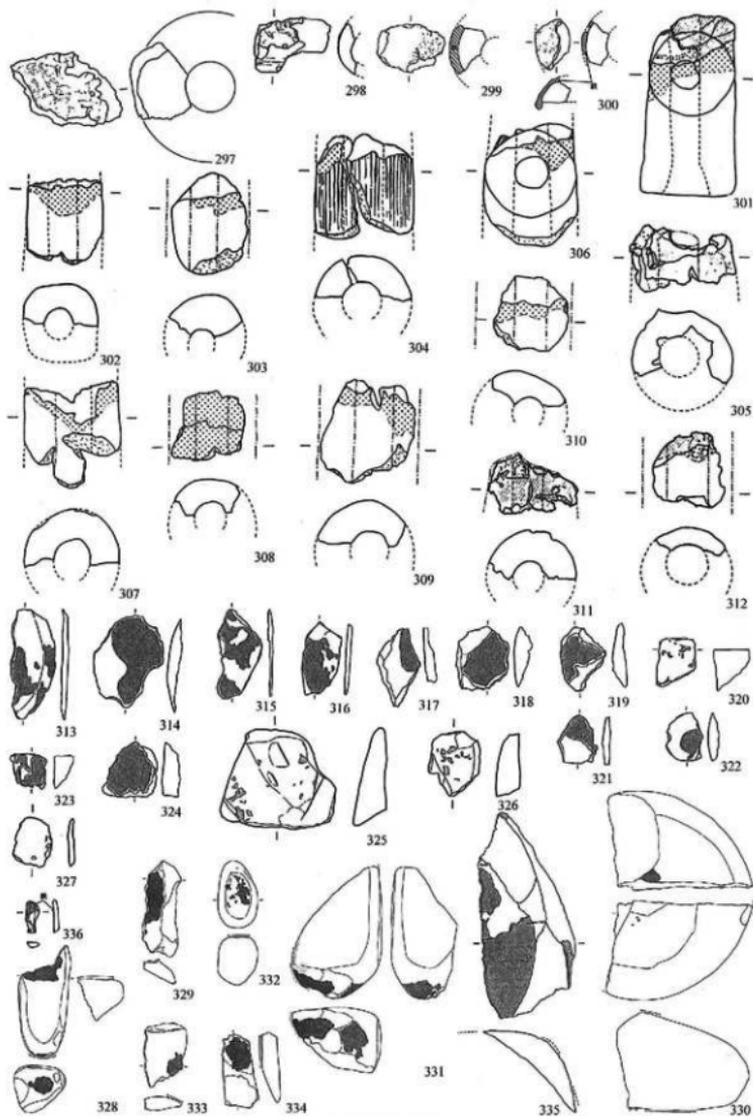


第6図 鉄生産関連遺物6

神奈川県における古代の鉄(2)



第7図 鉄生産関連遺物7



第8図 飲生産関連遺物 8

【増埜/取瓶】

・平塚市

№	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)			遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み			
1	増埜	西之宮山王B遺跡	SI08	覆土	-	口径 (10.0)	器高 (4.0)	-	9世紀中		難野高台198丁目西之宮山王B遺跡『平塚市埋蔵文化財シリーズ4 平塚市教育委員会』
2	取瓶	西之宮山王B遺跡	SI01	覆土	1/4以下	-	-	(5.1)	10世紀第3～4前半期	須置器・瓶A	
3	取瓶	西之宮山王B遺跡	SI02	覆土	1/4以下	-	-	(7.0)	10世紀第3～4前半期	須置器・坪F12	
4	取瓶	西之宮山王B遺跡	SI02	床下	2/3	(12.0)	3.60	5.8	10世紀第3～4前半期	須置器・坪F13	
5	取瓶	西之宮山王B遺跡	SI09	覆土	1/3	-	-	(5.6)	9世紀後半～10世紀第1前半期		
6	増埜	西之宮山王B遺跡	SI09	床面	1/4	口径 (14.0)	器高 (4.1)	-	9世紀後半～10世紀第1前半期		
7	取瓶	西之宮山王B遺跡	遺構外	-	1/4以下	-	-	(5.0)	-	須置器・坪F	
8	取瓶	西之宮高林寺	SI10	覆土	1/4以下	-	-	(3.6)	-	丸底、内面鉄押付器 熱で変質	小島弘美1985『西之宮高林寺Ⅱ』平塚市埋蔵文化財調査報告書 第2集 平塚市教育委員会
9	取瓶	西之宮高林寺	SD14	覆土	1/4以下	-	-	(3.4)	-	尖り底、内面鉄押付器 熱で変質	同上
10	増埜	神明久保遺跡	遺構外	-	底部破片	底径 (7.6)	器高 (2.0)	-	-	内面見込み部分に発泡した鉄分あり	上原正人他2002『神奈川系 平塚市 神明久保遺跡-第10地点-』
11	増埜	神明久保遺跡	遺構外	-	口縁破片	-	-	-	-	内面、鉄押付器	
12	増埜	神明久保遺跡	H1号壁穴建物	-	破片	2.3	3.1	0.8	-	増埜ないしは取瓶 相対型変転用	
13	増埜	神明久保遺跡	H1号壁穴建物	-	破片	3.4	1.8	0.5	-	増埜ないしは取瓶 相対型変転用	
14	増埜	神明久保遺跡	H3号壁穴建物	-	破片	3.5	4.0	0.7	-	増埜ないしは取瓶 相対型変転用	
15	増埜	神明久保遺跡	H3号壁穴建物	-	破片	3.5	4.2	0.7	-	増埜ないしは取瓶 須置器変転用	
-	増埜	神明久保遺跡	H4号壁穴建物	-	破片	1.5	2.3	0.6	-	増埜ないしは取瓶 須置器変転用	
16	増埜	神明久保遺跡	H7号壁穴建物	-	1/4	口径 (10.0)	器高 (4.3)	-	-	増埜ないしは取瓶	
17	増埜	神明久保遺跡	H13号壁穴建物	-	破片	4.1	3.5	0.8	-	増埜ないしは取瓶 相対型変転用	
-	増埜	神明久保遺跡	H13号壁穴建物	-	破片	2.5	2.1	0.6	-	増埜ないしは取瓶 相対型変転用	
-	増埜	神明久保遺跡	-	-	破片	3.1	2.6	0.7	-	増埜ないしは取瓶 相対型変転用	
18	増埜	神明久保遺跡	遺構外(G4)	-	破片	2.7	3.4	0.5	-	増埜ないしは取瓶 須置器変転用	
19	増埜	神明久保遺跡	遺構外(I3)	-	破片	1.8	3.8	0.5	-	増埜ないしは取瓶 須置器変転用	
20	増埜	神明久保遺跡	遺構外(G4)	-	破片	3.4	3.8	0.6	-	増埜ないしは取瓶 須置器変転用	
20	増埜	神明久保遺跡	遺構外(I3)	-	破片	5.5	3.6	1.0	-	増埜ないしは取瓶 須置器変転用	
-	増埜	神明久保遺跡	H1-3-4-10号壁穴 H16号溝 遺構外	-	破片	-	-	-	-	報告のみ/増埜ないしは取瓶 土師器・坏、変転用 6点+10点(発掘土器)	
-	増埜	神明久保遺跡	H15号壁穴 遺構外	-	破片	-	-	-	-	報告のみ/増埜ないしは取瓶 須置器・坏、変転用 10点+4点(発掘土器)	
21	取瓶	六ノ城遺跡	遺構外	表土	口縁破片	口径 (8.2)	器高 (2.6)	-	-	土師器・坏を転用 鉄押と銅押付器	依田亮一他 2007『湘南新道開道遺跡Ⅰ』(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告書208 財団法人かながわ考古学財団
22	取瓶	六ノ城遺跡	遺構外(2SAGr)	-	底部破片	3.1	3.3	0.4	-	須置器・坏を転用 内面に鉄押	
23	取瓶	六ノ城遺跡	遺構外(17Gr)	-	胴部破片	2.1	2.8	0.4	-	須置器・瓶を転用 内面に鉄押	

№	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	寸法(cm)			遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み			
24	取皿	六ノ城遺跡	遺構外(17Gr)	-	底部1/4	底径 (5.0)	器高 (1.6)	-	-	須恵器・坏転用 鉄押と同洋 依田亮一他2007『湘南新道園遺跡第1』(六ノ城第14地点)かたがわ考古学財団調査報告208 財団法人 かたがわ考古学財団	
25	埴輪	六ノ城遺跡	NH20住	-	不明	(4.8)	(5.0)	2.0	-		
26	埴輪	六ノ城遺跡	NH22住	-	底部破片	(2.0)	(3.0)	1.5	-	内面鉄付着	
27	埴輪	六ノ城遺跡	NH22住	-	不明	(4.0)	(7.3)	2.0	-		
28	取皿	六ノ城遺跡	NH1号線密工房	-	口縁破片	4.2	2.4	0.6	-	内外面鉄付着	
29	取皿	六ノ城遺跡	NH1号線密工房	3伊	口縁破片	3.3	2.4	0.6	-	内外面鉄付着	
31	取皿	六ノ城遺跡	NH1号線密工房	-	底部破片	3.8	6.4	1.1	-	内外面鉄付着 鈴木善治他2009『湘南新道園遺跡第1』(六ノ城第14地点)かたがわ考古学財団調査報告208 財団法人 かたがわ考古学財団	
30	取皿	六ノ城遺跡	NH1号線密工房	-	口縁破片	3.2	4.8	0.7	-	内面鉄付着	
32	取皿	六ノ城遺跡	NH7住	カマドより出土	底部破片	4.2	4.9	1.0	-	内外面鉄付着	
33	取皿	六ノ城遺跡	NH20住	-	底部破片	1.8	2.6	0.6	-	内外面鉄付着	
34	取皿	六ノ城遺跡	NH20住	-	底部破片	1.8	3.2	1.0	-	内面鉄付着	
35	取皿	六ノ城遺跡	NH20住	-	底部破片	1.4	3.0	0.8	-	内面鉄付着	
36	取皿	六ノ城遺跡	NH20住	-	口縁破片	1.8	2.6	0.4	-	内面鉄付着	
38	埴輪	六ノ城遺跡	C6号井戸	-	口縁破片	(3.3)	(4.2)	(2.3)	-	8.5g 15.5g	
39	埴輪	六ノ城遺跡	NH5号土坑	-	口縁破片	(5.4)	(5.9)	(3.0)	-	54.5g 銅付着	
40	埴輪	六ノ城遺跡	遺構外	-	口縁破片	(4.2)	(5.4)	(3.8)	-	70.7g 銅付着	
41	埴輪	六ノ城遺跡	遺構外	-	口縁破片	(4.9)	(5.2)	(5.1)	-		
44	埴輪	六ノ城遺跡	遺構外	-	口縁破片	(5.8)	(6.4)	2.8	-	78.3g 器壁の厚い土師製の 須恵器	
37	取皿	六ノ城遺跡	NH20住	-	口縁破片	3.6	2.8	1.2	-	内面鉄付着	
42	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	底部破片	3.0	5.2	1.4	-	内外面鉄付着	
43	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	口縁破片	1.8	2.0	0.5	-	内外面鉄付着	
45	取皿	六ノ城遺跡	NH19住	-	口縁破片	2.8	3.6	0.5	-	土師器・坏転用	
46	取皿	六ノ城遺跡	NH23住	-	底部破片	6.1	4.7	1.9	-		
47	取皿	六ノ城遺跡	NH26住	-	底部破片	3.6	2.8	1.2	-		
48	取皿	六ノ城遺跡	NH26住	-	底部破片	5.4	4.8	1.0	-	灰輪軸器転用	
49	取皿	六ノ城遺跡	NH30住	-	口縁破片	2.3	2.1	0.5	9世紀中	土師器・坏転用	
50	取皿	六ノ城遺跡	NH30住	-	底部破片	3.3	3.2	0.9	9世紀中		
51	取皿	六ノ城遺跡	NH30住	-	体~底部破片	4.4	4.0	0.8	9世紀	溶融した灰分の付着が厚く残る	
52	取皿	六ノ城遺跡	NH13渠	-	底部破片	4.6	4.6	0.8	9世紀	溶融した灰分の付着が厚く残る	
53	取皿	六ノ城遺跡	NH13渠	-	底部破片	4.0	3.8	0.5~1.5	9世紀	灰輪軸器転用定転用 鈴木善治他2009『湘南新道園遺跡第1』(六ノ城第14地点)かたがわ考古学財団調査報告243 財団法人 かたがわ考古学財団	
54	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	底部1/6	3.1	4.6	1.0	-	内面に溶融した灰分/外底部に割書あり /須恵器高台付 坏転用	
55	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	胴部破片	2.6	5.4	1.5	-	須恵器転用	
56	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	胴部破片	2.9	2.2	0.6	-	内外面・横指面に溶融した鉄付着 /須恵器転用	
57	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	小片	4.7	3.8	1.1	-	須恵器転用	
58	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	底部破片	底径 (5.2)	器高 (1.0)	0.5	-	灰輪軸器転用	
59	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	底部1/5	底径 (5.4)	器高 (2.9)	1.0	-	灰輪軸器転用	
60	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	底部1/5	底径 (5.0)	器高 (2.5)	1.0	-	灰輪軸器転用	
61	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	小片	3.4	2.8	1.1	-	灰輪軸器転用	
62	取皿	六ノ城遺跡	遺構外	-	小片	6.3	6.3	0.5	-	土師器・要転用	

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)			遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み			
63	取瓶	天神前遺跡	8号竪穴	覆土	底部1/4	底径 (8.7)	器高 (4.0)	-	-	土師器・寛転用	小島弘義他1988『西之宮天神前遺跡』(第1地点)平塚市埋蔵文化財調査報告 5 平塚市教育委員会
64	取瓶	東中原B遺跡	SI02	覆土	1/4以下	口径 (11.0)	器高 (3.4)	-	-	須恵器転用 内面銅押付着	菅沼圭介他2007『東中原B遺跡第2地点』(第9地点)平塚市埋蔵文化財調査報告 34 平塚市教育委員会
65	取瓶	東中原B遺跡	SI03	SK5	1/4以下	口径 (12.4)	器高 (3.8)	底径 (4.0)	-	須恵器転用 内面銅押付着	菅沼圭介他2007『東中原B遺跡第2地点』(第9地点)平塚市埋蔵文化財調査報告 34 平塚市教育委員会
66	取瓶	東中原B遺跡	SI06	覆土	小片	-	-	-	-	須恵器転用 内外面銅押付着	菅沼圭介他2007『東中原B遺跡第2地点』(第9地点)平塚市埋蔵文化財調査報告 34 平塚市教育委員会
67	埴埴	真田・北金目遺跡群	48区SI1010	覆土上層	底部破片	3.6	1.6	0.5	9世紀後半～10世紀前半	内面、鉄押付着	平塚市真田・北金目遺跡調査委員会2011『平塚市 真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』8 平塚市 真田・北金目遺跡調査委員会
68	埴埴	真田・北金目遺跡群	48区SI1010	覆土上層	口縁破片	口径 (8.9)	器高 (2.5)	-	9世紀後半～10世紀前半	内面、鉄押付着	平塚市真田・北金目遺跡調査委員会2011『平塚市 真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』8 平塚市 真田・北金目遺跡調査委員会
69	埴埴	真田・北金目遺跡群	48区SI1010	覆土上層	底部破片	2.8	3.0	0.25	9世紀後半～10世紀前半	内面、鉄押付着	平塚市真田・北金目遺跡調査委員会2011『平塚市 真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』8 平塚市 真田・北金目遺跡調査委員会
70	埴埴	真田・北金目遺跡群	48区SI1010	覆土上層	底部破片	3.0	3.0	0.25	9世紀後半～10世紀前半	内面、鉄押付着	平塚市真田・北金目遺跡調査委員会2011『平塚市 真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』8 平塚市 真田・北金目遺跡調査委員会

【羽口】

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔径			
71	羽口	神明久保遺跡	A-SI01	覆土	1/4以下	-	-	-	-	-	平塚市教育委員会1991『神明久保遺跡-第1地区-』平塚市埋蔵文化財シリーズ 第19号	
72	羽口	神明久保遺跡	A-SI02	床面	1/4以下	-	-	-	-	-	平塚市埋蔵文化財シリーズ 第19号	
73	羽口	神明久保遺跡	A-SI02	床面	1/4以下	-	-	-	-	-	神明久保遺跡調査団1989『神明久保遺跡 第3地区』	
74	羽口	神明久保遺跡	30号竪穴住居址	-	1/3	5.6	7.0	3.5	(2.2)	-	-	
75	羽口	神明久保遺跡	78号竪穴住居址	-	1/3	7.7	6.3	5.7	2.7	-	-	
76	羽口	神明久保遺跡	86号竪穴河原屋址	-	1/3	11.3	8.4	7.0	3.1	-	-	
77	羽口	神明久保遺跡	遺構外	-	1/3	7.1	7.3	7.1	3.8	-	-	
78	羽口	神明久保遺跡	SI14号竪穴住居址	覆土	1/4以下	-	-	-	-	重量32.5g 54-21	-	
79	羽口	神明久保遺跡	SI20号竪穴住居址	覆土	1/4以下	-	-	-	-	重量28.5g 57-44	-	
80	羽口	神明久保遺跡	SD09溝状遺構	覆土	-	4.0	4.0	1.5	-	重量20.5g 70-3	菅沼圭介他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38	
81	羽口	神明久保遺跡	SD09溝状遺構	覆土	-	5.3	4.5	1.4	-	重量45.4g 70-4	菅沼圭介他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38	
-	羽口	神明久保遺跡	ビツ228	覆土	1/4以下	4.1	4.8	1.6	-	重量27.5g 73-53	-	
-	羽口	神明久保遺跡	H11号竪穴建物	-	-	-	-	-	-	報告のみ 8点 67.3g	-	
83	羽口	神明久保遺跡	H2号竪穴建物	1/4以下	3.8	6.6	2.3	(2.6)	-	他、同遺構から2点	-	
84	羽口	神明久保遺跡	H4号竪穴建物	1/4以下	5.7	5.3	2.2	(2.5)	-	孔径:他、同遺構から2点	-	
-	羽口	神明久保遺跡	H8号竪穴建物	1/4以下	3.6	5.0	2.1	2.9	-	他、同遺構から1点	近野正幸他2001『神明久保遺跡』(第9地点)かながわ考古学財団調査報告102 財団法人かながわ考古学財団	
-	羽口	神明久保遺跡	H11号竪穴建物	1/4以下	6.3	5.8	1.9	(2.7)	-	他、同遺構から5点	-	
82	羽口	神明久保遺跡	H8号遺跡	-	-	-	-	-	-	報告のみ 1点 37.2g	-	
-	羽口	神明久保遺跡	H44号土積	-	-	-	-	-	-	報告のみ 1点 6.0g	-	
85	羽口	神明久保遺跡	遺構外(D3)	1/4以下	6.0	6.5	2.7	(3.3)	-	他、遺構外として27点	-	
-	羽口	神明久保遺跡	遺構外(H3)	1/4以下	5.2	7.0	2.7	(3.4)	-	他、同遺構から10点	-	
86	羽口	西之宮山王B遺跡	SI02	覆土	1/4以下	5.0	6.0	2.20	(2.60)	10世紀第2～3四半期	榎野高佑1987『西之宮山王B遺跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ4 平塚市教育委員会	
87	羽口	西之宮山王B遺跡	PO3	-	1/4以下	2.8	4.8	2.6	(1.9)	-	-	
-	羽口	西之宮山王B遺跡	1号竪穴住居	-	-	-	-	-	-	報告のみ	-	
-	羽口	西之宮山王B遺跡	2号竪穴住居	-	-	-	-	-	-	報告のみ	-	
-	羽口	西之宮山王B遺跡	4ピット	-	-	-	-	-	-	報告のみ	山王B遺跡第9地点(概報のみ)	
-	羽口	西之宮山王B遺跡	他?	-	-	-	-	-	-	報告のみ	-	
88	羽口	横之内遺跡	99溝	-	1/4以下	4.8	3.4	2.3	-	9世紀後半	榎林勝司他1993『横之内遺跡第2地点の調査成果』『所収遺跡発掘調査報告書-三井株式会社平塚工場建設に伴う発掘調査-』平塚市遺跡調査会	
89	羽口	西之宮下郷遺跡	7KSJD12	-	1/4以下	7.0	6.9	2.8	-	-	小瀬治工務園遺構	
-	羽口	西之宮下郷遺跡	15KSJK05	-	1/4以下	-	-	-	-	-	羽口2点(写真のみ)/小瀬治工務園に関連	
-	羽口	西之宮下郷遺跡	16KSJD01	-	1/4以下	-	-	-	-	-	小島弘義1984『西之宮下郷』平塚市遺跡調査会 神田・大野遺跡発掘調査団	

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構時期	備考	文献名	
						長さ	幅	厚み	孔徑				
90	羽口	西之宮高林寺	SI11	床面	1/4以下	4.0	3.8	1.2	(2.6)	11世紀第3前半			
91	羽口	西之宮高林寺	SI16	覆土	1/4以下	4.0	4.6	1.6	(2.4)	8世紀前半			
92	羽口	西之宮高林寺	SD02	覆土	1/4以下	7.6	5.0	1.8	(2.8)	7世紀後半		小島弘哉1987『西之宮高林寺 Ⅱ(第3地点)』平塚市埋蔵文化財調査報告書 第2編 平塚市教育委員会	
93	羽口	西之宮高林寺	SD10	覆土	1/4以下	3.4	4.4	1.6	(2.6)	7世紀後半～8世紀前半			
94	羽口	西之宮高林寺	SD11	覆土	1/4	8.4	6.0	1.8	2.8				
95	羽口	西之宮高林寺	SD13	覆土	1/4以下	6.8	4.0	1.6	(2.2)				
96	羽口	西之宮高林寺	SP02	覆土	1/4以下	4.6	3.4	1.5	(2.2)				
-	羽口	西之宮高林寺	SK01	-	-	-	-	-	-	-	榎文のみ 58点出土		
97	羽口	西之宮高林寺	SK02	-	1/4以下	7.6	7.4	2.4	2.8	10世紀前半～中	小島弘哉1987『諏訪前B・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ 第6集 平塚市教育委員会		
98	羽口	西之宮高林寺	SK02	-	1/4以下	11.7	8.4	3.0	3.0	鍛冶工所関連遺構			
99	羽口	諏訪前B遺跡	SI08	覆土	1/4以下	3.5	3.8	2.45	(3.0)	直径32.4cm		大野佑他2007『諏訪前B遺跡-第5地点-』平塚市埋蔵文化財シリーズ40	
100	羽口	六ノ城遺跡	SX01	-	1/4以下	6.0	5.5	10.6	2.2	9世紀後半～10世紀初頭	色調 赤褐色	小島弘哉1987『高林寺六ノ城遺跡 Ⅱ』平塚市埋蔵文化財シリーズ 3 平塚市教育委員会	
101	羽口	六ノ城遺跡	NH18住	掘り方	掘り方	4.3	5.2	2.6	-	8世紀中			
102	羽口	六ノ城遺跡	NH32住	掘り方	掘り方	1/2	10.2	6.6	6.5	2.2	9世紀前半		依田亮一他2007『津南新道開道遺跡1』(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告書208 財団法人 かながわ考古学財団
103	羽口	六ノ城遺跡	NH34住	掘り方	掘り方	1/2	11.7	7.9	7.0	2.4	9世紀中～後半		
104	羽口	六ノ城遺跡	26Gd	-	1/4以下	5.8	6.2	3.1	-	-	78.0g		
105	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	10P	1/4以下	9.3	7.6	2.3	(3.2)		166.9g		
106	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	10P	1/4以下	9.5	5.2	2.0	(2.4)		194.4g		
107	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	7.9	5.4	2.0	(2.4)		67.4g		
108	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	7.7	6.0	2.0	(3.0)		67.6g		
109	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	4.9	6.7	2.4	2.2		233.5g		
110	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	10P	1/4以下	5.6	9.2	2.3	3.7		173.7g		
111	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	3.1	4.3	1.7	(2.0)		25.8g		
112	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	5.2	4.2	1.5	(3.5)		38.1g		
113	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	6P1ピット	1/4以下	3.5	5.2	1.7	(2.2)		37.6g		
114	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	7.6	8.4	2.5	(3.3)		210.2g		
115	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	6.8	5.8	1.9	(2.6)		69.2g		
116	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	6.2	4.8	1.8	(2.2)		62.5g		
117	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	7.1	4.0	1.7	(2.2)		44.9g		
118	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	4.6	5.6	2.1	(2.1)	9世紀後半～10世紀後半		地本善治他2007『津南新道開道遺跡1』(六ノ城第10地点)かながわ考古学財団調査報告書210 財団法人 かながわ考古学財団	
119	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	5.4	8.0	1.8	(2.5)		101.4g		
120	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	4.5	6.0	2.5	(2.3)		64.6g		
121	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	4.8	5.0	2.0	(2.0)		50.3g		
122	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	掘り28ピット	1/4以下	4.8	5.6	1.7	(3.0)		53.7g		
123	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	5.3	4.5	2.0	(2.2)		49.1g		
124	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	7.4	5.2	1.8	(2.3)		75.2g		
125	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	5.4	4.9	2.5	(2.0)		71.9g		
126	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	掘り19ピット	1/2	14.3	7.0	1.9	3.1		815.4g		
127	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	掘り19ピット	1/4以下	9.2	7.4	2.8	(3.0)		285.2g		
128	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	6.3	5.6	2.0	(2.0)		66.6g		
129	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	5.4	3.4	1.4	(2.8)		26.5g		
130	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	4.3	3.6	1.7	(1.6)		21.1g		
131	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	-	1/4以下	3.0	4.2	1.8	(2.6)		19.4g		
132	羽口	六ノ城遺跡	NH11号竪治	4P2ピット	1/4以下	8.9	7.2	2.3	(2.9)		193.0g		

№	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法量(cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔径			
133	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	6.8	5.6	1.9	(2.3)		84.6g	
134	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	4.5	5.2	2.1	(2.0)		51.9g	
135	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	11F	1/4以下	3.6	4.2	1.6	(1.7)		27.4g	
136	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	19F	1/4以下	3.6	5.5	2.1	(2.2)		32.5g	
137	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	3.3	4.8	1.8	(2.3)		24.5g	
138	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	8F	1/4以下	4.0	4.8	2.2	(2.7)	9世紀後半~	30.8g	
139	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	4.5	6.2	2.7	(3.6)	10世紀後半	68.0g	
140	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	3.7	4.6	2.3	(2.1)		40.4g	
141	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	熊谷13ピット	1/4以下	5.8	5.3	2.2	(2.0)		51.5g	
142	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	5.2	6.2	2.2	(2.5)		124.3g	
143	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	1/4以下	4.1	5.2	2.2	(2.6)		52.3g	
144	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	11F	1/4以下	7.7	5.7	2.2	(2.7)		92.5g	
146	羽口	六ノ城遺跡	NH45土坑	-	1/2	11.8	6.3	2.0	2.4		391.2g	
145	羽口	六ノ城遺跡	NH45土坑	-	1/4以下	4.8	3.8	1.8	(1.9)		30.5g	
147	羽口	六ノ城遺跡	NH45土坑	-	1/4以下	5.4	6.5	2.2	2.4		140.7g	
148	羽口	六ノ城遺跡	NH45土坑	-	1/4以下	4.8	4.4	1.6	(1.8)		37.8g	
149	羽口	六ノ城遺跡	NH45土坑	-	1/4以下	6.9	3.3	1.4	(1.6)		46.1g	
150	羽口	六ノ城遺跡	NH46土坑	-	1/2	12.9	7.1	2.4	2.5		640.0g	
151	羽口	六ノ城遺跡	NH13土坑	-	1/4以下	8.3	5.8	2.0	(2.1)		95.3g	
152	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	1/4以下	5.6	5.5	2.6	(2.4)		84.9g	
153	羽口	六ノ城遺跡	覆土	-	1/4以下	4.7	4.6	2.3	(1.7)		47.2g	
154	羽口	六ノ城遺跡	NH45号住居	-	破片	3.1	4.5	2.1	-		19.5g	
155	羽口	六ノ城遺跡	NH62号住居	-	破片	5.4	6.1	3.4	-		63.2g	
156	羽口	六ノ城遺跡	NH64号住居	-	破片	3.9	4.4	1.8	-		13.0g	
157	羽口	六ノ城遺跡	NH66号住居	-	破片	3.6	3.8	1.6	-		13.8g	
158	羽口	六ノ城遺跡	NH70号住居	-	破片	3.6	3.9	2.2	-		21.9g	
159	羽口	六ノ城遺跡	NH71号住居	-	破片	6.2	4.1	2.1	-		47.2g	
160	羽口	六ノ城遺跡	NH71号住居	-	破片	5.8	4.2	1.8	-		27.2g	
161	羽口	六ノ城遺跡	NH71号住居	-	破片	4.5	6.7	2.1	-		47.4g	
162	羽口	六ノ城遺跡	NH71号住居	-	破片	4.2	4.5	2.5	-		29.1g	
163	羽口	六ノ城遺跡	NH71号住居	-	1/4	8.0	7.7	7.3	3.0		325.3g	
164	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	1/4	10.0	8.3	8.0	2.8		402.1g	
165	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	破片	5.3	4.5	1.9	-		30.5g	
166	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	破片	3.2	5.1	3.0	-		35.2g	
167	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	破片	7.3	6	3.0	-		92.7g	
168	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	破片	6.3	4.7	3.1	-		55.3g	
169	羽口	六ノ城遺跡	遺構外	-	破片	4.9	5.2	2.6	-		46.8g	
170	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	破片	3.9	3.3	1.7	-		19.3g	
171	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	破片	7.0	6.7	3.0	-	9世紀後半~	105.7g	
172	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	破片	4.9	4.5	2.4	-	11世紀中葉	47.8g	破損がラサ質に類似する
173	羽口	六ノ城遺跡	ⅡNH1号竪治	-	破片	5.1	5.5	2.1	-		51.5g	
174	羽口	六ノ城遺跡	NH46号住居	-	破片	6.4	4.1	2.1	-	11世紀	47.2g	
175	羽口	六ノ城遺跡	NH5号溝状遺構	-	破片	4.1	3.0	1.3	(2.5)	10~11世紀	23.0g	炭化物付着
176	羽口	六ノ城遺跡	NH11号溝状遺構	-	破片	3.3	5.0	1.8	(2.0)	9~10世紀	29.6g	
177	羽口	七ノ城遺跡	2号溝状遺構	覆土		5.65	5.25	2.0	(4.6)	8世紀	加土・長石・酸化色調・緑褐色金属層付着	葉山雄輝1968「七ノ城遺跡-第2地点-」平塚市埋蔵文化財調査報告書 17

№	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)			遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み			
178	羽口	天神前遺跡	3号壺穴	覆土	破片	4.6	3.2	2.4	-		
179	羽口	天神前遺跡	8号壺穴	灰面	破片	5.0	4.6	1.8	-		小島弘高他1988『西之宮天神前遺跡』(第1地点)『平塚市埋蔵文化財調査報告 5 平塚市教育委員会』
180	羽口	天神前遺跡	9号壺穴	灰底	破片	2.6	3.2	2.4	-		
181	羽口	天神前遺跡	7号壺	覆土	破片	5.4	5.6	2.2	-		
182	羽口	天神前遺跡	S103	覆土	1/4以下	4.0	5.6	1.4	(2.0)	8世紀前半～中	小島弘高1988『天神前遺跡-第3地点』『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告 1 昭和61年度発掘調査の報告』平塚市教育委員会
183	羽口	天神前遺跡	S102	覆土	1/4以下	3.5	4.8	1.80	2.4		27.6g
184	羽口	天神前遺跡	S105	灰面	1/4以下	5.5	1.7	2.60	5.0		24.6g
185	羽口	天神前遺跡	S111	下層	1/4以下	3.6	3.5	1.70	2.0		31.0g
186	羽口	天神前遺跡	S111	上層	1/4以下	5.0	5.0	1.70	3.6		45.8g
187	羽口	天神前遺跡	S111	灰面	1/4以下	2.6	4.8	1.70	2.3		21.8g
188	羽口	天神前遺跡	SX1	-	1/4以下	3.7	5.8	1.80	2.2		29.2g
189	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	灰面	1/2	10.4	6.6	2.6	2.2		309.8g 面取りあり
190	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	灰面	1/2	12.0	5.6	2.4	2.0		395.2g
191	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	灰面	1/2	10.8	7.5	2.7	2.8		398.8g 面取りあり
192	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	1/2	11.3	7.0	2.5	3.0		389.6g 面取りあり
193	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	1/3	9.7	6.7	2.5	2.6		274.6g 壺の支脚に転用
194	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.0	6.9	2.2	3.5		133.2g
195	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	下層	破片	6.2	6.5	2.6	(2.1)		75.4g
196	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.7	6.4	2.0	2.4		89.0g
197	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	8.0	8.0	2.3	(2.6)		133.8g
198	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	P1	破片	9.8	7.5	2.5	(2.2)		109.2g
199	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	灰面	破片	8.6	7.6	4.6	-		89.4g
200	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	灰面	破片	6.1	7.1	2.3	(2.6)		71.8g
201	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	床下	破片	6.2	6.0	2.3	(2.0)	8世紀前半	60.2g 面取りあり
202	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	床下	破片	4.8	5.9	2.0	(1.6)		51.8g
203	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.4	4.3	1.6	(1.7)		56.8g
204	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.7	3.4	1.8	1.6		33.4g
205	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	4.7	4.3	1.5	(2.0)		33.0g 面取りあり
206	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	7.8	3.7	1.5	1.7		44.2g
207	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.2	5.9	2.2	(2.1)		45.0g
208	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.0	5.1	1.8	1.9		40.8g 面取りあり
209	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	5.6	3.7	1.7	1.4		40.8g
210	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	4.5	4.0	1.7	2.0		21.8g
211	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	8.1	3.9	2.2	1.6		53.6g
212	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	4.2	3.9	2.0	1.0		29.0g
213	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	3.9	4.1	2.0	1.5		19.0g
214	羽口	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土	破片	4.5	3.6	2.0	1.2		30.6g

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔径			
215	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	4.8	4.3	2.0	2.1	8世紀前後	23.8g	
216	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	6.1	4.8	1.8	(2.0)		46.0g	
217	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	5.9	4.3	2.6	2.1		43.8g	
218	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.6	4.3	1.9	2.1		22.8g	
219	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	4.7	3.8	2.0	1.2		23.6g	
220	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	5.6	4.3	1.6	1.7		25.6g	
221	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	5.6	5.0	1.4	1.4		31.2g	
222	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	4.7	3.0	1.5	1.8		15.8g	
223	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.2	3.5	1.8	1.6		17.0g	
224	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.5	3.5	1.2	1.2		23.8g	
225	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.5	4.6	2.2	-		25.0g	
226	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.5	2.7	2.0	2.0		17.0g	
227	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	2.6	4.0	1.7	1.5		15.0g	
228	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.5	2.7	1.0	1.3		7.4g	
229	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	2.1	2.5	1.4	1.5		6.4g	
230	羽口	天神前遺跡	1号壑穴住居址	覆土	破片	3.2	3.1	1.7	(1.5)		11.8g	
231	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	6.5	5.4	2.6	(2.6)		65.8g	面取り
232	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	7.0	5.6	2.0	2.0		63.4g	
233	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.8	4.2	1.6	2.2		33.0g	面取りあり
234	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	6.5	3.9	1.7	1.8		46.5g	面取りあり
235	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.8	5.9	2.4	2.8		58.2g	面取りあり
236	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	7.0	4.0	1.8	1.1		28.8g	面取りあり
237	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.7	6.3	1.6	2.0		54.4g	
238	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	3.4	4.9	1.4	2.2	26.4g	面取り	
239	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	6.0	3.0	1.8	(2.0)	25.2g	面取り	
240	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	5.3	4.1	2.2	2.0	35.8g		
241	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	5.9	4.8	1.6	2.2	36.6g		
242	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.7	5.4	2.2	1.6	40.2g	面取り	
243	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	6.7	4.8	1.8	2.3	34.8g	面取り	
244	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.0	3.8	2.4	1.6	20.8g		
245	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.3	3.8	1.8	1.6	15.6g		
246	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.2	2.9	1.8	1.3	15.8g	面取り	
247	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.3	3.8	2.2	1.9	24.4g	面取り	
248	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.0	3.0	2.0	1.5	22.2g		
249	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	3.0	4.5	1.8	(2.3)	13.8g	面取り	
250	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.3	4.2	1.6	1.7	24.8g		
251	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	3.8	2.8	1.5	1.5	14.4g	面取り	
252	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	2.9	2.9	1.3	1.8	5.0g		
253	羽口	天神前遺跡	2号壑穴住居址	覆土	破片	4.2	4.6	2.2	1.7	34.4g		
254	羽口	天神前遺跡	3号壑穴住居址	覆土	破片	4.3	4.6	2.5	1.7	36.8g		

明石新1992「天神前遺跡-第7地点-」平塚市埋蔵文化財調査報告書 第9巻 平塚市教育委員会

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (mm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔径			
255	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	4.7	4.4	2.1	2.1	9世紀後半	27.4g	
256	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	床下	破片	3.7	4.3	2.1	1.8		20.8g	
257	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	3.4	3.8	2.0	1.7		12.8g	
258	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	4.1	4.8	2.1	1.9		31.0g	
259	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	5.9	3.8	2.0	1.8		36.0g	
260	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	4.4	2.7	1.5	1.7		15.6g	
261	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	3.9	3.8	1.4	1.9		16.2g	
262	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	5.4	5.4	4.2	1.9		82.4g	
263	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	3.8	3.3	1.4	2.1		15.6g	
264	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	2.7	2.3	2.2	1.7		11.6g	
265	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	3.9	3.8	2.0	1.7		13.6g	
266	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	2.9	3.9	1.4	(2.3)		11.8g	
267	羽口	天神前遺跡	4号壑穴住居址	覆土	破片	5.9	3.7	1.2	(1.9)		18.6g	
268	羽口	天神前遺跡	5号壑穴住居址	覆土	破片	4.4	3.5	2.4	1.3		23.0g	
269	羽口	天神前遺跡	5号壑穴住居址	覆土	破片	6.0	3.1	2.2	1.6		22.2g	
270	羽口	天神前遺跡	5号壑穴住居址	覆土	破片	4.1	4.8	2.2	1.8		24.8g	
271	羽口	天神前遺跡	5号壑穴住居址	覆土	破片	5.3	3.0	1.4	1.6		20.4g	
272	羽口	天神前遺跡	6号壑穴住居址	覆土	破片	4.1	4.3	2.1	1.6		24.0g	
273	羽口	天神前遺跡	6号壑穴住居址	覆土	破片	5.6	2.5	2.0	1.6		17.8g	
274	羽口	天神前遺跡	17号壑穴住居址	覆土	破片	4.3	5.2	2.3	2.3		36.4g	
275	羽口	天神前遺跡	17号壑穴住居址	覆土	破片	5.0	4.9	2.1	2.1		39.8g	
276	羽口	天神前遺跡	18号壑穴住居址	覆土	破片	4.9	3.5	2.0	1.9		23.8g	
277	羽口	天神前遺跡	20号壑穴住居址	覆土	破片	3.9	4.7	1.6	2.1		22.4g	
278	羽口	天神前遺跡	SD5号溝状遺構	覆土	破片	6.5	5.6	1.9	1.6		51.8g	
279	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	8.2	8.0	3.5	3.5	221.8g		
280	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.9	5.3	2.4	2.2	51.2g		
281	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	5.8	7.0	2.3	3.0	64.0g		
282	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.5	5.9	2.2	2.3	38.8g		
283	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.9	4.7	2.4	2.3	38.0g		
284	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.1	5.6	2.2	2.2	45.0g		
285	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.7	4.7	1.9	2.4	24.6g		
286	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	6.7	4.5	2.4	1.8	46.2g		
287	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	2.5	4.3	2.3	1.8	18.8g		
288	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	3.0	4.0	2.2	1.5	17.5g		
289	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	2.8	3.6	2.2	1.9	17.8g		
290	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	3.1	3.7	1.4	(2.1)	16.0g		
291	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	3.6	3.8	1.6	2.0	20.0g		
292	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.5	3.3	2.2	1.6	22.4g		
293	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	4.4	2.0	1.6	1.6	12.4g		
294	羽口	天神前遺跡	1号不明遺構	床面	破片	3.2	2.2	1.8	1.6	10.8g		

明石新1992「天神前遺跡-第7地区」『平塚市埋蔵文化財調査報告書 第9集 平塚市教育委員会』

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔徑			
295	羽口	天神前遺跡	遺構外	床面	破片	5.9	4.4	2.2	1.8	-	27.6g	明石新1992『天神前遺跡-第7地点-』平塚市埋蔵文化財調査報告書 第9編 平塚市教育委員会 平塚市高田・北金目遺跡調査会2008『平塚市 高田・北金目遺跡群発掘調査報告書6』平塚市 高田・北金目遺跡調査会 平塚市高田・北金目遺跡調査会2011『平塚市 高田・北金目遺跡群発掘調査報告書8』平塚市 高田・北金目遺跡調査会 中田英1982『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 植木節他2007『湘南新道開通遺跡Ⅲ(六ノ城第14地点)かたがわ考古学財団調査報告書210 財団法人 かたがわ考古学財団
296	羽口	天神前遺跡	遺構外	床面	破片	6.5	4.5	1.8	2.0	-	51.4g	
297	羽口	真田・北金目遺跡群	29B区SH067	掘り方	破片	8.8	6.0	4.3	(4.0)	9世紀中葉～後葉	-	
298	羽口	真田・北金目遺跡群	12G区遺構外	-	破片	6.0	4.0	1.2	-	-	外面鉄付着	
-	羽口	高田・北金目遺跡群	48ES101	-	破片	2.8	1.7	1.1	-	9世紀後半～10世紀前半	内外面鉄付着。製鉄伊片の可能性あり	
299	羽口	真田・北金目遺跡群	38区SX003	-	破片	5.4	4.0	2.6	-	8世紀末～9世紀前半	-	
300	羽口	真田・北金目遺跡群	38区SX003	-	破片	3.6	2.5	2.0	-	-	-	
301	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	完形	15.0	7.4	3.0	2.4	-	先端溶融化 表面縦方向へく状形形成、指痕直	
302	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/2	7.0	6.4	2.5	2.4	-	表面縦方向へく状形形成、孔面縦方向に傾り直	
303	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/3	8.2	6.4	3.0	-	-	表面熱の為剥落	
304	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/2	8.4	8.0	2.3	(3.2)	-	表面縦方向へく状形形成、孔面縦方向に傾り直	
305	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	先端～口辺1/2	5.4	8.2	2.5	-	-	溶融化顕著	
306	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半	10.2	7.4	2.5	2.6	9世紀後半～10世紀頃	先端部被熱の為亀裂、表面凹直	
307	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/2	7.2	7.8	2.4	2.5	-	表面亀裂、表面縦方向へく状形形成	
308	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/3	5.6	5.5	2.0	-	-	表面剥落、孔面縦方向に傾りに傾直	
309	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/2	8.6	7.4	2.5	(3.2)	-	表面剥落、焼成部、縁の含有多し	
310	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	上半1/3	6.2	6.0	2.6	-	-	熱の為亀裂・剥落	
311	羽口	向原遺跡	39号壑穴住居址	-	先端～口辺1/2	5.0	7.4	2.3	(2.4)	-	溶融化顕著	
312	羽口	向原遺跡	遺構外	P-10-11区	破片	6.2	5.2	1.4	1.6	-	口辺部は溶融化	
【金床石】												
No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)			遺構時期	備考	文献名	
						長さ	幅	厚み				
313	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	8.9	3.5	0.5	9世紀後半～10世紀後半	石材は安山岩	植木節他2007『湘南新道開通遺跡Ⅲ(六ノ城第14地点)かたがわ考古学財団調査報告書210 財団法人 かたがわ考古学財団	
314	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	7.5	5.6	1.0				
315	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	7.2	3.7	0.5				
316	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	6.0	3	0.4				
317	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	6.2	3.5	0.9				
318	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	5.2	4.2	1.5				
319	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	5.1	3.6	1.1				
320	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	3.8	3.1	3.3				
321	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	3.9	3.15	0.6				
322	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	3.9	3	0.9				
323	金床石	六ノ城遺跡	ⅢNH1鍛冶工房	-	破片	2.7	2.5	1.6				

№	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)			遺構時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚み			
324	金床石	六ノ城遺跡	ⅧN1号鍛冶工房	-	破片	4.5	4.5	1.5	9世紀後半～10世紀後半	石材は安山岩	楢木善治他2007『湘南新道開通遺跡Ⅱ』(六ノ城第14地点)かむがわ考古学財団調査報告210 財団法人 かむがわ考古学財団
325	金床石	六ノ城遺跡	ⅧN11号鍛冶工房	-	小片	7.9	9.0	2.6	9世紀後半～11世紀後半	石材は安山岩/金属小片が叩きつけられて付着する	楢木善治他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』(六ノ城第14地点)かむがわ考古学財団調査報告243 財団法人 かむがわ考古学財団
326	金床石	六ノ城遺跡	ⅧN11号鍛冶工房	-	小片	5.1	4.1	1.9			
327	金床石	六ノ城遺跡	ⅧN11号鍛冶工房	-	小片	3.8	3.0	0.5			
-	金床石	六ノ城遺跡	遺構外	47F	ほぼ完形	23.4	24.4	21.0	-	石材は安山岩 鉄分付着	袋田荘一他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』(六ノ城第14地点)かむがわ考古学財団調査報告242 財団法人 かむがわ考古学財団
328	金床石	神明久保遺跡	H4号竪穴建物	-	破片	18.4	8.0	7.0	-	箱根系安山岩 鉄分付着	近野正伸他2001『神明久保遺跡』かむがわ考古学財団調査報告102 財団法人かむがわ考古学財団
329	金床石	神明久保遺跡	H8号竪穴建物	-	破片	15.0	5.4	2.6	-	箱根系安山岩 鉄分付着	
330	金床石	神明久保遺跡	H13号竪穴建物	-	破片	21.2	16.6	16.0	-	箱根系安山岩 鉄分付着	
331	金床石	神明久保遺跡	H16号溝状遺構	-	破片	21.0	13.6	10.0	-		
-	金床石	神明久保遺跡	H1・7・8・11～13号竪穴建物 16号溝	-	-	-	-	-	-	報告のみ 18点	
332	金床石	神明久保遺跡	H2	-	ほぼ完形	10.9	6.5	7.9	-	富士山麓級の安山岩 鉄分付着	
333	金床石	神明久保遺跡	H2	-	破片	10.0	6.4	2.2	-	箱根系安山岩 鉄分付着	
334	金床石	神明久保遺跡	H2	-	破片	11.6	5.0	2.8	-		
-	金床石	向原遺跡	火葬窯	火葬窯の蓋石	ほぼ完形	28.0	25.0	12.0	10世紀前半頃	中央部敲打痕明瞭、周縁部は摩耗、光沢あり、被熱痕跡あり 丹波山の龍崎層灰岩	中田英1982『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1
335	金床石	真田・北金目遺跡群	48区S1010	覆土上層	1/3	38.0	15.0	4.5	9世紀後半～10世紀前半	金属状の物質が付着	平塚市真田・北金目遺跡調査会2011『平塚市 真田・北金目遺跡群発掘調査報告』8 平塚市 真田・北金目遺跡調査会
336	金床石	真田・北金目遺跡群	48区S1010	覆土中	破片	2.8	1.2	0.4		鉄分付着	

神奈川の中世城館(4)

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで「神奈川の中世城館」と題し、基礎データの集積から始め、前回・前々回では城館⁽¹⁾の堀に注目し、規模・形態・年代などの基礎集積を行ってきた。中世城館は発掘調査成果をもとにする考古学の他に、文字資料を主とした文献史学や縄張り図など城郭の表面観察を重要視する縄張り研究など多方面から研究が行われている。今回は、これら膨大な先行研究から県内の城館、特に堀に関する研究について考古学の成果を中心としてまとめることで、今後の考察につなげることを目的とする。研究史をまとめるにあたり、前述のキーワードに関係する研究を概観し、次に発掘調査報告書が刊行されている遺跡のなかから、その成果と考察についてまとめることにする。

1. 堀に関する研究略史

(1) 中世前期

鎌倉

鎌倉では、鎌倉時代初期から堀またはそれと推測される大溝が発見されており、形状は葉研形⁽²⁾を呈していることが多い。発見された場所は、幕府関連施設（大倉幕府跡（熊谷 2011）、北条小町邸跡（馬淵ほか 1996）、政所跡（宮田・手塚 1991））や御家人の屋敷（47）⁽³⁾、鶴岡八幡宮（大三輪ほか 1983）と複数地点あり、当地の支配者層と関連が指摘されている（岡 2006）。また、この鎌倉時代初期には大倉幕府周辺遺跡群（馬淵 1993）で大型柱穴列も見つかっており、大型の板塀または柵列が推測されている。このように重要施設を囲むのは、堀（溝）以外にも板塀や柵列があったことは分かっているが、狭小な調査が多く、どのように囲んでいたのかという配置や規模、その組み合わせなど不明な点もある。

御所や北条邸など幕府中心施設周辺の主要道路の側溝は、素堀の溝から木組みの溝へと変化することが指摘され、これらは御所が大倉から移転する13世紀前半から見られるという（宇都 2010）。この木組み側溝は主要道路以外に今小路西遺跡（46）などの屋敷地でも見られ、板塀や築地などを伴っていることもある。これら木組みの側溝は、区画や排水を主とした機能が指摘され、前述の葉研形の堀（溝）とは異なる性格を語られることが多い。主要道路や屋敷地を囲う堀（溝）の変化については、社会の安定に伴い目的が変化したとの指摘もある（岡 2006）。

鎌倉を囲む丘陵には平場、堀切、切岸などが見られ、『玉葉』に記された「鎌倉城」という表現や『吾妻鏡』などに記される戦闘状況から、その軍事性が評価されてきた（赤星 1959、石丸 1978など）。しかし、「鎌倉城」と称されるのは治承・寿永の内乱期のみであり、防衛性を評価したものではないといひ（中澤 1999）、近年の発掘調査や踏査による成果では、14世紀から15世紀の遺構・遺物が多く、城郭や城館として把握することは困難であるという（鈴木・菊川ほか 2001、齋木 2006）。各所に見られる堀切については、根拠越え

通路としての視点からも分析が行われており、軍事以外の利用が時代を超えて続けられていたものもあると指摘されている(岡 2004)。「要害」としての評価は、各遺構の機能や年代について更なる精査が求められているといえよう。

鎌倉以外の県内

近年の発掘調査成果から、西日本では12世紀末頃から堀と土塁を有し、防御性を強化した居館がみられるが(中井 1991、広瀬 1988・2006)、関東では中世前期の武士の居館は相対的に開放的な様相を示しており、「土塁+堀」という防御系開境施設をもついわゆる「方形館」の出現は、基本的に中世後期に入ってからであると指摘されている(橋口 1987ほか)。橋口によると、東国中世前期の屋敷・居館は大きく4類型に分けることができ、13世紀後半から徐々に変化し、15世紀に入って大きく転換するという(橋口 2005)。

①規模的に卓越する主屋中心とした建物群の周囲を生垣で圍繞しており、屋敷と周辺部は総じて開放的である。区画施設のあり方で生垣・柵・塀・境堀(溝)と堀で圍繞するタイプに細分可能であり、前者は12世紀後半から14世紀前半、後者は13世紀後半から15世紀前半までみられる。県内では綾瀬市宮久保遺跡(113)がこれに該当する。

②小谷を包み込む丘陵尾根上に堀をめぐらし、小谷出口正面の河川まで取り込む。12世紀後半から14世紀半ばまでである。

③台地上および河川に接する沖積部を一体のものとして略方形に区画する。12世紀後半から15世紀前半まで継続する可能性がある。県内では横浜市堀之内東遺跡(近藤ほか 1989)が該当する。

④二重方形区画を持つ居館。13世紀後半からみられる。

これら4類型を堀から注目すると、何れも土塁は伴わず、一義的には防御機能として評価することは難しいとしている。また、②に比べ③は相対的に堀の規模が大きい。断面形態は葉研形から箱葉研形という時間軸上での変化が想定されている(橋口 2004)。

県内では、上記以外の中世前期の居館として海老名市上浜田遺跡(108)や秦野市東田原中丸遺跡(霜出 2006、90)があげられる。これまでの発掘調査では、ともに防御性を有したと考えられる堀は検出されていない。今後の調査にもよるが、上浜田遺跡が①、東田原中丸遺跡が③に該当すると推測され、大局としては橋口分類の範疇に収まると考えられる。

防御という意味での堀は人間からの攻撃を想定しているが、それに加えて野生動物との攻防についても指摘がある(中澤 2006)。発掘調査で検出される遺構は一部であることも多く、この機能や利用を特定することは困難であろう。しかし、注目すべき視点といえ、これまで堀としての防御性を疑問視され、区画として報告された溝などについても、再度検討する必要があるのかもしれない。

(2) 中世後期

県内の居館

15世紀後半以降、東国では中世前期からの系譜をひく屋敷や居館が消え、堀と土塁を備えた方形居館が出現する(橋口 1987ほか)。このような防御性を重視した居館の流れは東国に限らず、西日本でも顕著になるという(広瀬 2006)。

東国の方形館には空堀と水堀のものが存在し、水堀には灌漑機能を担っていたと考えられるものもある。

また、方形居館は単郭以外に複郭のものもみられる。主郭部分が基本的に方形プランを呈しつつも、周囲に複数の郭を配置しており、平地城郭の祖形になるものもあると指摘されている(橋口 2005)。

県内の居館では、茅ヶ崎市上ノ町遺跡(119・120)と清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡(市川ほか 1993ほか)について方形居館の比較考察が行われている(富永 2009)。堀を中心に見てみると、上ノ町遺跡の居館は16世紀中頃に最盛期とされ、主郭を囲む方形の内堀と複数の郭を囲む外堀が存在する。内堀は幅2~3m、深さ1~1.4mほどで、間隔をあけて二重に廻っていた可能性がある。外堀は内堀に比べ大きく、幅5m以上、深さ1.5m以上となる。内堀・外堀とも土塁の存在は確認できなかったが、外堀は欄列を伴っており、防御性を備えているという。内堀と外堀の間には幅2~4mほどのやや大きい区画溝によって複数の郭を形成している。これら堀や区画溝は灌漑・排水の機能も有していたと指摘されている。なお、外堀は略方形を呈していたと推測されるが、北側に流れる小出川や低湿地が自然の防御施設となっていた可能性もあり、四方を圍繞していたのか不明な点もある。表の屋敷遺跡の居館は16世紀に成立したとされ、最大幅4.8m、深さ2.4mの堀により三方を囲まれる。北側には堀が存在せず、東西方向の開折谷を代用としている。土塁は検出されなかったが、堀の覆土から土塁を切り崩して埋め立てた状況が確認されているので、本来は内側に存在していたといえる。また、堀は用水路として利用していた可能性もある。

この二遺跡から復元された方形居館に共通する点は、居館(主郭)の規模が一辺100m足らずということである。また、堀の一部は自然地形を利用している点も注目しておきたい。このほかに、居館周辺に階層差のある家臣の宅地が見られ、別宅が16世紀後半に寺として転用されることも共通するといひ、戦国期の神奈川における地域支配の一形態との指摘がある(富永 2006)。

県内の城郭

15世紀後半以降、全国的に戦国時代に入り、軍事的な緊張が多くなるなか、防御性を重視した城館が増える様相は前述のとおりである。ここでは県内の城郭のうち、前述の居館に含まれない平地の城や山上に築造された城を中心に取り上げることにする。

城郭研究には考古学、文献史学、縄張り研究など多方面から進められてきた。特に近年では、これまで後北条氏の典型的な城と理解されてきた杉山城が発掘調査の結果、15世紀末から16世紀初頭の上杉氏の城郭として報告された。この「杉山城問題」を契機に様々な分野の研究者によって議論が深められ、研究の共通点や問題点が明らかになったことは重要であろう(藤木監修 2005、峰岸・萩原編 2009)。

また、近年では各戦国大名の特格的築造技術について、独自の技術として成立していたのか疑義が指摘され(佐々木 2008、萩原 2010)、その領国のみで完結するものではなく、広範に認められることが指摘されている(齋藤 2003・2008)。県内に関わるものであれば、後北条氏に特格的といわれた角馬出についてもその一例である(八巻 1990、佐々木 2010)。

さて、改めて城郭の堀に注目すると、縄張り研究で堀を扱う場合、曲輪の配置など城郭総体を述べる時に合わせて触れられることが多い(西股 2001など)。また、堀の配置から分類・分布の特徴を見ることで構築背景に迫る論もある(千田 1989)。それは各遺構のパーツ論、それが集まって構成する城郭の空間、そしてその背景となる軍事性を研究するという特質からであろう。

考古学から堀を述べる場合、発掘調査報告書の考察で取り上げられることが多い。特に障子堀については山中城跡(鈴木 2010)や深谷城跡(永井・吉田 2006)で形態や規模で分類も行われている。さらに、千葉

県内外の障子堀について、堀底の形態分類による隔年試案が示され（井上 2000）、本プロジェクトでも参考にしている。県内に関わる項目を要約すると、以下のとおりである。

- ・障子堀そのものは15世紀前半から出現し、東北から関東に掛けて広く分布する。
- ・16世紀後半には後北条領国化した地域に多い。
- ・明から後北条氏関係する城郭では、障壁が規則的に連続し、方形の堅穴が一列に連続する。といった特徴が見られるという。

一方、県内の城郭に関して、発掘調査成果は増加しているものの、堀に関する論考は少ないといえる。そのような中、近年では後北条氏の城郭について発掘調査から築造技術にせまる試みが行われた（東国中世考古学研究会 2010）。その中から小田原城関連の堀について触れておきたい。小田原城には、文献史料と考古学の発掘成果から名称と構築年代が確認できる事例があり、三の丸新堀、総構堀がそれにあたる。三の丸新堀は天正15年（1587）6月以前に構築されたものであり、総構堀は天正15年6月から天正18年（1590）までの間に成立した堀であるという。これらの堀からは堀障子が確認されている。後北条氏が小田原に構築した堀は、法面が直線的に仕上げられ、角度は鋭角である。コーナーなどの稜線は筋が真っ直ぐ通るといった特徴が見られる。障子堀は一定の高さで地山を掘残して構築し、上端部に木をオーバーフローさせるための溝を刻み、水堀として機能していたと推測されている（佐々木 2010）。

小田原城以外の城郭でも障子堀は確認され、丸山城（105、128）や河村城（115、116、129）があげられ、堀内の障壁としては玉縄城（52）でも確認されている。丸山城や河村城の障子堀は小田原城のそれと似ているとも受け取れるが、客観的なデータ分析を踏まえないといけない。また、堅堀は玉縄城（118）や津久井城（123、124）で確認されているが、形態はそれぞれ異なる。個別遺構の精査をもとに各城郭の共通項と差異を検討していく必要があるだろう。（松葉）

2. 県内で発掘された城館と堀の調査状況

神奈川県内では、県史や各市史等に城館として数多くの遺跡が紹介されている。それらの遺跡の中には伝承地として紹介されているものの発掘調査が実施され報告書が刊行されている遺跡は少ない。その中でも、中世前期の都市である鎌倉は、武家屋敷として推定される遺跡は数多く存在するが、小規模な発掘調査が多く、発掘調査により武家屋敷の様相が解明された遺跡はさほど多く、大部分の遺跡は中世都市としての土地利用が解明されていることが多い。また、中世後期の都市である小田原市は、後北条氏の本城である小田原城があり城下を中心として数多くの発掘調査が実施され報告書が刊行されている。2009年から中世プロジェクトチームでは神奈川県内の城館集成を行ない、城跡、砦、堀、土塁等の中世城館として発掘調査報告書が刊行されている遺跡として、横浜市2遺跡5ヶ所、川崎市1遺跡1ヶ所、横須賀市4遺跡11ヶ所、平塚市7遺跡29ヶ所、鎌倉市8遺跡22ヶ所、茅ヶ崎市1遺跡2ヶ所、逗子市3遺跡10ヶ所、相模原市2遺跡13ヶ所、三浦市1遺跡1ヶ所、秦野市2遺跡2ヶ所、厚木市3遺跡3ヶ所、大和市3遺跡7ヶ所、伊勢原市3遺跡10ヶ所、海老名市3遺跡4ヶ所、綾瀬市2遺跡2ヶ所、松田町1遺跡1遺跡、山北町1遺跡3ヶ所を集成した。続いて、集成した遺跡の中で堀が確認されているものについて、堀の規模、葉研堀、箱堀等の形態、土塁や土橋の有無、障壁の有無等の堀底の形状等についての分類を行った。

現在各地域で調査されている城館の大部分は、住宅の建て替え等の小規模な調査が多く堀、土塁、柵列等

の一部分のみが調査される場合が多く、城館の様相が不明な部分が多いのが現状である。しかし、中でも城館の整備等を目的とした発掘調査が行われて城館の性格が解明されているものもある。以下、各市域での発掘調査である程度の城館についての状況が解明されているものについて述べる。

茅ヶ崎城 [1~4]

横浜市都筑区茅ヶ崎に所在。城跡は「じょうやま」と呼ばれ、早瀬川南岸の先端部に位置する。扇谷上杉氏の拠点と考えられ、14世紀末から15世紀代に使用されたと考えられる。城跡は、西郭・中郭・北郭・東郭・東下郭・東北郭の6郭と根小屋地区から構成される。1990年、1993年、1994年、1998年、2003年、2005年の7回にわたってトレンチによる発掘調査が実施されており、調査では、空堀、土塁、櫓列、溝状遺構、土坑、ピット、地表面等の遺構が調査されている。遺物は見込みに渦巻文を持つかわらけ、常滑窯・瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、青磁碗などの舶載磁器、銭貨、板碑、金属製品、鉄滓、壁土等多数出土している。各トレンチで確認された堀は、堀上幅2.3m~5.8m、堀底幅1.1m~3.9m、深さ1.0m~4.5m、堀の傾斜角50°~80°をそれぞれ測る。堀の形態はトレンチ調査という制約から不明なものが多いが確認されたものは箱堀状を呈し、堀底の形態は堀障子が堀の方向に直交している形態のものが確認されている。

玉縄城 [50~58、118]

鎌倉市榑木、玉縄に所在し、標高50m~80mの丘陵上に造られた城である。永正9年(1512)に、小田原の伊勢宗瑞(北条早雲)により、相模国に勢力を張る三浦氏の攻略のために築城された城で、関東各地に造られた後北条氏の支城の一つである。現在は、学校建設や宅地造成により城域は分断され、旧状を残している部分は少なくなっている。周辺には、「城山」「城宿」「城廻」等の地名が確認できる。1987年~2000年に個人住宅建設やマンション建設のための発掘調査が実施された。調査では、堀(塹壕・堀切)、切岸、土塁、平場、溝状遺構、土坑、地表面等の遺構が確認されている。遺物は、青磁・白磁・明染付等の舶載磁器、瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、かわらけ、銭貨、漆器、金属製品、石製品等が出土している。確認された堀は、堀上幅9.0m~20.0m、堀底幅1.3m~2.0m、深さ3.5m~10.8m、堀の傾斜角34°~70°をそれぞれ測る。堀底に土橋、段が確認でき外側には土塁も確認できるものもある。堀底の土橋は堀障子の役割をするものと考えられている。また、複数の時期が確認でき薬研堀から箱堀へ作り直されている堀も確認されている。

津久井城 [78~88、121~124]

相模原市津久井町字根小屋あり、相模川の谷口部右岸の独立峰の城山に位置する。津久井城は後北条氏配下の内藤氏の居城として、甲斐国との境目の城としての役割を担った城である。発掘調査は、1996年~2005年にかけて「御屋敷跡曲輪」において発掘調査が実施された。調査では、堀(箱堀・塹壕)、土塁、礎石建物、掘立柱建物、石列、土坑群、虎口等の意向が確認された。また、2008・2009・2010年には公園整備を目的として、本城曲輪・米曲輪・土蔵曲輪、馬場等でトレンチによる調査が実施された。調査では、階段状遺構、石敷、石列、地表面等が確認され、米曲輪から本城曲輪へと通じる虎口、門跡と考えられる礎石建物が確認され、具体的な登城ルートの一部が明らかとなった。遺物は、白磁坏・明染付碗・合子等の舶載磁器、瀬戸窯・常滑窯などの国産陶器、かわらけ、鉄製品、石製品、銭貨等が出土している。確認された堀は、堀上幅2.5m~9.0m、堀底幅0.6m~4.1m、深さ1.1m~5.1m以上、堀の傾斜角22°~87°をそれぞれ測る。堀は、

東側馬場で上下2段に連ねた箱堀、北方向から南方向へ向かう塹堀、堀底に大型の礫・砂利を充填し平坦面を造成している部分、テラス状の付帯施設が確認されている。

深見城 [98・99]

大和市深見に所在し、相模野台地から東へ張り出す舌状台地の東側、境川により形成された河岸段丘状に立地する。城跡は、15世紀中頃に実在した「山田伊賀守入道経光」の居城であることが『新編相模国風土記稿』に記されているのみで詳細は不明である。発掘は、1984～1986年と1999～2000年の2回にわたりトレンチによる調査が、主郭・外郭・内堀・外堀・天竺坂堀の地点で実施されている。調査では、堀、土塁、土橋、虎口、井戸、土坑が確認された。遺物は、青磁碗等の舶載磁器、瀬戸緑釉皿・常滑窯甕等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ、石製品、銭貨等が出土している。確認された堀は、堀上幅3.3m～20.0m以上、堀底幅2.0m～4.5m、深さ2.2m～8.3m以上、堀の傾斜角40°～85°をそれぞれ測る。確認された堀には、法面の角度が途中で変化するものが確認されている。外堀が2本存在することが確認され、天竺坂堀では薬研堀から箱堀へ変改されたものも確認されている。発掘調査の結果、城は出土遺物等から判断して14世紀末頃から15世紀中葉と16世紀代の2時期に城地が利用されていることが指摘されている。

丸山城 [102～106、126～128]

伊勢原市下槽屋に所在し、北側を歌川、南側を渋谷川の谷に挟まれた東西に細長い尾根に立地している。城跡は、鎌倉時代初期の槽屋左衛門尉有季の居城とされているものである。現在城跡は、ほぼ中央部分を国道246号線により分断されている。城域は東海大学病院、高部屋神から上町並までの成瀬地区に広がっていると推定される。発掘調査は1993年～2009年の間に、第1東海自動車道拡幅にかかる調査、東海大学病院内の調査、成瀬地区の詳細分布調査、成瀬地区土地区画整理事業、丸山地区土地区画整理事業に伴ってそれぞれ実施されている。調査では、中世後半と推定される大規模な溝、堀切、土塁、竪穴状遺構、地下式坑等が発見されている。遺物は、龍泉窯及び同安窯系の青磁、古瀬戸壺・常滑窯甕・片口鉢・瀬美窯甕等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ、銭貨、瓦等が出土している。確認された堀は、堀上幅4.1m～17.0m、堀底幅0.4m～10.0m、深さ1.1m～9.8m、堀の傾斜角30°～70°をそれぞれ測る。丸山地区では、堀内部に不規則な間隔で土橋状の掘り残しがあり、その間を深く掘り下げて障子堀状にしているものが確認されている。また、箱薬研形を呈した堀が鈎の手状に屈折するように掘られたものも確認されている。また遺物の中には、横浜市の茅ヶ崎城で出土したものと見込に溝巻文を持つかわらけが出土している。

早川城 [112]

綾瀬市早川に所在し、日久尻川に向かって舌状に張り出す台地の南端部に位置する。城跡は、鎌倉時代の御家人である渋谷氏一族に関係する者の居城であるとされているが不明な部分が多い。発掘調査は1989年～1994年までの6次にわたりトレンチにより実施された。調査では、堀切、土塁、物見塚、柱穴群、遺状遺構、溝状遺構、土坑等が確認されている。遺物は、かわらけ、火舎等が出土している。調査で確認された堀は、堀上幅3.5m～約14.0m、堀底幅0.8m～2.4m、深さ0.3m～6.7m、堀の傾斜角20°～70°をそれぞれ測る。確認された堀の底面には、段が確認されたものや、塹堀と重複して確認されたものもある。築城は、伝承によると12世紀末頃までさかのぼるがその当時の遺物の出土はない。調査により出土した遺物などから14世紀代

から15世紀代にかけて使用されていたと思われる。また、周辺調査では、早川城の関連遺跡として、板碑が多く出土している「びわみ堂跡」と渋谷氏関連の伝承を持つ「長泉寺」の2ヶ所の調査が実施されている。

河村城 [115・116、129]

足柄上郡山北町に所在。酒匂川中流域左岸の城山と呼ばれる独立丘陵上に立地する。戦国時代には、後北条氏の甲斐岡田氏に対しての支城として存在し、天正18年(1590)の豊臣秀吉の小田原攻めにより廃城となったとされている。平成元年度より詳細分布調査やトレンチ調査が実施された。1992年～1994年度に詳細分布調査が実施され、根小屋とされる地域で建物址、2つの形態の堀跡が発見され、時代の異なる館跡の存在が推察された。平成15～17年度には史跡整備に関連した発掘調査が実施された。調査では、堀切、空堀、土橋、橋脚遺構、塹穴状遺構群、地業面等の遺構が調査されている。遺物は戦国期の染付・青磁・白磁等の船載磁器、常滑窯・古瀬戸梅瓶などの国産陶器、かわかけ、鉄製品、銭貨等14世紀後半から16世紀後半までの時期のものが出土している。調査で確認された堀は、堀上幅6.0m～約25m、堀底幅0.5m～16.6m、深さ3.0m～12.0m、堀の傾斜角40°～70°をそれぞれ測る。堀切では、障子堀を確認した。また、数回にわたる発掘調査により古絵図に記載のない空堀も確認されている。

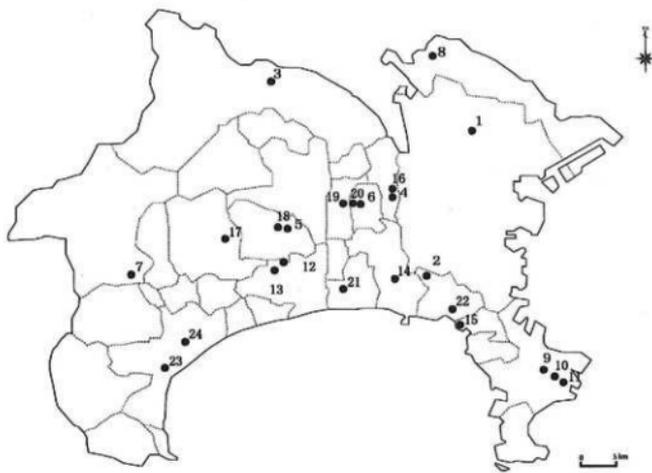
その他の城館

以上7つの城跡について概略を述べたが、ここでは県内のその他の城館の状況について述べる。大部分の城館は個人住宅の建て替え等小規模の発掘調査が多く、状況が不明なものが多い。その中でも、堀跡、土塁、土橋等の城館に関係する遺構が確認されているものについて簡単に述べる。川崎市の大沢城(6)では、尾根の平場を削りし堀割・切岸・土塁を構築していることが確認されている。横須賀市の衣笠城(7～12)では、土橋状遺構や各平場間で切岸が確認されている。また、城跡内の経塚の調査から出土した遺物から三浦氏との関係が指摘されている。同市佐原城(13～15)は、三浦大介義明の七男の佐原十郎義連の居館と考えられており、城跡に關係する段切が確認されているが、それ以外の遺構は確認されていない。同市怒田城(17)では、2条の空堀と土橋状遺構が確認されている。平塚市の岡崎城(18～27)では、堀跡、土塁状遺構、曲輪の一部が確認され、外郭的性格を持つ方形形郭の一部も確認されている。同市真田城(34～37)では、城趾と推定される台地で丘陵縁辺部をめぐる堀や虎口が確認されている。藤沢市大庭城(63～66)では、丘陵全体が包蔵地として確認され、堀切、土塁、土橋、郭状遺構等が確認されている。逗子市住吉城(70～72)では、主郭とされる「げんじがやと」を取り囲むように数段の平場、切岸状遺構、土塁状遺構が確認されている。大和市下鶴間城(97)は、山中修理助貞信の旧跡との伝承があり、土塁、腰郭、堀状遺構、掘立柱建物、溝状遺構等が確認されている。居館跡としては、秦野市波多野氏館跡(90)、伊勢原市上杉定正館(101)、海老名市上浜田遺跡(108)、綾瀬市宮久保遺跡(113)、茅ヶ崎市近藤右衛門尉経秀居館(119・120)等で調査が実施され、居館に關係する溝状遺構、掘立柱建物、櫓列、井戸等の遺構や、当該期の遺物が出土している。鎌倉市内では、小規模な調査が多いが今小路西遺跡(46)、公方屋敷跡(47・48)、杉本寺周辺遺跡(49)、北条時房・頼時邸(59)等では、武家屋敷に關係する多くの遺構や船載陶磁器、国産陶器等が多数出土している。調査事例の増加と共に様相が解明されつつある。小田原市内では、小田原城の城下を中心として300ヶ所以上の発掘調査が実施されており、二の丸・三の丸を中心として、後北条期の障子堀や石垣、屋敷跡等が確認され、当該期の遺物も多く出土している。近世小田原城の石垣や堀等の遺構の調査事例も増加し

ている。また、2006年と2008年に調査が行われた、同市下堀に所在する下堀方形居館では二重に巡る堀が確認されている。下堀方形居館は、中世の豪族志村氏の屋敷地といわれている。居館は、東西103m、南北129mの規模を持ち、北西隅と西側に土塁が残存している。堀からは、龍泉窯青磁碗・小鉢・景德鎮端反甲等の舶載磁器、瀬戸直縁大皿・常滑窯片口鉢等の国産陶器、かわらけ、漆器碗、筭等の12世紀から16世紀にかけての遺物が多数出土している。

以上、神奈川県内の城館跡についての発掘調査の現状を述べたが不明な部分が多い。今後の発掘調査の増加による資料の蓄積がもたれる。

(宮坂)



1. 茅ヶ崎城 2. 玉縄城 3. 津久井城 4. 深見城 5. 丸山城 6. 早川城 7. 河村城
8. 小沢城 9. 衣笠城 10. 佐原城 11. 怒田城 12. 岡崎城 13. 真田城 14. 大庭城
15. 住吉城 16. 下鶴岡城 17. 渡田野館跡 18. 上杉定正館 19. 上浜田遺跡 20. 宮久保遺跡
21. 近藤石衛門尉経秀居館 22. 今小路西遺跡・公方屋敷跡・杉本寺周辺遺跡・北条時房・頼時邸
23. 小田原城 24. 下堀方形居館

第1図 城館位置図

註

- (1) 中世の「城館」・「居館」という名称は、問題点が指摘されている(中澤 2006、松岡 2009など)。中世初期の「館」は国司や地方を支配する豪族たちの拠点であったと指摘され(五味 1993)、中世前期の武士の住居は「屋敷」と表現されることが多いという(岡 1995)。また、関東以西における中世的な「城」の用例は、武士よりも寺社勢力の方が先行し、「城」や「館」は武士固有の空間ではないと指摘される(中澤 2006)。これらの用語は使い分けが必要と考えられるが、発掘調査から述べる場合、遺構の性格を決めることが困難である場合も多い。そのため、本稿では従来の慣例に沿って、地域において身分の高い階層の日常の住居や拠点を「居館」、軍事的な防衛性を有した戦時の拠点を「城」、それらの総称を「城館」としておく。

- (2) 堀及び溝の断面形状は、V字形を基研形とし、報告書の記載と異なる場合があることをお断りしておく。
- (3) 本プロジェクトの「神奈川の中世城館(1)～(3)」で取り上げた発掘調査報告書は、文献名を省略し、文献番号としている。

引用・参考文献

- 赤星直忠 1969 『鎌倉市史 考古編』 吉川弘文館
- 天野賢一・長澤邦夫・林雅忠 2010 『下厩広坪遺跡第1地点・下厩塚田町遺跡第1地点・下厩道上町遺跡第1地点』
かながわ考古学財団調査報告259
- 荒川正夫 2003 「中世城館の成立と地域性」『中世東国の世界1 北関東』 高志書院
- 石井進・萩原三雄編 1991 『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 石丸照 1978 「中世鎌倉の側面―初期の都市防備体制を見る―」『三浦古文化』23 三浦古文化研究会
- 市川正史ほか 1993 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ』 神奈川県埋蔵文化財センター
- 市川正史 1997 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』 かながわ考古学財団調査報告15
- 市川正史ほか 1997 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ』 かながわ考古学財団調査報告17
- 井上哲朗 2000 「障子堀の分類と編年」『千葉県文化財センター研究紀要』20 千葉県文化財センター
- 宇都洋平 2010 「木組み側溝から見た鎌倉遺跡群の区画」『中世都市研究』15 中世都市研究会
- 大本衛ほか 1980 『日本城郭大系』6 新人物往来社
- 大三輪能彦ほか 1983 『研修場用地発掘調査報告書』 鎌倉市鶴岡八幡宮
- 岡陽一郎 1995 「中世居館再考 その性格をめぐって」『中世の空間を読む』 吉川弘文館
- 岡陽一郎 2004 「幻想の鎌倉城」『中世都市鎌倉の実像と境界』 高志書院
- 岡陽一郎 2006 「鎌倉の変容」『鎌倉時代の考古学』 高志書院
- 神奈川県考古学会 2002 『かながわの中世～鎌倉から小田原へ～』平成13年度考古学講座発表要旨
- 神奈川県考古学会 2006 『神奈川の城館跡』平成17年度考古学講座発表要旨
- 河野真知郎・宮田眞・瀬田哲夫・清水菜穂 1990 『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会
- 熊谷満 2011 「大倉幕府跡 雪ノ下三丁目637番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27 鎌倉市教育委員会
- 玉枝文彦 1993 「館の社会史」『神奈川地域史研究』11 神奈川地域史研究会
- 近藤真佐夫ほか 1989 『堀之内東遺跡』 日本歴史学研究所
- 荻木秀雄 2006 「鎌倉の館と城―鎌倉城を中心に―」『神奈川の城館跡』 神奈川県考古学会
- 齋藤慎一 2003 「戦国大名城館論叢書」『戦国時代の考古学』 高志書院
- 齋藤慎一 2008 「戦国大名北条家と城館」『中世東国の世界』3 高志書院
- 佐々木健策 2008 「相模府中小田原の構造―小田原城に見る本拠地と大名権力―」『中世東国の世界』3 高志書院
- 佐々木健策 2010 「小田原本城にみる築城技術」『小田原北条氏の城郭―発掘調査からみるその築城技術―』東国中世考古学研究会
- 佐々木満 2008 「武田氏と北条氏の虎口・門」『中世東国の世界』3 戦国大名北条氏 高志書院
- 霧出俊浩 2006 「東田原中丸遺跡―中世の在地領主居館跡―」『神奈川の城館跡』 神奈川県考古学会
- 鈴木敏中 2010 「山中城」『静岡県における戦国山城』 静岡県考古学会
- 鈴木謙一郎・菊川英政ほか 2001 『古郡鎌倉』を取り巻く山腰部の調査』 神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)

かながわ考古学財団

- 千田嘉博 1989 「中世城郭から近世城郭へ」『月刊文化財』305 第一法規出版
- 富永樹之 2009 「神奈川県における方形居館とその周辺の景観—茅ヶ崎市上ノ町遺跡と清川村表の屋敷遺跡を中心に—」
『扶桑 田村兎一先生喜寿記念論集』青山考古学会
- 中井均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48 物質文化研究会
- 中井均 1991 「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』新人物往來社
- 中井均 2009 「換出遺構よりみた城郭遺構の年代観」『戦国時代の城—遺跡の年代を考える—』高志書院
- 永井智教・吉田智哉ほか 2006 『深谷城跡（第8～11次）』深谷市教育委員会
- 中澤克昭 1999 『中世の武力と城郭』吉川弘文館
- 中澤克昭 2006 「居館と武士の機能—出土鉄族と狩猟をめぐって—」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 西股綾生 1999 「後北条の築城技術における虎口形質の獲得課程」『織豊城郭』第6号 織豊城郭研究会
- 西股綾生 2001 「中世城郭における窓断縁構造」『中世城郭研究』15 中世城郭研究会
- 萩原三雄 2010 「戦国期東国の築造技術と諸問題」『小田原北条氏の城郭—発掘調査からみるその築城技術—』東国中世考古学研究会
- 樋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5 東京考古談話会
- 樋口定志 1990 「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』330 日本史研究会
- 樋口定志 2004 「中世前期居館の展開と戦争」『戦争1—中世戦争論の現在—』青木書店
- 樋口定志 2005 「東国の武士居館」『戦国の城』高志書院
- 広瀬和雄 1988 「中世村落の形成と展開」『物質文化』50 物質文化研究会
- 広瀬和雄 2006 「領主居館の成立と展開—西日本を中心として—」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 藤木久志監修 2005 『戦国の城』高志書院
- 松岡達 2009 「東国における「館」・その虚像と原像」『中世城郭研究』23 中世城郭研究会
- 松葉崇 2010 「相模国所在の城館跡に見る築城技術」『小田原北条氏の城郭—発掘調査からみるその築城技術—』東国中世考古学研究会
- 中世考古学研究会
- 馬淵和雄 1993 「大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字住柄38番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄・岡陽一郎・秋山哲雄 1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
- 峰岸純夫・萩原三雄編 2009 『戦国時代の城—遺跡の年代を考える—』高志書院
- 宮田眞・手塚直樹 1991 『政所跡』政所跡発掘調査団
- 村田修三 1987 『図説中世城郭事典』新人物往來社
- 八巻孝夫 1990 「後北条氏領国の馬出」『中世城郭研究』第4号 中世城郭研究会
- 八巻孝夫 1993 「北条氏照の城郭—後北条氏の城郭における氏照系城郭試論」『中世城郭研究』第7号 中世城郭研究会

近世民家の集成(9)

近世プロジェクトチーム

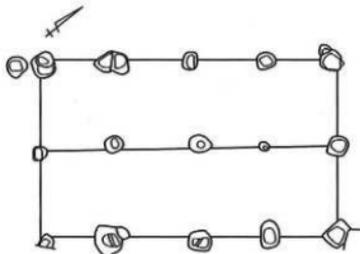
はじめに

県内の近世民家の集成の第9回目である。本プロジェクトチームでは、県内で調査された近世建物址の集成を行い、これまでに252棟分のデータを蓄積してきた。今回は、2009年から2010年3月までに刊行された報告書のうち、平塚市真田北金目遺跡群、厚木市城原遺跡、同市中依知遺跡、横浜市原宿町遺跡を取り上げ、19棟分を追加した。

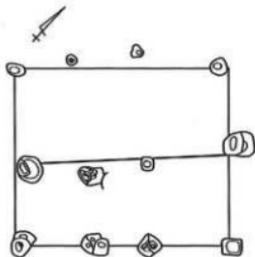
凡例

- ・資料No.は近世民家の集成(1)からの続き番号である。
- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・建物の縮尺は1/100とし、スケールを省略したが、規模の大きいものについては適宜縮尺を変え、図面ごとにスケールを示した。
- ・梁間、桁行の脚数は単に柱穴の数ではなく、柱間距離から概略割り出した1間の梁間及び桁行寸法で換算した数値を示している。
- ・坪数は梁間×桁行の面積を、現行の一坪3.3㎡で除したものである。
- ・建物の機能・構築時期については、報告書の記載に準じているが、母屋と付属建物の別が明確なもの、出土遺物から時期が推定できるものについては記載した。

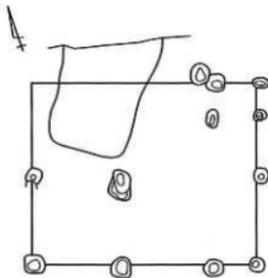
資料No.	253	遺跡名	真田・北金目遺跡群			所在地	平塚市北金目		
遺構名	41B区SB001		構築場所			丘陵裾部を整地した平坦面			
規模	梁間	3.6 m	桁行	6.0 m	2 × 4 間	面積	21.6 ㎡	坪数	6.5 坪
柱穴の形状	楕円形・異形方形柱	柱間距離	梁	1.7 ~ 2.0 m	桁	1.45 ~ 1.55 m	主軸方位	N-38°-E	
出土遺物				付属施設					
建物の機能	母屋			構築時期					
備考	東柱を伴う								



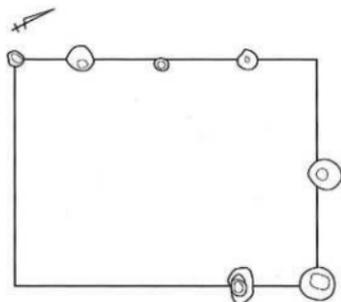
資料No.	254	遺跡名	真田・北金目遺跡群			所在地	平塚市北金目			
遺構名	41B区SB002		構築場所			丘陵裾部を整地した平坦面				
規模	横	梁間	3.8 m	桁行	4.4 m	2 × 3 間	面積	16.7 m ²	坪数	5.1 坪
柱穴の形状	楕円形・長方形主体	柱間距離	梁	1.8 ~ 2.0 m	桁	1.2 ~ 1.6 m	主軸方位	N-41°-E		
出土遺物						付属施設				
建物の機能						構築時期				
備考	木材(柱材)・根石出土、北東ないしは南西側に延びる可能性あり									



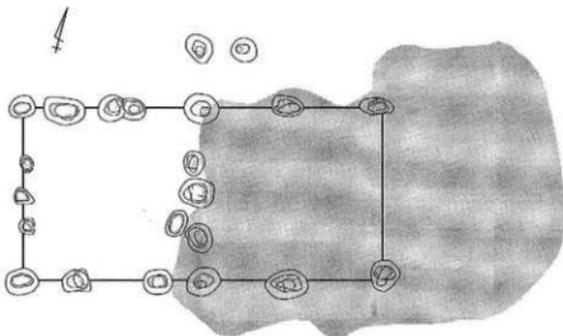
資料No.	255	遺跡名	真田・北金目遺跡群			所在地	平塚市北金目			
遺構名	51C区SB001		構築場所			丘陵裾部を整地した平坦面				
規模	横	梁間	3.8 m	桁行	4.6 m	3 × 3 間	面積	17.5 m ²	坪数	5.3 坪
柱穴の形状	楕円形・長方形主体	柱間距離	梁	0.9 ~ 1.9 m	桁	0.7 ~ 1.85 m	主軸方位	N-72°-W		
出土遺物	陶磁器					付属施設				
建物の機能						構築時期				
備考	南側ないしは南西側に延びる可能性あり									



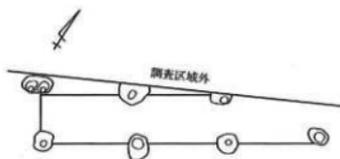
資料No.	256	遺跡名	城際			所在地	厚木市城際				
遺構名	20号独立柱建物址		構築場所	沖積微高地上							
規模	梁間	4.5 m	桁行	6.1 m	2 × 4 間		面積	27.5 m ²	坪数	8.3 坪	
柱穴の形状	円形・楕円形主体		柱間距離	梁	1.8 ~ 2.3 m	桁	1.8 ~ 2.2 m	主軸方位	N - 70° - W		
出土遺物	瀬戸・美濃陶器			付属施設							
建物の機能				構築時期							
備考	北側に庇?										



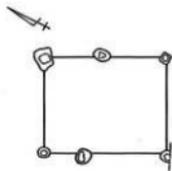
資料No.	257	遺跡名	中依知			所在地	厚木市中依知				
遺構名	B1号(礎石)建物址		構築場所	緩斜面							
規模	梁間	3.5 m	桁行	7.2 m	2 × 4 間		面積	25.2 m ²	坪数	7.6 坪	
柱穴の形状			柱間距離	梁	1.75 m	桁	1.8 m	主軸方位	N - 75° - E		
出土遺物	陶磁器・石製品・鉄釘			付属施設							
建物の機能				構築時期							
備考	基礎の石は長径30 ~ 50cmの河原石が主体、東側に径5cm以下の小礫を主体とする礫敷きあり										



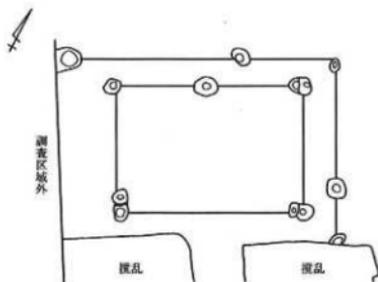
資料No.	258	遺跡名	原宿町		所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次2号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地						
規模	梁間	1.1 ~ m	桁行	5.7 ~ m	1 × 3 ~ 間	面積	㎡		坪数	坪
柱穴の形状	楕円形・不整形	柱間距離	梁	0.9 ~ 1.1 m	桁	1.9 m	主軸方位	N - 59° - E		
出土遺物	肥前磁器				付属施設					
建物の機能					構築時期					
備考	北側及び東側に延びる可能性あり、南側は底か									



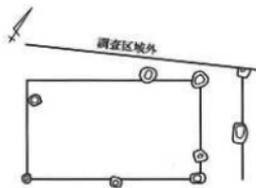
資料No.	259	遺跡名	原宿町		所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次5号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地						
規模	梁間	2 m	桁行	2.5 m	1 × 2 間	面積	5 ㎡	坪数	1.5 坪	
柱穴の形状	方形・円形	柱間距離	梁	2.0 m	桁	1.2・1.3 m	主軸方位	N - 25° - W		
出土遺物	産地不明陶器				付属施設					
建物の機能	付属建物				構築時期					
備考	土坑が伴う可能性あり、4 m西側に6号掘立柱建物址あり									



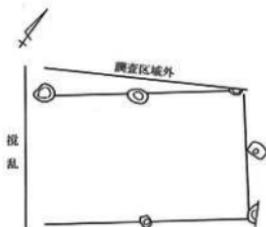
資料№	260	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次6号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	2.4 ~ m	桁行	3.6 ~ m	1 ~ × 2 ~ 間	面積	㎡	坪数	坪
柱穴の形状	不整円形	柱間距離	梁	2.2・2.4 m	桁	1.8 ~ 1.85 m	主軸方位	N-61°-E	
出土遺物				付属施設	北側及び東側に庇				
建物の機能	母屋			構築時期					
備考	南側及び西側に延びる可能性あり、4 m東側に5号掘立柱建物址あり								



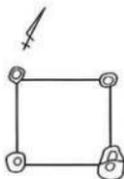
資料№	261	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次10号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	2 ~ m	桁行	3.55 m	1 ~ × 2 ~ 間	面積	㎡	坪数	坪
柱穴の形状	長方形・不整円形主拵	柱間距離	梁	2.0 m	桁	1.75・1.8 m	主軸方位	N-59°-E	
出土遺物				付属施設	東側に庇				
建物の機能				構築時期					
備考	北側に延びる可能性あり								



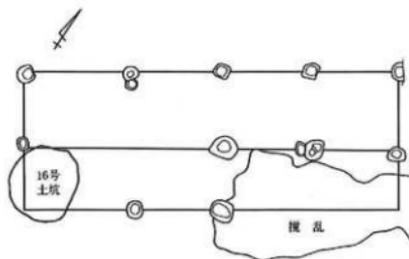
資料No.	262	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次13号掘立柱建物址			構築場所	旧東海道沿いの平坦地				
規模	梁間	2.6 ~ m	桁行	4 ~ m	1 ~ × 2 ~ 間	面積	m ²	坪数	坪
柱穴の形状	長方形・不整形柱	柱間距離	梁	1.3 m	桁	2 ~ 2.2 m	主軸方位	N - 55° - E	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考	西側及び北側に延びる可能性あり								



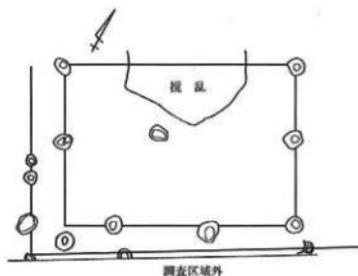
資料No.	263	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次18号掘立柱建物址			構築場所	旧東海道沿いの平坦地				
規模	梁間	1.9 m	桁行	1.9 m	1 × 1 間	面積	3.6 m ²	坪数	1.1 坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.9 m	桁	1.9 m	主軸方位	N - 62° - E	
出土遺物	陶磁器				付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考									



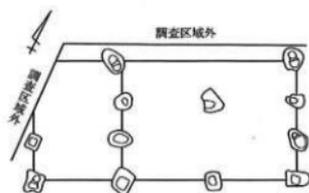
資料No.	264	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次20号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	2.8 m	桁行	7.6 m	2 × 4 間	面積	21.28 m ²	坪数	6.4 坪
柱穴の形状	不整円形・方形	柱間距離	梁	1.5 ~ 1.7 m	桁	1.8 ~ 2.0 m	主軸方位	N-58°-E	
出土遺物	肥前磁器			付属施設					
建物の機能				構築時期					
備考									



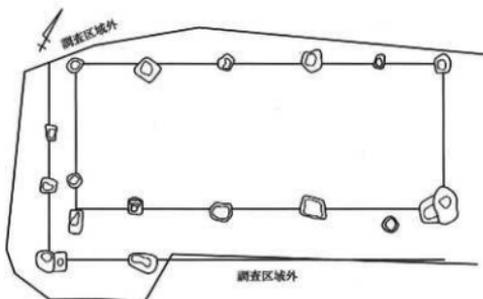
資料No.	265	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次21号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	3.6 m	桁行	4.8 m	2 × 3 間	面積	17.2 m ²	坪数	5.2 坪
柱穴の形状	円形・不整円形	柱間距離	梁	1.5 ~ 2.0 m	桁	1.5 ~ 1.8 m	主軸方位	N-63°-E	
出土遺物				付属施設					
建物の機能				構築時期					
備考	西側及び東側に庇?								



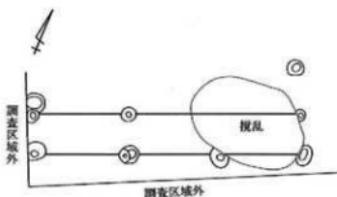
資料No.	266	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次23号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	2.4 m	桁行	5.4 m	2 × 3 間	面積	13 m ²	坪数	3.9 坪
柱穴の形状	方形・桃円形主体	柱間距離	梁	0.8 m		桁	1.8 m	主軸方位	N-63°-E
出土遺物				付属施設					
建物の機能				構築時期					
備考	東側及び北側に延びる可能性あり								



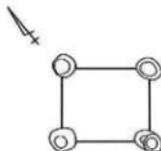
資料No.	267	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	1次25号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	3.3 m	桁行	7.7 m	2 × 5 間	面積	25.4 m ²	坪数	7.7 坪
柱穴の形状	方形・不整形円形	柱間距離	梁	0.9・2.4 m		桁	1.3 ~ 1.8 m	主軸方位	N-59°-E
出土遺物	瀬戸・美濃陶器			付属施設 西側及び南側に庇					
建物の機能	母屋			構築時期					
備考									



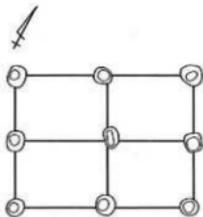
資料No.	268	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿					
遺構名	2次1号掘立柱建物址			構築場所	旧東海道沿いの平地地					
規模	梁間	m	桁行	5.5 ~ m	×	3 ~ 間	面積	m ²	坪数	坪
柱穴の形状	円形・楕円形		柱間距離	梁	m	桁	1.7 ~ 2.0 m	主軸方位	N - 63° - E	
出土遺物				付属施設	北側に庇					
建物の機能				構築時期						
備考	南側及び西側に延びる可能性あり									



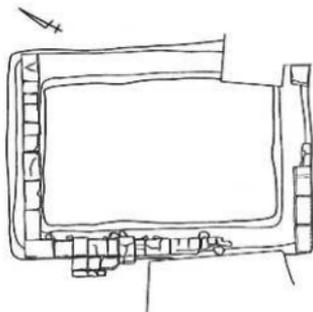
資料No.	269	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿					
遺構名	2次2号掘立柱建物址			構築場所	旧東海道沿いの平地地					
規模	梁間	1.6 m	桁行	1.8 m	1 × 1 間	面積	2.9 m ²	坪数	0.9 坪	
柱穴の形状	円形・隅丸方形		柱間距離	梁	1.6 m	桁	1.8 m	主軸方位	N - 49° - W	
出土遺物				付属施設						
建物の機能				構築時期						
備考										



資料No.	270	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	4次1号掘立柱建物址		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	2.7 m	桁行	3.6 m	2 × 2 間	面積	9.7 m ²	坪数	3 坪
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	1.3 ~ 1.4 m	桁	1.8 m	主軸方位	N - 60° - E	
出土遺物				付属施設					
建物の機能				構築時期					
備考									



資料No.	271	遺跡名	原宿町	所在地	横浜市戸塚区原宿				
遺構名	4次1号土蔵跡		構築場所	旧東海道沿いの平坦地					
規模	梁間	3.7 m	桁行	5.6 m	2 × 3 間	面積	20.7 m ²	坪数	6.3 坪
柱穴の形状		柱間距離	梁	m	桁	m	主軸方位	N - 29° - W	
出土遺物				付属施設					
建物の機能	蔵			構築時期 19世紀後半以降					
備考	礎石は60×33×15cm程度の切石を使用、布基礎は上部幅70cm・深さ80cmで径20cm以下の睡多量含む、出入り口は西側にあり								



神奈川県内出土装飾付大刀にみる象嵌等の製作技術の研究

林 雅恵

1. はじめに

装飾付大刀の研究は、形式分類による検討を中心に研究が進められ多くの成果を上げてきた。これに対し、近年は大刀に限らず、金工品の製作技術に関する研究が注目され、復元研究なども徐々に増加してきている。しかしながら、神奈川県内では2004年の柏木氏による大刀の研究で新たに象嵌大刀が発見されたものの、製作技術に関する研究は進んでいないのが現状である。また近年、新たな象嵌大刀が出土しており、むしろ検討材料は増加している。全国的にみても、装飾付大刀は類似するものがあったとしても同一と考えられるものはないともいわれられており、形式学的手法だけではなく製作技術的観点から詳細な検討を加えることは有効であると考えられる。

ここでは、装飾付大刀の中でも神奈川県内出土の象嵌大刀を中心に取り上げ、新たに集成を行う。県内では拵え全体の分かる象嵌大刀は1点もないが、大刀装具が部分的に出土する例が比較的多い状況である。これらの象嵌技術および柄に巻かれる銀線等の製作技術について検討する。従来の研究では、柄頭の形状や象嵌文様に主眼を置き、変遷および編年を検討する研究が主流とされてきた。また、最近では象嵌大刀の拵え全体から検討する研究（大谷2011）なども散見される。ここでは大刀装具の個別の加工技術を詳細に比較検討することにより、加工技術の抽出を行い、大刀の形式分類との擦り合わせを行いたいと考える。これにより装飾付大刀の変遷および系譜関係の検討を行い、編年案を提示し、さらにその生産体制と配布の背景なども視野に入れて検討していきたい。

2. 観察手法

象嵌技術及び彫金技術について観察するためCarton10X及び20Xのルーペを使用して肉眼で観察後、記録写真にはフィルム一眼レフカメラ（Canon EOS55）及びデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS 5D Mark II、2100万画素）を使用し、レンズはCanon Compact Macro Lens EF50mm及びCanon Macro Lens EF100mmを使い分けた。記録は実測図及び拡大図でのスケッチにより図化した。但し、クリーニング等が実施されていない資料に関しては観察不可能な場合もあり、既撮のX線写真からの検討も併せて行った。また、肉眼での観察が可能な状況であっても錆等で全容が明確に把握できない事例も多かった。今回のデータは、その中でも観察しえた部分からの検討である。また、既撮のX線写真は所蔵者・所蔵機関のご厚意により拝見させていただき、データ化させて頂いた。

3. 象嵌技術と分類案

今回の資料調査では、25遺跡（県内20、県外5）の装飾付大刀31振（県内26、県外5）を検討した（第1図、第1・2・5表）。実見をした資料は28振（県内23、県外5）である。このうち象嵌大刀の中には実見したが象嵌が錆等で肉眼観察できないためX線写真から観察した資料が2振（県内のみ）、『東京国立文化財研究所X線目録』から観察した資料が3振（県内のみ）である。これらの観察から3点の製作技術に関する知見を得た（第2表）。1点目は、銀線を嵌め込む溝の断面形である。2点目は、溝の断面形から想定され

る型の種類である。3点日は、象嵌の線幅と彫り深さに相関関係があり、さらに象嵌線の脱落的の多寡に
関連することが認められた。

(1) 彫溝の断面形について

象嵌は、金属を切削加工することで溝を作り、その空隙に金銀線を嵌め込み、表面をへらまたは先の平ら
な型で押さえ込み、金属線が脱落するのを防ぐ技術である（香取ほか1936）。今回の調査では、切削された
彫溝の断面をすべての資料で観察できたのではないが、検討可能な資料を分析し、以下の4種類に分類して
みたい。

- | |
|--|
| I. 開いたV・底面のやや丸いV字状、II. 三角形に近いV字状、III. 鋭利なV字状
IV. U字状・開いたU字状 |
|--|

彫溝の断面形は工具の形状の違いを示す痕跡であり、製作者あるいは工房の技術の質を示し、且つ製品の
仕上がりに影響するものとする。県内では、IIIは観察できず、IまたはIVが多く見られる。

(2) 型の種類について

上記で検討した溝の断面形から推定される型として、蹴り型とナメクリ型の2種類に分け、断面形の分類
と組み合わせた分類案を4項目設定した（第2図）。

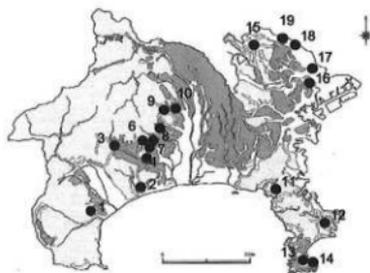
- | |
|--|
| a. 蹴り型……溝の断面形 Iに属するもの（I a）、IIに属するもの（II a）、IIIに属するもの（III a）
b. ナメクリ型……溝の断面形 IVに属するもの（IV b） |
|--|

古墳時代の象嵌は、一般的には蹴り型が使用されていたと考えられているが、ナメクリ型で打つとカエリ
（金属のめくれ）が生じるので金銀線が外れにくい利点があるとされている。現代では毛彫りが用いられる
ことが多いが、金銀線が外れやすいという特徴がある（鈴木2006）。実際に使用されている型は使うたびに
職人が毎日手入れをすることで多少の形状の変化があるため、厳密に同一の形状の型になるとは限らない。
また、型は同じ型でも打ち込む角度や力加減により型底にも変化が見られることを考慮する必要がある。
使用する型が異なることは製作者あるいは工房の差異を示す可能性が高いと考えられる。県内の資料ではa
蹴り型に属する資料が多い。しかし、III aに属するのは散見されず、県外の三ヶ尻林4号墳、松本23号墳など
の資料には見受けられた。

(3) 象嵌の線幅と彫り深さについて

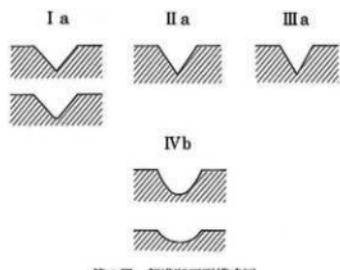
象嵌の金属線は物理的に型によって削られる溝の幅よりも太い線は入らない。そのため金属線の幅と彫溝
の幅により制約を受ける。また線が細い場合は脱落を防ぐため、彫溝は深く鋭角にならざるを得ない。逆に
太い金属線の場合、浅い溝でも脱落しにくい相関関係にある。今回の資料においても線幅0.2-0.4mmの細めの
金属線の場合では深めの溝であり、0.5-0.6mmの太めの金属線の場合は浅めの溝である場合が多いようである。
また、県内の資料には金属線自体が削られているためか、細い金属線にもかかわらず浅い溝の場合がある
が、脱落している部分も比較的多かったようである。文様においても本来のモチーフから崩れたり、配置
にばらつきのある資料が多いことから金属線は細くても、脱落しないように深く彫りをする技術が低い
可能性も考えられよう。しかしながら、彫痕を検討するには脱落している状態でなければ観察できないため、
技術を検討するにはむしろ非常に良好な資料といえる（図版2）。

一方で、銀線が2重に彫溝に入っている状態の資料も見られた。日向・洗水道跡aの銀線はクロスした
状態で脱落せず嵌め込まれている。また銀線端部が本来の文様からはみ出す箇所も散見され、やや精密さに
欠けるという印象があり、さらに詳細な検討を今後の課題としていきたい点である。

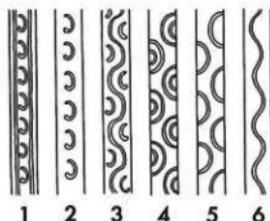


1 丸野2号墳	11 久木5丁目10号墓
2 淵沼124・126号墓	12 江奈2号墓
3 板上手25号墳	13 吉井山横穴墓
4 二子塚古墳	14 鳥ヶ崎横穴墓群
5 日向・洗木遺跡	15 布ヶ尾第二地区18街区1号墓
6 三ノ宮・尾根山古墳	16 鶴見区院岡町遺跡
7 惣尾山古墳	17 了源寺古墳
8 河瀬古墳	18 久木A3号墓
9 津治1号墳	19 久地西前田1次5号墓
10 小野公浜遺跡第3地点	

第1図 装飾付大刀出土遺跡位置図



第2図 型溝断面形模式図



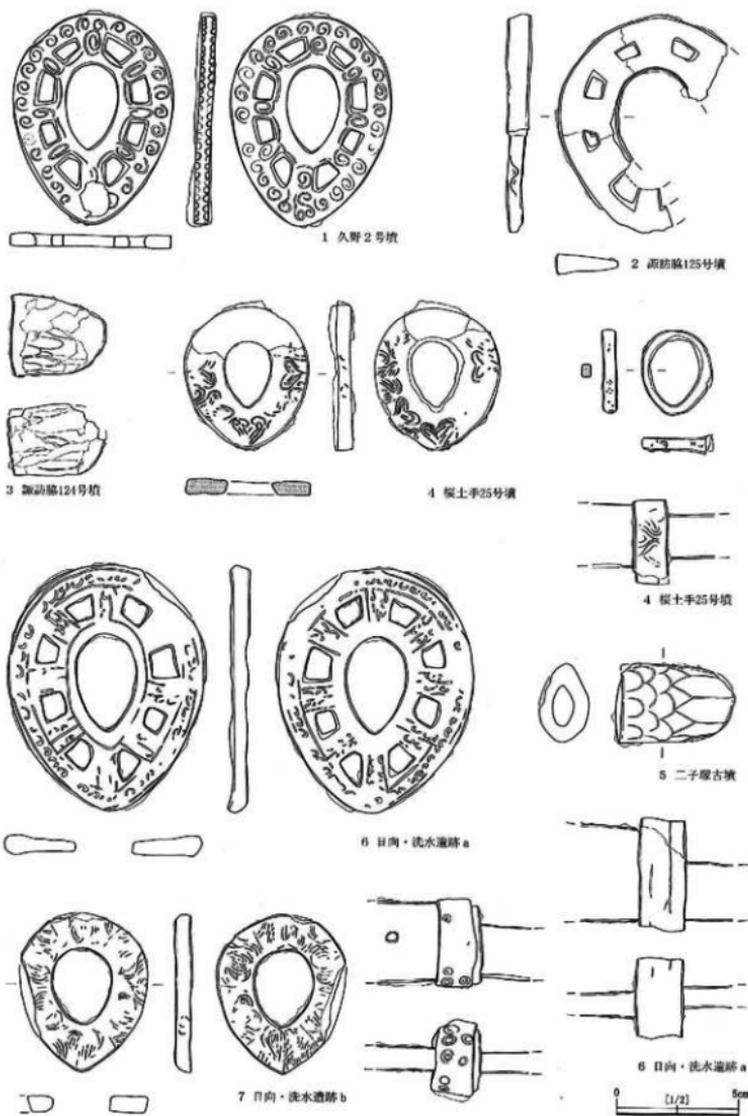
1. 直線C字状文
2. C字状文
3. 波状C字状文
4. 交互重半円文
5. 交互半円文
6. 波状文

第3図 鐔の耳象嵌文様模式図 (滝瀬・野中1995より転載)

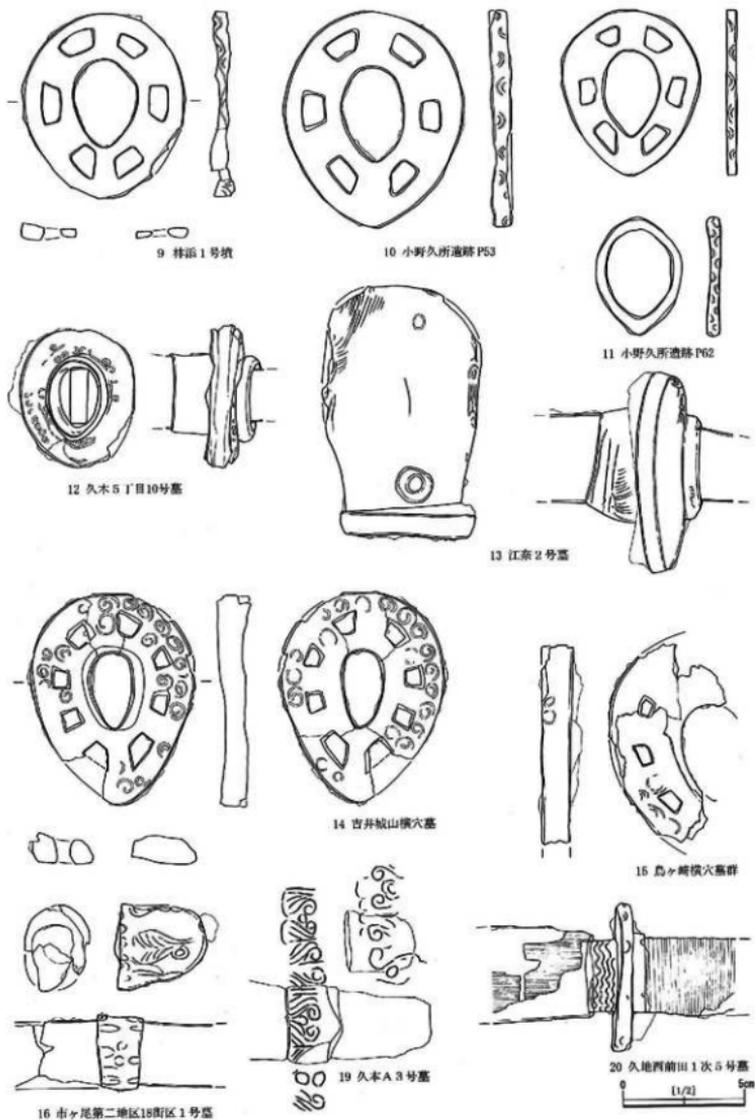
4. 象嵌大刀の編年

今回の調査では、象嵌大刀を熟覧することで多くのデータを得ることができた。まず、象嵌溝の観察結果により抽出した分類案について検討する。県内ではa類（蹴り蟹）とb類（ナメクリ蟹）の両方があり、I a、II a、IV bが多く、III aに属す資料は見られなかった。また、この分類案では、文様自体との相関関係は見出せなかった。しかしながら、象嵌文様の変遷と組み合わせで検討した場合、概ね古い方からIII a→II a→I a・IV bとなり、蟹痕は鋭角な断面から鈍角な断面へと推移する傾向にあると考える。また、断面形と対応して、金属線の幅は0.2～0.4mm程の細い線を用いるものが古く、やや太めの金属線を用いたものが新しいと考えられる。

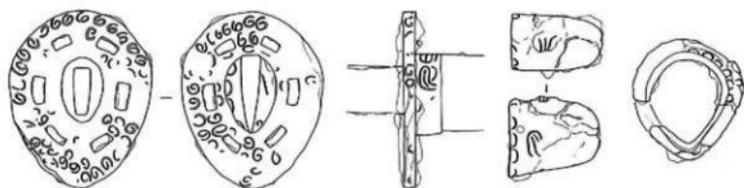
次に、大刀の編年について検討する。県内の象嵌大刀の中で、柄頭の確認できる資料は、江奈2号墓と了源寺古墳の2振のみである。いずれも亀甲繫文中に旋文を充填しているが不鮮明なX線写真であるため、詳細な文様は不明である。亀甲繫文大刀の編年案は多くの研究がなされているが、橋本氏の分類・編年案を参照したい（橋本1993）。亀甲繫文は亀甲繫鳳凰文（A）と亀甲繫花文（B）に大別され、亀甲繫鳳凰文は単鳳（A-I）、双鳳（A-II）に細別される。単鳳はハート形文→火炎文（A-I-a）、旋文（A-I-b）に変化する。了源寺古墳は頭椎で亀甲繫文が全面に施されており、やや古相を呈する。橋本氏の編年を参照しつつ、銀線の観察などを考慮すると第2段階（6世紀第3四半期）に比定されよう。江奈2号墓は円頭で、鐔、柄縁、鐙にも象嵌が施されているが文様構成が不明であるため第4段階（6世紀後半）または



第4圖 神奈川縣内出土象嵌大刀(1)



第5図 神奈川県内出土象嵌大刀(2)



21 三ヶ尻林4号墳



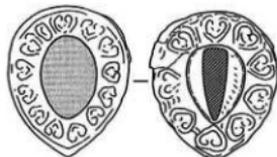
22 筑波山古墳



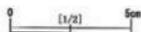
23 松本23号墳



24 トロコザ山古墳



25 狐塚40号墳



第6図 神奈川県外出土象嵌大刀

林福年	渦文系列	C字状文系列	ハート形文系列	旋文系列	耳象嵌	編年
第1段階						橋本第1段階 5世紀
第2段階						橋本第2段階 6世紀中～第3四半期
第3段階	 	  				橋本第3段階 6世紀第4四半期
第4段階	 		 	 	  	橋本第4段階 6世紀末
第5段階						橋本第5段階 7世紀初
第6段階						橋本第6段階 7世紀中～末

1.久野2号墳 2.諏訪臨125号墓 4.板手平25号墳 6.日向・洗水遺跡a 7.日向・洗水遺跡b 9.林形1号墳 10.小野久所遺跡P53 11.小野久所遺跡P62 12.久木5丁目10号墓 13.江奈2号墓 14.吉井城山横穴墓 15.鳥ヶ崎横穴墓群 19.久本A3号墓 20.久地西前田1次5号墓 21.三ヶ沢林4号墳 22.筑波山古墳 23.松本23号墳 24.トコチ山古墳 25.瓢箪40号墳 (脚印番号と同じ)

第7図 象嵌押編年図

鐔で渦線と2重のC字状文の久木5丁目10号墓、第3段階に群馬・筑波山古墳、やや後出して日向・洗水遺跡a、第5段階に栃木・トコチ山古墳としたい。ハート形文系列では第3段階に日向・洗水遺跡b、第4段階に比較的文様の崩れの多い板手平25号墳、(久本A3号墓群)、千葉・瓢箪40号墳とする。旋文系列では第4段階に江奈2号墓がそれぞれ比定すると考えられる。以上から、現在確認できる県内での象嵌鐔は第2段階以降と考えられる。福年に際しては、橋本氏の福年案を用い、新たに第6段階を設定した。第1段階は船載段階で5世紀、第2段階は6世紀中～第3四半期頃、第3段階は6世紀第4四半期頃で8意鐔が出現すると考えられる。第4段階は6世紀末頃、第5段階は7世紀初頭頃、第6段階は7世紀中期～末頃に比定されよう。

第3表 神奈川県内象嵌部位一覧表

No.	所在地	遺跡名	例図	図	種類	出土年	出土品	出土品
1	小幡原古	丸形2号鍔	○					
2	二宮町	波状C字状文	○					
3		波状C字状文						
4		波状C字状文						
5	新宮町	丸形2号鍔	○	○	○			○
6		二子塚古墳						○
7	伊豆原古	丸形2号鍔	○					
8		二ノ宮・尾頭山古墳	○					
9		横田1号鍔	○					
10	厚木市	小幡原古遺跡出土品 (P10)	○					
11		小幡原古遺跡出土品 (P10)	○	○				
12	沼津市	丸形2号鍔	○					
13	川崎市	江島2号鍔	○	○	○			
14		志津橋古墳	○					
15	横浜市中	丸形2号鍔	○					
16	横浜市	丸形2号鍔	○					○
17		下流木古墳 (出雲古墳)	○					
18	鎌倉市	丸形2号鍔						○
19		丸形2号鍔	○	○	○			

第4表 神奈川県内出土象嵌部一覧表

No.	所在地	遺跡名	出土品	出土品	出土品	出土品	出土品
1	小幡原古	丸形2号鍔	波状・波状C	二刀半刀文	—	—	1a
2	二宮町	波状C字状文	波状	—	—	—	1a
3		丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
4	新宮町	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
5		丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
6	伊豆原古	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
7		丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
8	厚木市	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
9		丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
10	沼津市	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
11	川崎市	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
12	横浜市	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
13		丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
14	横浜市	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
15		丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a
16	鎌倉市	丸形2号鍔	波状C字状文	波状C字状文	—	—	1a

柄頭の出土例は非常に少ないため(第3表)、ここでは柄頭の想定しうる資料について検討してみたい。上記の文様系列に入る象嵌は拵付で出土する事例からみると、亀甲繫円頭大刀と組み合わせになる確率が高いことが指摘される。特にハート形文系列では、柄頭が亀甲繫鳳凰文円頭の可能性が高いと考えられる。象嵌装には環頭が付く場合もあるが類例は少なく、円頭または頭椎が付く場合が想定される。また、柄頭が出土しない大刀が比較的多い理由として、有機質素材を使用した木装、鹿角装大刀の可能性も指摘できよう。

また、県内では鐔の出土例が比較的多いことが指摘できる(第3表)。県内20版中で15例が出土しており、象嵌大刀の3/4を占めている。また、鐔の平ではなく耳にのみ象嵌された資料の「耳象嵌装大刀」(滝瀬・野中 1995)(第3図)も比較的多く、5例出土している。その割合は県内の象嵌大刀の1/4を占める。また、文様は波状C字状文と交互重半円文の2種類に限られる。このうち6意鐔が3例あり、いずれも厚木市内に所在している。他は二宮町、川崎市であり地域的な共通点はみられない。

5. 象嵌以外の鑿技術

柄間に巻かれる銀線の鑿痕は、7古墳出土8振の銀線を検討したところ、同一の鑿痕は観察されなかった(第8図、第5表)。特に登尾山古墳では2振確認したが、鑿痕が異なることが分かり、別工人による製作の可能性も指摘できる。しかしながらピッチは比較的近い数値であり、同一工房(注1)による製作とも考えられよう。登尾山古墳、塚岡古墳、二子塚古墳出土の銀線幅は1.3~1.5mm前後で、厚さは0.1mm前後である。この銀線は堤状連珠文(鈴木・松林 1993)と言われるもので、粒が並んだように見せるための技術である。大刀の柄巻きに使われた銀線は板状で、厚さが非常に薄く、ピッチも細かい点が観察された。ところで同様に堤状連珠文が使われ、類似する技術がある。垂飾付耳飾や指輪などの装身具に用いられている技術であるが、これと比較してみると、線の形状、鑿の打ち方などが異なり、大刀装具の技術と装身具の技術では類似点が少ないことが指摘できる。

また、打ち出しによる装飾を施す大刀は2振のみを観察した。いずれも文様は唐草文あるいは渦文であるが、打ち出しの方法と素材の板厚が異なる点が指摘できよう。久野2号墳は金銅製のやや厚みのある板を用い、おそらく柄木に板を当てた状態で鑿を打ち込んでいると考えられる。鑿痕は半月状と確認できるが、カーブに合わせて斜めに打ち込んでいるため全面が当たらず、半月状に見えるため鑿の先端は楕円形状を呈していると考えられる。ピッチはやや不規則である。二子塚古墳は詳細な計測ができなかったが、非常に薄い銀板に幅0.2-1mm程の鑿を打ち込んでいると考えられる。鑿の形状等はクリーニング前であるため、観察は困難であったが、端部の打ち出しは丁寧に鑿の乱れはほとんど見られず、文様の崩れもないようである。

6. 地域的特徴と生産体制

以上、象嵌技術を中心に検討してきたが、象嵌大刀以外の装飾大刀の技術も踏まえてさらに検討を加えていきたい。県内の象嵌大刀は、第2段階後半の6世紀第3四半期頃から出土し、第3段階の6世紀第4四半期頃に盛行し、7世紀後半にかけて継続していくと考えられる。これに対応するように、東国における6世紀後半以降の装飾大刀の大量副葬と意匠の多様化は、前方後円墳から円墳・横穴墓群の被葬者にいたる幅広い階層に対応した畿内政権との関連を示唆するものと考えられよう。従来の中央集権的支配による一元的製作から変化し、部分的に地方分権による多元的製作を導入することにより幅広い階層への配布を可能にしていって考えられる。県内出土大刀は440振程が確認されているが(田尾・河合1997)、そのうち象嵌大刀はわずかに18遺跡20振である。出土分布を見ると特に伊勢原市を中心に秦野市東部、厚木市西部において比較的集中がみられる(第1図)。中でも伊勢原市域には象嵌大刀以外の装飾大刀出土の埴間古墳や登屋山古墳があり、独特の意匠が用いられた馬具や銅鏡などが副葬される特異な様相が展開している。またこの地域には、ハート形文系列や重半円文の耳象嵌装の象嵌大刀がそれぞれ比較的近い場所で出土しており、在地的な製作や、さらには同一工房における製作が行われた可能性も指摘できよう。特に畿内の要素の強い銅鏡などの副葬品の示す意義は、畿内政権との政治的連携を背景とした地方豪族による生産体制が存在したことを示すとも考えられよう。また象嵌技術や埴間連珠文、打ち出し技術はいずれも鑿を使用する点では同じであるという観点に立ち、そこに技術的連関関係を見出せないかと検討してきたが、今回の調査では検証が不十分であり、今後データの蓄積を継続していきたいと考えている。

本研究は平成22年度(財)かながわ考古学財団の研究助成によるものである。

また、資料閲覧に際し、次の諸氏、諸機関のご協力をいただいた(順不同・敬称略)。末筆ながら深く御礼申し上げます。小田原市:山口博、岡 潔、田中里奈、秦野市:霜出俊浩、大倉潤、伊勢原市:諏訪潤伸、立花実、三之宮郷土博物館、厚木市:佐藤健二、横須賀市:稲村繁、岩橋美子、逗子市:菊池信吾、佐藤仁彦、横浜市:鹿島保宏、川崎市:新井悟、三浦市教育委員会、埼玉県歴史文化財調査事業団:滝瀬芳之、栗岡潤、さきたま資料館:君島勝秀、佐野市郷土博物館:山口明良、邑楽町教育委員会:大堀一、森戸栄一、板倉町教育委員会:宮田裕紀枝、千葉県立房総のむら:折原茂

第5図-1、4 銅・柄縁金具、第5図-19、第6図-21~23、25、第9図-26、28は各報告書より転載又は一部改変した。第4図-2、3、4 鏝、5~7、第5図-9~16、20、第6図-24、第9図-27、30は各所蔵機関のご厚意により許可を得て、筆者が実測又は写真実測、トレース、掲載した。このうち第9図-27はほぼ原寸大でメキ図を作成し、第9図-30は関根孝大氏発表資料を実見に基づいて一部改変したものである。

(注1) 在地的な製作工房を前提として、工人が互いの作業を垣間見られるような状況下にある小規模単位の工房を想定している。

引用・参考文献

- 久沢暁光・馬目順一 1979 「日本・朝鮮における鑿状紋装飾の大刀」『物質文化』33
大谷宏治 2011 「象嵌装大刀の変遷—円頭・頭楯・半頭大刀を中心に—」『考古学ジャーナル』7 No. 616

- 櫻井達彦 1986 「頭椎大刀の福年」『考古学ジャーナル』8 No. 266
- 鈴木勉・松林正徳 1983 「石棺内出土金属製品の金工技術」『麻鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
- 柏木善治 2004 「神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討—大刀・鉄鏝について—」『かながわの考古学』9 (附) かながわ考古学附刊
- 勝部明生・鈴木勉 1998 『古代の技』吉川弘文館
- 香取雅彦・井尾敏雄・井伏圭介 1936 『金工の伝統技法』理工学社
- 鈴木勉 2006 『ものづくりと日本文化』橿原考古学研究所選書 (1) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 鈴木勉ほか 2008 『論叢 文化財と技術 百練鉄刀とものづくり』雄山閣
- 鈴木勉・河内國平編 2007 『復元七支刀』雄山閣
- 滝瀬芳之 1984 「刀頭・主頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX 古墳文化研究会
- 滝瀬芳之・野中仁 1995 「埼玉県出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」『研究紀要』第12号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 滝瀬芳之 2011 「旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について—埼玉県内出土象嵌遺物の研究 (その2) —」『研究紀要』第25号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 滝瀬芳之 2011 「古墳時代後・終末期における大刀の模倣」『考古学ジャーナル』7 No. 616
- 東京国立博物館 2003 『江田船山古墳出土 国宝銀象嵌銘大刀』吉川弘文館
- 東京国立博物館・九州国立博物館編 2008 『重要文化財 東大寺山古墳出土金象嵌銘花形環頭大刀』同成社
- 橋本博文 1986 「金象嵌装飾刀頭大刀の福年」『考古学ジャーナル』8 No. 266
- 橋本博文 1993 「亀甲製鳳凰文象嵌大刀再考」『考古学叢書』久保哲三先生論議文集刊行会
- 福島雅儀 2008 「古代装飾付大刀の政治的役割」『考古学雑誌』第92巻第2号
- 新納泉 1987 「戊戌年銘大刀と装飾付大刀の福年」『考古学研究』第34巻第3号
- 西山要一 1982 「辛亥銘文の発見」『埼玉簡荷山古墳 辛亥銘鉄剣修理報告書』埼玉県教育委員会
- 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌—大刀装具について—」『考古学雑誌』第72巻第1号
- 野垣好史 2006 「装飾付大刀変遷の諸段階」『物質文化』82
- 依田香桃美 2001 「古墳時代の垂飾付耳飾の技術復元について—保子里車塚古墳出土品・金製垂飾付耳飾の場合—」『古代文化研究』鳥根県古代文化センター

報告書引用文献

1. 赤星直忠 1932 「三浦郡浦賀町鶴尾島ヶ崎横穴墓群」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告』
2. 神奈川県教育委員会 1970 「登里山古墳」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』1
3. 佐野市史編さん委員会 1972 「佐野市石塚町トコチ山古墳調査略報」『佐野市史』佐野市役所
4. 神奈川県教育委員会 1973 「諏訪輪横穴群 (西部分)」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』4
5. 神奈川県教育委員会 1974 「尾根山古墳」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』6
6. 神奈川県教育委員会 1976 「三浦市江奈横穴群」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』4
7. 神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史』資料編20 考古資料
8. 横浜市 1982 「市ヶ尾古墳群の発掘」『横浜市史』資料編21
9. 小久保徹ほか 1983 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団第23集』
10. 橋本博文ほか 1985 『板倉町史』群馬県邑楽郡板倉町
11. 安藤謙基 1989 「千葉県成田市瓢箪40号墳の資料時味」『房総風土記の丘年報』13
12. 横須賀市人文博物館 1993 「吉井城山横穴群」『考古資料録』
13. 小田原市教育委員会 1996 『久野第2号墳』小田原市文化財調査報告書第58集
14. 後藤善八郎 1996 『久本横穴墓群発掘調査報告書』久本横穴墓群発掘調査団
15. 厚木市秘書部市史編さん室 1998 『厚木市史』古代資料編(2)
16. 久木5丁H横穴群調査団 1998 『神奈川県逗子市久木5丁H横穴群の調査』
17. 東京国立文化財研究所 1998 『東京国立文化財研究所所蔵X線フィルム目録』1 考古資料編
18. 久地西前田横穴墓群発掘調査団 1998 『久地西前田横穴墓群』
19. 村岡康子ほか 1998 「邑楽町松本23号古墳出土の象嵌大刀」『研究紀要』15 群馬県埋蔵文化財調査事業団
20. 関根孝夫 1999 「伊勢原の古墳」『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会』神奈川県考古学会
21. 武井 勝ほか 2000 『神奈川県藤野市樫土手古墳群の調査 (第2次)』樫土手古墳群第2次発掘調査団
22. 立花実 2007 「日向・洗水遺跡」伊勢原市教育委員会
23. 伊勢原市教育委員会 2008 「よみがえる銀象嵌—日向・洗水遺跡と古墳時代の刀—」
24. 安藤広子 2009 「小野公所遺跡第3地点」『平成20年度 厚木の道跡展 発掘された厚木2 道跡発表会発表要旨』厚木市教育委員会
25. 窪出俊浩 2010 「葉野市神奈川県指定史跡 二子塚古墳」『第34回神奈川県道跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会



1 諏訪脇125号装輝銀線断面



2 諏訪脇124号装精尻銀線断面



3 板土手25号装輝銀線断面



4 久木5丁目10号装輝銀線断面



5 小野公所道跡P53装輝銀線断面



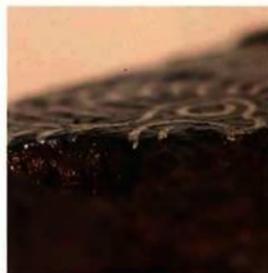
6 久木A3号装輝銀線断面



7 三ヶ尻林4号装輝金具銀線断面



8 三ヶ尻林4号装輝金具銀線断面



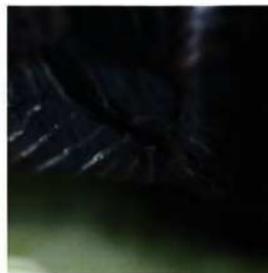
9 筑波山古墳円頭銀線断面



10 筑波山古墳圓頭銀線断面



11 松本23号装輝金具銀線断面



12 瓢箪40号装輝円頭銀線断面



13 久野2号墳鍔鍔鍔溝



14 諏訪脇125号墳鍔鍔鍔溝



15 諏訪脇124号墳鍔鍔鍔溝



16 市ヶ尾第二地区1号墳鍔鍔鍔溝



17 三ヶ尻林4号墳鍔鍔鍔溝



18 筑波山古墳円頭鍔鍔溝



19 瓢箪40号墳円頭鍔鍔溝



20 松本23号墳鍔鍔鍔溝



21 烏ヶ崎横穴墓群



22 埴面古墳鍔鍔溝



23 登尾山古墳鍔鍔溝



24 二子塚古墳鍔鍔溝



25 板土手25号墳押



26 日向・洗水遺跡無意押



27 日向・洗水遺跡八意押



28 小野久所遺跡P53押



29 久本A3号墓組



30 久地西前田5号墓組



31 久野2号墳金装装大刀



32 二子塚銀装大刀

研究紀要17

かながわの考古学

発行日 2012(平成24)年3月31日
発行 公益財団法人かながわ考古学財団
〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1
tel: (045)-252-8689 fax: 045-262-8162
<http://kaf@kaf.or.jp>
印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.17

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (5) Layer B1~L2	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (Ⅷ): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouti-Type Pottery Period, Part 3	13
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture (1)	21
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (9): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	31
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts (2)	41
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture (4)	59
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (9)	69
Masae Hayasi: The Studies Production Technique for Inlaid etcetera on Decorative Long Sword in Kanagawa Prefecture	79

March, 2012

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan